

不確実性下の改変

hrd

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

HUNTER×HUNTERのゾルディック家ミルク双子に転生したがいつのまにか鬼滅の刃ヘトリップしていた

目次

両人	10	09	08	07	06	05	04	03	02	01	独り
	166	147	126	113	96	75	58	41	16	1	

289	1	9.	9.	閑話	1	1
	2.	5	5		2	1
	5	後編	前編			
	藤咲紫緒の最終選別			入隊から2年後の靖兔と義勇		
		270	236		217	192

独り

01

人は時折巨大な何かに試される時がある

——目を開けると、独房の中にいた。

手足を縛られ地べたに転がされていた。知らぬ間の醜態にため息が漏れる。いくら寝ていたとしても拘束と移動に気がつかない自分が悪い。

ミルキカキルアどちらかの仕業かわからないが、拘束に縄を使うのはいかなものだろうか。外すのが簡単すぎる。せめて鉄の枷ぐらい使ったらどうだと思ったが、破壊してしまつたためどちらにしても意味がないと思いなおす。

そこで真面目に周りを見る。物は何もなく独房は簡素な造りだった。こだわりのある実家の独房ではない。

じゃあ、ここはどこなんだ。

円エンを使って周辺を探ろうとするが念ネン自体が使えない。記憶を辿るが攻撃された覚えはない。知らない間に呪念をかけられた可能性はある。

だが手足の拘束以外は、体には特別なものは見られなかった。

なぜこんな場所にいるのか心当たりがない。

蟻の王を倒した直後の記憶がひどくあやふやで何も思い出せない。記憶の海に飛び込むが、たらふく海水を呑み込んだだけで有益な情報は何も得られなかった。ただ、記憶を無くしているというのに焦燥が湧いてこない。それがなんだか虚しく感じた。

所詮はその程度の記憶ということなんだろうか。何が何でも思い出すという執着の無い自分に嘲笑が漏れる。ならば悩むのも馬鹿らしくなってきた。一か月前のその日の晩御飯は何だったでしょうという問いかけを悩むのと同じくらいには、なんだかめんどくさく感じてきた。

ただ、頭と違つて体は自分に起こっているこのあり得ない状況を打破しようと感覚を研ぎ澄ましていた。

コツ、コツと石が規則的な音を反響する。音は次第に大きくなり、何か近づいてくる。

暫くして黒い服を着た背の高い男が姿を現した。

「おい、出ろ。取り調べだ」

男は顎でジェスチャーし、高圧的な態度をとるが、瞳はせわしく動いていた。

偉そうに振舞うことで不安を隠そうと虚勢を張っていることが見て取れる。男が何に不安を抱いているのかわからないが、新しい情報を得たかったこちらとしては人を探

す手間が省けたことに肚の中で笑う。

脚の縄を外し、男の前を歩く。窓の無い廊下を進むにつれ、後ろの男がガタガタと震えだす。建物の奥からは禍々しい気配を感じる。

取り調べはダウトだ。男の怯え様は組織のトップに抱く恐怖とは種類が違つて見える。この建物の奥に何かがある。生贄としてそこへ連れていかれることで、後ろの男はその何かから助かろうとしている。保身のために他者を差し出す姿は弱者らしく身の程をわきまえていが、オレはオマエ程安くはない。対価を計り間違つている。大きく値引きしても国家予算ぐらいは出せよと思うが男にそんなことはできるはずもない。

肉体を操作し爪を伸ばす。手首に巻かれたロープを切り後ろの男に襲い掛かる。

足を払い、男の頭を床に叩きつける。片手で両腕を拘束し、もう一方の手で男の眼を潰す直前で止める。

「正直に話すことが生き残る選択だ」

それ以外の選択はオマエを殺す。

男は泣き出した。張りつめた緊張の糸が切れ、濁流の様に話し出した。

話をまとめると、いつのまにか上司が鬼になっており同僚が上司に次々と喰われていった。生き残るために受刑者を上司に差し出し、受刑者がいなくなると近隣の住民を攫つて差し出していた。

まあ、よくある話だ。人間は極限状態に陥るとどこまでも非道になれる。

「で、オレはなぜここにいる」

「知らないっ！ わ、私は君がなんでこの中に居たのか知らないんだっ！！ 本当なんだ

！ 信じてくれ!!」

もちろん、信じるわけないだろ。

手に力を入れ、男の腕を軋ませる。もう少し力を入れると骨は折れるだろう。男は痛みに叫び、尚も必死に話しているが、その様が握りつぶしたカエルがもがいているように見え、不快感が募る。

この鳴き声は、耳障りだ。

何度も質問の角度を変えて男が話せなくなるまで喋らせる。暫くすると男は壊れた人形のように同じことしか言わなくなった。知っている情報を話しきったことに約束通り拘束を外すと、男はこけながら走って逃げた。その姿はカエルが跳ねながら逃げているように見えた。

建物の深部へ歩を進めると、最奥に扉があった。扉を開ける前から既に濃い死臭と何かの気配がする。男の言う『鬼』と呼ばれる魔獣がこの扉の向こうにいるのだろう。ミルキヤキルアとよくやるRPGゲームの様に、その存在を明らかにすることでこのよく

わからないこの状況を一変させるトリガーとなる生き物が。

扉を開けると強烈な死臭が飛び出してきた。部屋を見渡すと血と肉塊にあふれていた。

奥にいる何かと目が合う。そいつは食っていた肉を投げ捨て、ニタリと笑った。新鮮な肉にテンションが上がっている。

なるほど、こいつが鬼か。言いえて妙だと思った。人の本質に似た姿だなと。

魔獣のように純粹ではなく、人間よりも自己中心的な本能と欲求の生き物。姿も本質も人の様で人にあらず。

鬼は嬉々として言った。

「新しい餌だ。餓鬼だ餓鬼だつ。餓鬼は食われる時間だ！」

「昔言われたのは、ガキは死ぬ時間だったよ」

言葉と同時に鬼の体から心臓を盗み取る。だが握っていた物はただの肉塊だった。

こいつに心臓は無いのか。

睜目している間に鬼は体を再生して穴を埋め、肉体を岩の様に硬化した。

自己再生と身体強化系の能力か。だがヤツからは念を発動しているようには感じられない。こちらは分が悪いことにまだ念を使うことができない状態である。能力のあるヤツに念も武器も使用できない状態は非常にだるい。

「おい、それがお前の念能力か」

「ネン能力？ んなもん知らねえなあ！ これが俺の血鬼術だ！ 肉体を岩よりも強固にする力だ！」

「ケツキジュツ……？」

念とは違うのか？

目の前の鬼はニタニタと下卑た笑みを浮かべている。恐怖はなく、頭が幸せなヤツだなとしか思わなかった。自分の能力を開示し、絶対的に強いと疑いもせず盲目的に自分だけの楽園を作り上げている。井の中の蛙という言葉が当てはまる。熱した石でも落としてやろうか。

息を深く吸い、再度念をイメージしてみるがやはり念は使えなかった。だが念とは違う、何かもつと前段階の何かが体に起こった。血の巡り、体温の上昇、念の生命エネルギーとは違う体の活性化を感じる。

鬼が強化した腕を振るう。瞬間、間合いに入り眼球を潰す。間髪入れずに胴体を蹴り上げ壁にぶち当てる。壁に巨大な穴が開き、ヤツは破片と共に外へ飛んでいった。

空いた穴から青白い光が差す。穴から出てみると外は夜だった。空を見上げると月が目に入った。月は仕事をする時によく見ていた。

月がきれいだと眺めていると、体勢を整えた鬼が勢いよく殴りかかってきた。

先ほどまで立っていた地面は抉れ、クレーターができています。普通の人間ならば一発で死んでいるのだろう。

だが威力はあってもスピードが遅い。知能が低く動きに無駄もある。戦い方はおろか格闘術すら身につけていない。赤ん坊が与えられたおもちゃをただひたすら床に叩きつけている状態と何ら変わらない。

ただ一点、こちらにとっては自己再生が邪魔である。生物である以上、何かしら欠点は存在する。ただその欠点を見つけることができなければ、再生能力が尽きるまでコイツを殺し続けなければならない。

長期戦を想像し、思わずため息が漏れる。めんどろくさいことは嫌いなんだ。

気配を殺し、鬼の視界から消える。肢曲を使い、残像で居場所を攪乱しながら弾丸の速度で小石を投げつける。壁の破碎と拳と蹴りでヤツの頭を途切れることなく何度も強打する。

始めの内は直ぐに立ち上がっていた鬼だが、何時間も経過すると反応が鈍くなっていた。それに伴い、体にも傷が入りだし再生力が追いついていかなかった。

鬼とはその程度の生物なのか。一人で勝手に期待し、勝手に失望する。鬼という生物に興味が消えていく。情報を吐かせて痛めつけた後、殺すことを視野に入れる。

鬼の注意力を散乱しつつ、背後から忍び寄り爪で眼を潰す。眼球を抉り取り、痛みで

鬼が首を反らしたと同時に手刀で首を刎ねる。

鬼は離れていく自身の体を見ながら叫んだ。

「頭がっ!! 岩より硬い俺の体がお前なんかの手で斬られんだよ!!」

鬼は、ダメージを受けると硬化が弱まることを知らなかったようだ。恐らくダメージを受けたことがなかったのだろうけど。狭い自分の国で大将と成れてさぞ気分がよかつたのだろう。まあ、オレには関係ないけど。

鬼の爪をはぎ取り、首を地に打ち付ける。自分で自分の首を絞める、ならぬ自分の爪で自分の首を打ち付ける。

鬼は何かを叫んでいたが全く魅力的に聞こえなかった。

首と胴体が切り離されても痛覚は脳に伝わるらしい。硬化と自己再生が低下していくヤツの体を斬り刻みながら、知りたいことを聞いていく。極度の疲労とストレスは精神を脆弱にする。始めは口が堅かった鬼も胴体を刻むにつれて話すようになってきた。

だが残念なことにオレが欲しい情報は得られなかった。

刻んで弱った鬼を見て、思ったことをふと口にする。

「血鬼術だっけ、それと再生の能力も無限ではないんだな。オマエらもただの生き物なんだな」

こいつらが使用する能力はM マジックポイント Pみたいに消費していくのか。MPの源は喰った人

間か。

そう呟いた時、鬼が激高した。

大声で喚き怒気をむき出す首に、何をそんなに怒っているのかわからなかった。

怒りにはエネルギーが必要だ。体の再生もできない状態で使う最後のエネルギーの使い道が怒気ということに、理解できなかつた。無駄に思えた。何もできずただ喚くのは弱者の特権だ。

鬼という未知の生物への期待が下がっていくのとは反対に、夜が明け太陽が昇る。暗闇が白み、朝日が周囲を照らし始め、太陽に灼かれて鬼は消滅した。

なんだ、吸血鬼みたいに太陽で死ぬのか。そもそも吸血鬼は西洋の鬼ともいわれたいかと思ひ出す。人間はあつけなく死ぬが、鬼も死ぬ時はあつけない。

ため息と共に死角に向かって石を投げつける。鬼と戦っていた時から新たな気配を感じていた。

隠す気もないのだろうか視線がうるさい。

「そろそろ出てきたらどうなんだ」

気配のする方を睨みつけると男が姿を現した。がたいのいい、袖のない詰襟を着た、奇妙な男だった。大粒の輝石が3つもついた額当てをし、その横にジャラジャラと小粒

の輝石を垂らしている。左目のペイントも特徴的だ。

視線も見た目もうるさい奴だ。こういう種類のうるさい奴はヒソカで一人で十分である。

だから願った。できれば無口な奴であってほしいと。無口であるが故に見ただけにインパクトをおいたという方向性を願うが、恐らくそんなはずはないのだろう。嫌な予感がして気分が下がる。

「ずっと見てたようだけど、絵を描くのが趣味なのか？」

挑発的に笑って皮肉を言う。

「お前、拷問のやり方が慣れてるな。……何者だ？」

「名前を聞く前に自分から名乗るもんじゃねえの」

「ふん、俺は『元』忍の宇髓うずい天元様だ。その界限では派手に名を馳きせた男。そして鬼殺隊・

音柱だ!!」

ドヤアツと効果音がつきそうな言い方のため息が出る。見た目だけじゃなく口もうるさい元忍者だった。忍者はみんな自分が大好きなのか。忍べよと毒づく。

だが新しい情報も得た。キサツタイとは忍者の隊名なのかよくわからないが、そういう界限の奴ならば『反応』するのかもしれない。

ソイツを注意深く観察しながら言った。

「クルイ・ゾルディック。ゾルディック家の者だ」

「……ゾルディック。外国人か」

外国人か？

ソイツは家の名前に反応しなかった。

瞳孔の動き、表情、動作、呼吸、脈拍、体温、手元から足先に至るまで人間は情報を様々な形で表現する。だから五感全てを使って相手の情報を細部まで盗み取る訓練を受けてきた。

だが読み取れる反応はすべて正常だった。とぼけているようには見えない。と、いうよりもその界限の人間なのにその名を知らないように見られる。この地域では家の名が知れ渡っていないだけかもしれないが。

現在得られている情報を整理する。鬼という存在。念が使えない状況。念とは違う能力。通じないファミリーネーム。

まだこれだけの情報では結論付けられないが、過去の経験から薄々とある可能性が浮上する。時間遡行、異世界トリップ、未知なる大陸への上陸。

異世界転生トリップ経験者のオレの読みでは『ハンター×ハンターあの世界』から違う『世界』に来たのだろう。嫌いだっただけの根拠のない自身が湧いてくる。

また独りになった。ミルクとやらだらしながらゲームがしたい。怠惰な日常に戻り

たい。特殊な家族ではあったが、別に家族が嫌いなわけではなかった。家族にもひた隠しにしていた真実が突然消えた。

体の中心が空虚になり、乾いた嗤いが口からこぼれ落ちる。両手に絶望がいつばいで希望が持てません。

人は時折巨大な何かに試される時がある。そんな時はどんなに考えても答えが出ない。どうにもならないことをオレは知っている。巨大な力に流されて活路を見出すしかない。オレは今また新たに、巨大な何かに試されている。

朝焼けが空を染めていたが月はまだ見えていた。

ミルキ、こつちの世界も月がきれいだ。帰るまでゲームはお預けだ。

心の中で怠惰な日常に別れを言い、目の前の男に答える。

「そうだな、遠いところから来た……」

「お前、何者だ？ さっきの鬼との戦い方、拷問、お前俺と同じ側の人間だろ」「暗殺者だ。仕事として請け負えばそうなる」

——人形のように生産性を求めて殺せ。

幼い頃からイルミに刷り込まれた言葉が頭に響き渡り、自身が無機質に変わっていく。

自分の中にある精神の海が一瞬で凪ぐ。波の無い、無の空間が一面に広がる。

ソイツはでかい目をより一層見開いた後、そつと瞳を閉じて、開いた。

「お前、そうか……。よし、俺についてこい。継子にしてやる」

差し伸ばされた手と共に、ソイツは何かを決意したかのようにそう言った。

「ツグコ……?」

「俺がお前を育ててやるってことだ。細っこいし」

「いらねえ」

「んだとこの餓鬼!!」

「ガキじゃねえよ」

うるさいを具現化したコイツと一緒にいると精神がすり減る。一人で旅しながらあ
の世界に帰る方法を探した方が有意義だ。

「いや、お前餓鬼だぞ。10歳そこらだろ」

19歳は十代前半じゃねえよ。オマエの目は節穴か。

建物に近づき窓まで寄る。そこでふと気がついた。

窓はこんなに高かっただろうか？

嫌な予感がしながらも、そうでないことを願いながら窓を覗き込んだ。窓には10歳
そこらの昔の自分が映っていた。

「マジか、ガキじゃねえか」

「俺様の言う通りだろ」

男の指摘通り、これまでにない程テンションが降下した。ミルキが見たら「いつもの死んだ目が腐って悪臭を放っている」と言うのだろう。

虚勢ではなく、一人でもやっていける自信がある。やわな育ち方をしていないことに、今さらながら家族に感謝した。

「悪い話じゃない。鬼の殺し方、情報も教えてやる」

単純に、餌の出し方の上手さに感心する。やはり鬼は効率の良い殺し方があるようだ。予想だが、念能力の様に異能も鬼によって異なるのだろう。今回殺した鬼の異能は皮膚の硬化。ならば空間や時空、次元を操る鬼がいるのかもしれない。

自分の中で勘定が動いた。

鬼との戦い方、情報が揃うまでコイツの言う通りにした方が得策である。その後は勝手に動く。

オレはあの世界の家に帰る。そのために一匹でも多くの鬼に出会い、目的の能力を探し出す。

今後の方針が決まった。

それでもコイツと行動を共にするのは心底嫌だ。口がうるさい奴は母、キキョウで十分である。

だからオレは最大限の抵抗の意味を込めて、目線を逸らして言った。
「……よろしく頼む」

ソイツは顔をキョトンとさせた後、ニタアと笑った。新しいからからかい相手を見つけたような顔だった。

「いいか！ 俺は神だ！ お前は塵だ！ 俺が烏は白いと言ったら烏も白になる！ もう一度言う、俺は神だ！！ 俺を崇め！ そして跪け！！ 今日からお前は俺の継子だ！！ お前を派手に迎え入れる！！」

さっそく機嫌は急降下し、口が蔑称を放つ。

「うるさガミ」

そうしてオレは宇髄天元の継子となった。

人それぞれに戦い方がある

父は星が好きだった。

錆兎さびとも父親が好きで星が好きだった。

秋から冬に移り変わる日の夜だった。星を見るには良い季節に、父親が星を見に行こうと錆兎を誘った。母親は幼い妹を寝かしつけるために家に残り、錆兎は父親と二人で見晴らしの良い場所まで山を登った。

夜の山は、山育ちの錆兎でも少し不気味に感じた。

空気は冷たく澄んでおり、星がより一層輝いていた。長いこと寝そべって星空を眺めていると、星が2つ流れた。それを父に伝えると「流れ星に願いごとをすると願いが叶う」と笑っていた。

錆兎は願った。漠然と、家族が幸せでありますようにと。

父との会話は楽しかったが、だんだんと眠気が差してくる。

うつらうつらと舟をこぎ出した錆兎を背負い、父親はゆっくりと山を下りた。

父の背中が暖かく、先程まで寝ころび下敷きにしていた草の香りもする。肩口に頭を

くつつけ、その温もりと香り、声を堪能した。

鍔兎の顔が自然とほころぶ。この瞬間を幸せに感じた。流れ星がもう願い事をかなえてくれたと。

山を下る揺れが深い眠りを誘う。そんな朦朧とする意識の中で、父は説いた。

「鍔兎も男だ。男なら母さんと妹を守るんだぞ。生きていると辛いことがたくさんある。だけどな、どんな辛いことがあつても立ち止まってはならない。前に進むんだ。進む以外の道はない」

眠たいながらも父の口癖に鍔兎は頷いた。

山を下り、家が見えてる。家に近づくにつれ、父親は家の様子に目を疑った。家を出ていく時に閉めたはずの戸が碎け散っていた。

強盗を疑った。妻と娘の身を案じ血が引いていく。

半分寝落ちていた鍔兎を起こし、家から離れた茂みに隠れるように言いつけた。

「いいな、何があつても呼びに来るまで絶対にそこにいろ」

「父さん？　家になにかあつたのでしょうか。母さん達は大丈夫でしょうか」

恐怖と不安が鍔兎に伝播する。父親は鍔兎の頭を撫でようと手を上げるが、自身の手が震えていることに気づいた。隠すように、すかさずもう片方の手で震える手を押さえ

つけ、錆兎の頭を強く撫でる。

「今、錆兎に父さんの勇気を送った。大丈夫だ。父さんが確認してくるから、ちよつと待っていてくれ。男だから一人でも待てるよな。……それじゃあ、行ってくる」

父親はそう言つて家へ向かった。だが、いくら待つても錆兎を呼びに来ることはなかった。

戻つてこない父親に不安を抱いた錆兎は、ゆつくりと家の近くまでにじり寄つた。こうしている間に父親が戻ってくるかもしれないという期待もあった。

風が緩やかに吹き、音が流れてくる。耳を澄ますと父の声がかすかに流れてくる。家の中で何かが起きている。

父さんは「母さんと妹を守れ」と言つた。それは父さんも含めた家族を守るのが自分の役目だ。

「何があつても待っている」という父の言いつけを破つて錆兎は必死に玄関へ駆けた。家の外に立て掛けてあつた斧が見当たらない。父さんが持つて行つたのかもしれない。

錆兎は近くにまとめてあつた薪を一本持つて玄関へ向かった。

壁に背を向けながら慎重に進むと、戸が砕けていた。近くまで行くとネチャリと何か

を踏んだ。手でソレに触れてみると、温かい液体だった。匂つてみると鉄臭かった。

あつてほしくない。じわじわと嫌な予想が錆兎を侵食する。

雲にかかつていた月が顔を出し、月の光が辺りを照らし始める。見えなかった何かにも光が射しかかる。徐々に姿が見え、自分の呼吸の音が大きくなる。

赤黒い水、足、血まみれの……母の着物。恐怖に染まった母の顔。

声がでなかった。息を吸つてるのに呼吸ができない。頭を強く殴られたような衝撃に持つていた薪を落とした。何が起きているのか理解したくなかった。

——錆兎に父さんの勇気を送った。——辛いことがあつても立ち止まつてはならない。進む以外の道はない——

父の音が頭に響く。手が錯乱している錆兎の頬を殴り、呼吸を正常に戻す。

落ち着け、落ち着けよ俺。

もう一度母を見た。母は両手を広げて血に塗れていた。母が妹を守ろうと立ち塞がる姿が浮かび、涙が止まらなかつた。

——「にげ……ろ、に……ろ……」クチャクチャクチャクチャクチャ——パ
リッ。

音が錆兎の気を引いた。家の中からかすれる呼吸とクチャクチャと何かを食べる音がある。変わり果てた母の衝撃から現実に戻り、父と妹の存在を思い出す。

そつと家の中を覗くと父と目が合った。父はナニカに腹を喰われていた。逃げろ、錆兎。

声はなかった。だが父の口がそう言っていた。

部屋の奥には妹の首が見える。だが首から下は繋がっていない。再度父を見た。父の目はもう何も見えていないようだった。

再び父の言葉が頭に響いた。

『男なら母さんと妹を守れ。男に生まれたなら、進む以外の道はない』

家族は既に化け物に襲われて死んでいる。この絶望に耐え、父に守られたこの命だけでも逃げて守り抜くべきなのだろう。父、母、妹の体を化け物に喰わせて――。

そんなこと、できるわけないだろ。あいつに喰わせるものなんて何も無い。俺の家族の体を、返せ！

悲しみを通り越して怒りで全身が熱くなる。

錆兎は包丁を持ち出した。両手で強く握りしめ、父を喰っているソレに向かって走り出した。

――怒りは時として全く減衰しない

クラピカが世界7大美色の緋色の目を持つクルタ族であるということは出会う前から知っていた。幻影旅団の緋の眼の強奪に伴うクルタ族の襲撃を阻止しようと奔走したが、オレごときではうまくはいかなかった。クルタ族はクラピカを残して全滅し、闇市で緋の眼は売買された。

それから数年経ち、オレは旅団と行動を共にするようにした。それはただ、緋の眼の所在の把握と、首を突っ込んでくるキルアを確実に守るための手段の一つに過ぎなかった。

だがそれは間違いだった。

旅団の一人、ウヴオーギンを殺したクラピカと対峙した時、旅団と共にいるオレを見てクラピカは激高した。

なぜお前がここにいるのか。旅団なのか。旅団とはどういう関係なのか。答えによつては殺す。

その全ての問いに答えることはしなかった。

ただ、お互い怒りと譲れないもののために殺し合った。

その時のことを思い出している理由は、現在、同じように本気の怒りを目の前にしているからだ。

話をさかのぼること3日前、最終選別の藤襲山ふじかさねやまに到着した。

不思議な山だった。山をぐるりと囲むように、藤の花が一年中狂い咲いており、麓から中腹にかけて藤が生息している。

話を聞くにこの山には、鬼殺隊に捕獲された鬼が住んでいるらしい。鬼は藤の花を嫌い、花に近づくことができない。故に、鬼はこの山から出ることはできない。絶海の孤島ならぬ樹海の孤島。花の牢獄。

生かさず、殺さず、搾取る。使えるものは鬼でも使う。

そんなこんなで最終選別の内容は、鬼のいるこの山で7日間生き残ることだった。

生き残ること。つまり鬼を殺せなくてもいいということ。鬼と対戦するもよし、知略を巡らせて逃げるもよし、戦わずして殺すもよし。つまり、ウザイ奴がよく言っている『生きてるやつが勝ち』ということなんだろう。

頭の片隅に出てきた宇髓の存在を消し終わると、周りにいた受験者の姿は山の奥へ消えていた。記憶の中の奴に辟易する。

クルイは傍に咲いている藤の花を一房切って山を登った。

そんな姿を藤色の着物を着た女性、鬼殺隊当主、産屋敷耀哉うぶやしきがやの妻、あまねがじつと見ている。

山は長閑だった。藤の花を片手に歩いているからだろうが、鬼にも人にも出会うことはなかった。真つ暗闇の、ただの山だった。

藤の花の効力を知りたくなり、鬼の気配を元に近づくが、ある程度の距離になると奴らは逃げていった。

匂いが嫌いなのはわからないが、鬼は本当に藤の花が嫌いみたいだ。虫がハープを嫌うみたいに。

山の中を歩き続け、小川の近くに拠点を置く。花も枯れないように水を入れた竹筒の中に浸した。

オレはカルトと違って生け花はできない。

ウザイ、訂正、ウズイの継子となって様々な鬼を見てきた。柱となる宇髄に討伐される鬼はそれなりに力のある鬼だった。鬼は基本群れない。人間を喰う程身体的に強くなり、異能も発現する。それに比例して皮膚も硬質化する。

それを聞いて疑問に思った。

なぜ昼間に鬼を探し出して消さないのか。その答えは簡単だった。分からないからだ。日中鬼がどこに潜んでいるのか、ある程度人を喰った鬼は人間に擬態し人間社会に紛れ込んでいる。一目では鬼と人間の区別がつかないとのことだった。

「だが俺達柱は違う！ 気配で鬼が分かるのだ!! 俺を讃えろ!! そして崇めろ!! 自分の無力さに跪け！」

派手に自分を称える宇髄を冷めた目で一瞥し鼻で笑う。

「オーラでわかるだろ」

検証をするにはまず、鬼が必要だ。そのために鬼の気配を探る。

宇髄と行動を共にしてすぐにオーラが見えるようになった。やっと念が使えるようになったのかとテンションが上がったが、そうではなかった。

念の様で念であらず。その名も全集中の呼吸。

クルイは念で見えていた時とは違う個々人のエネルギーオーラが見えるようになった。それは奇しくも念を使うような感覚だった。

オーラのことを宇髄に伝えると、その前段階、瞬発的な力の増幅が『全集中の呼吸』といい、全集中の呼吸を常時使用している状態が『常中』という。その際、自身の能力が上がるると共に周りの気配もより敏感になるとのことだ。そしてオーラの可視化は常中の応用技、全身の能力を目に凝縮しているのではないかという推測だった。

つまり念を使おうとする余り、呼吸を念のように勝手にアレンジしてしまったということなのだろう。目にオーラを集めて凝キョウをするように。

難点は範囲が視界に留まっていることだが、それでも人間と鬼の区別をオーラで見分けられるようになったことにより、今まで以上に宇髄にこき使われるようになったのは言うまでもない。

遠くに鬼のオーラが見える。走るスピードを上げ、鬼に近づき宇髄に手配してもらった日輪刀、双刀を構える。刀を扱えないことはないが、刀よりもナイフの方が扱い慣れている。余談だが父、シルバが収集していたベンズナイフのお気に入りをよく勝手に使っていたのは良い思い出。その度に窘められていたけど。

刀を作る際はベンズナイフに限りなく近いものを作ってもらいたい。

鬼の手足を切り落とし、再生する前に延髄を叩き気絶させる。気絶した鬼からは、手足が生えてこなかった。

意識的に促さなければ体は再生しないということか。

鬼を縄で縛り、拠点に連れて帰る。捕縛した鬼をさらに木に縛り付け、かねてより試してみたかったことを検証する。

ここには宇髄の監視は無い。やりたいことをやるだけだ。

鬼の意識を戻し、日中陽に当たった水を鬼にかける。鬼は喚いたが生きていた。次に宗教団体から買った聖水をかけてみる。これは全く効いていなかった。最後に藤の花を

浸していた水をかけると鬼は痺れ、数分動かなくなった。花を刀に塗り、鬼の腕を斬る。鬼は叫び、切り口が化膿した。

藤の花は鬼にとって毒となる。匂いで追い払い、浸した水で動きを止め、花が毒となる。

藤の花の種子は豆である。豆が魔滅マメとなり昔話の様に鬼を追い払うのかはわからないが、手に入り次第検証する価値はある。

水で攻めた次は十字架、胸に木の杭を打つてみたが特別なダメージは得られなかった。やはり鬼は吸血鬼とは違う生物なのだろう。

思いつく事を試していると朝日が昇り、気がついた時には鬼は灰となって消えていた。

もつたいないことをした。まだ確かめたいことはあったというのに。絶食可能な時間、生存可能な影の濃度、鬼同士の共食いによる強化の影響など確認できていない。それもまた鬼を調達すればいいだけの話だが。

自分の不手際のため息を吐いた後、睡眠時間を取り戻すように眠りについた。

目を覚ますと、空が夕焼け色に染まり陽が悪あがきをしていた。

もうしばらくすると鬼が動き出す。動きに制限がかかっている今の内に見つけ出す

方が得策である。

鬼を探しに散策していると人に出会った。その子は魚や薬草を持っていた。人に出会ったのが嬉しかったのだろう、どうでもいいことを話し出した。

どうやら少年を介抱しているらしい。まだ気を失っており、日が暮れるまでに元の場所に戻りたいのだが、一人で少年を守りながら鬼を迎え撃つのは気が引けるとのことだった。

だから何だ。つまりは、手を組まないか、ということなのだろう。

保険を掛けたいのだ。8日目の朝を迎えた時、人助けをしていた為鬼と戦う回数が少なかったと。一人が介抱し、もう一人が鬼を迎え撃つ。生存率が飛躍的に上がる。定石だ。

オレは普段しない人好きのする笑顔で断った。その代わりに持っていた藤の花をソイツに渡した。

100%良い人間も100%悪い人間もいはしない。人はそれぞれ腹の中に思惑がある。

そうしている間に日が暮れた。月はまだ寝起きで位置が低いが、鬼は寝起きなのに活発に動き出した。

少し離れたところに複数の鬼の気配がする。近づくとつれて鬼と人間のオーラが見えてきた。こらえきれない喜びが口端を上げる。

そこには少年が複数の鬼と戦っていた。少年は狐のお面をかぶり、黄みがかつたピンク色の髪をしている。

勝手に戦闘に割り入り、鬼を斬っていく。実験に見込みのありそうな鬼は手足を落として気絶させる。狐の少年の視線を感じたが、気にすることなく不要な鬼の頸を刎ねていった。

必要な鬼以外を片付け終わると、狐の少年がこつちに向かつてきたが、それを無視して持ち運びやすいように鬼をコンパクトに刻み続ける。頸を斬らないように、肩から下を丁寧に。3体もいれば十分だろう。

狐の少年は、鬼を刻む作業を近くでじっと見つめて口を開いた。

「礼を言う、助かった」

「助けたつもりはない。欲しいものを手に入れただけだ」

「鬼をか？ なぜそいつらの頸を斬らない」

「声音が不快感を示している。」

手を止め、少年を見る。おそらく鬼が憎くて堪らない側の人間なのだろう。身内が殺されて天涯孤独になった者が鬼殺隊に入るのはよくある話だ。そんな種類の人間ほど、

鬼を利用すると言うと激高する。話の合わない人間に説明するのは労力の無駄だ。

少年の言葉を聞かなかつたことにして、鬼の髪を掴み立ち上がる。目の前の少年も続いて立ち上がるが、反応しないオレに苛立つた雰囲気を醸し出す。

不愉快なことがあつても少しは感情を抑えろと、心の中で盛大に毒を吐く。

彼には戦闘以外考える頭がないのだろう。探偵が事件関係者に懇切丁寧に犯行、証拠、犯人、動機を教えてあげるのが義務であると思つていられるように、オレが鬼を使つてこれから何をするのかを説明するのが当然だと思つている。この時代に推理小説があるのかは知らないが。

質問すればなんでも答えが返つてくると思うなよ。

「おい、待て。まだ答えてない」

羽織を掴まれ引き留められる。納得する答えを聞くまで離さないと面の奥の目が語つており、気怠い溜息を吐いた。

面倒くさい奴に捕まり、覇気のない声で言った。

「調べる。オレは鬼について知識が浅い。日光で消滅するが、日中でも陽が当たらなければ活動できるのか。活動できるならば、どの程度の影なら大丈夫なのか。共食いと強くなるのか、とか。それらをまだ知らない。知識がなくても鬼を殺すことはできる。だが知識があればより多くの鬼を楽に殺せる。効率よく殺すことができるならば

多少の手間は惜しまない」

「だからこいつらを利用する」淡々と告げると少年の苛立ちに殺気が混ざった。

「それらを調べている間に、他の子供達が鬼と闘って死んでいく」

「その意見を尊重はするが重要視はしない」

そんな些細なことは考慮しない。ここに来る前に鬼退治をして経験を積んでおくべきだったという後悔だけだ。

少年は深く息を吸い、刀を強く握った。鋭い殺気が放たれる。

——くる。

「水の呼吸——壱ノ型 水面斬り」みなもぎそう呟いた瞬間、少年は手を交差して素早く居合切りをするように刀を振った。

直ぐ後ろに跳んで躲したが、持っていた鬼達の頸は斬られた。掴んでいた首が急激に軽くなっていく。

少しだけ、苛ついてきた。精神の中にある怒りの黒い粉が少しだけ舞った。

内々に無い無いで済ませてやろうか。人一人死んだところで鬼に喰われたと思われ
る。

「なぜ鬼を殺さない。この最終選別でも鬼に喰われた子供がいる。一匹でも多くの鬼を殺して人が喰われないようにするべきだろう。力ある者は弱きものを守るべきだ。俺

はもう！ 人が目の前で死ぬのを見たくない！！」

少年は刀を構えたまま話し続ける。睨みつけ、息を吸い、吐き出す。漏れ出ていた怒りを内に込めているようだった。

「俺は鬼が憎い。父、母、妹、俺以外の家族が鬼に喰われた。母は戸口で両腕を広げて死んでいた。部屋の中にいる妹を守るために母が盾となったのだろう。母と妹が決死で戦っている間、俺と父はのんきに山で星を見ていた。その後父も鬼に喰われた。分かるか！ この気持ちがつっ！」

知らないな。ただ言えるのは、

「殺したのが鬼でよかったな」

少年は激怒した。誰の内にもある荒々しい殺気を放っていた。

その殺気をもって、クルイは時として怒りは全く減衰しないことを思い出した。弟の友人、金髪ネコ目の知り合いが頭の奥にちらついていた。

「ふざけるな！！ 殺したのが鬼でよかっただど!? 前触れもなく家族が殺される!! 理不尽に!! それをつ!!」

その怒号に、言葉の選択を誤ったことに気がついた。

宇髄に教えてもらったことだが、この国の法律では私刑は許されていない。『家族が殺されたから復讐した』は同情を買うが罪も買う。ゾルディック家の家業も場合によつ

ては敵を作る。

復讐者にとつては気にしないのだらうけど。

人でなく、正当な理由をもって殺せる相手、鬼でよかつたな。そういう意味で言つたつもりだったが伝わってないようだ。ミルキによく言われるが、オレはイルミに似て言葉が足りない。

まあ、どうでもいいけど。鬼狩りは害虫駆除とさほど変わらない。

思考がずれている間に少年が突進し、刀を振る。「水の呼吸——」と、技を繰り出してくる様子を避けながら観察する。

音の呼吸以外の流派を初めて見た。純粹に剣と体の捌きが綺麗だと思つた。

暫く見ていると、少年の体が疲弊していくにつれて技も雑味が混ざりだす。技を習得しても戦い方は習得していないのだらう。技と技の合間に隙が生じる。トリツキーな動きも無駄が多い。二手先の動きが読めても三手先が読めていない。

刀の刃を返し、一瞬で距離を詰める。

音の呼吸——壺ノ型 とじろき 轟

刀を交差して標的に叩きつける。殺さないように、威力を加減し相手の出方を観察する。

少年は飛んでいき、地面に転がったがすぐに立ち上がり刀を構えた。実力も体力も経

験値も差があると分かっているだろうに、少年は立ち上がる。その反骨精神に嫌悪感が募る。

威圧するように、鋭く容赦のない視線を投げつける。

「その刃こぼれした刀、それじゃオレどころか鬼ですら殺せねえよ」

少年の刀は刃こぼれが酷かった。刀だけでなく、身体も傷を負い悲鳴を上げていた。

身を削って働くことで快楽を得るのは脳であつて、体は疲労の極致に達している。

挑発するように口端を上げて嘲笑する。目はまだ錆兎を観察し、口は淡々と事実を述べていく。

「鬼を殺す技術だけは身につけても、戦い方は身につけていない。見たところ、山中の鬼を殺し回つてたんだらう。刀の刃こぼれが過ぎる。後2、3回斬つたら折れる。体力もかなり消耗している。休息はしていないんだらう。そろそろ足に力が入らず、腕も刀を構えるだけで辛いはずだ」

軽蔑を交えて少年を見る。

「状況を見誤るやつはすぐに死ぬ」殺気を放ちながらゆつくり歩き、少年の間合いに入る。

「鬼に殺される代わりに殺してやろうか？」

「鬼に殺されるのは屈辱だらう」微笑みながら少年の刀を手で掴み、自身の刀で面紐を斬

る。

狐の面が落ちた。少年と目が合った。

少年の刀と体は極限に達していた。動けていたのは精神力のおかげだ。それでも決めたことを曲げない、力強い意志が目から汲み取れた。

目は口程にものを言う。

家に来た時のゴンの顔が浮かんだ。自然と人を引き付けるゴンと目の前の少年が重なる。

とつさに笑ってしまった。なんだ、アイツと同類の人間か。

オレの周りは頑固者が多い。自分の理想や正しさを貫いて周りを変えていく。傷つくのも、妥協させられるのも周りの人間だ。……だから嫌いなんだ。コイツから離れなければ自分を変えられる。影響を受けるのはごめんだ。

刀を納めて距離を取る。少年は訳が分からないようだった。

それもそうだろう。

闘う気がないことを告げ、さっさと次の鬼を探しに気配を探る。瞬間、どさつと何か倒れる音がした。振り返ると少年が倒れていた。なんだ、限界だったんじゃないか。

温度を感じない目で少年を見下ろした。

このまま放つて立ち去りたい。だが少年が起きる前に鬼に喰われた場合、化けて一生

憑きまとわれる気がした。

最大限の嫌な溜息を吐いて拠点に連れて帰る。

頑固も過ぎると毒だ。理想は外に求めるものではなく、内に求めるものだ。

少年を背負い歩き出す。夕方に会った介抱している人の居場所を聞いていなかったことを今さらながら後悔した。

少年の名前は錆兎というらしい。

朝になって魚を捕って帰ると少年がもがいていた。狩ってきた鬼の髪の毛で手足を拘束していたのがお気に召さなかったらしい。

目を覚ましても体が休めるようにと手足を縛っていたのだが、大きなお世話だったようだ。普段しない善意が空回る。

捕ってきた魚と山菜を焼き、錆兎に渡す。錆兎は瞠目した後、がつついて食べた。

最終選別が始まってから、もしくははこの山に入る前からろくな物を食べていなかったのかもしれない。絶食の訓練はしているように見えないが。

身を滅ぼしてまでして山中の鬼を狩り続ける錆兎に理解も共感もできなかった。コイツにとっては最終選別がゴールなのか、入隊した後も鬼を狩り続けることがゴールなのか、もしくは言葉通り目の前で人が死ぬことが耐えられないから、身を犠牲にしてま

でして鬼を殺し続けたのかはわからない。それはオレが関心を持つことではない。それでも、目の前の少年が鬼殺隊によって捕われた鬼で身を亡ぼすことは何とも哀れだとは感じた。まあ、どうでもいいけど。

錆兎は食べて一段落した後、意を固めて言った。戦い方を教えてくれ、と。オレは即座に断った。面倒くさいことは嫌いなんだ、と。

錆兎は何度も頭を下げてきた。だから徹底的に無視した。経験上、利害関係無しで人と関わりと碌なことがないからだ。

それでも錆兎はしつこく付きまとった。本気で拒絶すれば簡単に躲すことはできだが、それをしなかったのは、彼のまつすぐすぎる意志を誰かと重ねていたからかもしれない。

オレの邪魔をしないことを条件に、残りの4日間、オレは錆兎と行動を共にした。

オレと錆兎は日中、殺し合いに励んだ。ゾルディック家の技法、戦術を錆兎に叩きこむ。捕縛した鬼を調べている間は、錆兎は一人で反復して訓練を続けた。恐らくキルアよりもまじめに取り組んでいた。日が暮れて夜になると、鬼を殺しながら学んだことを実践する。一日をこの流れで過ごすことになった。

朝日が昇り、錆兎は帰ってくる度に落ちていた日輪刀を拾ってきた。拾った刀を強く

握りしめじつと見つめる。それは間に合わなかった自身を戒めている様だった。

「努力は、どれだけでも足りないな……」

「当たり前だ、だから完全なものは存在しない。それ故に心折れて夢を諦めるんだ」

前の世界の自分の行動を思い出し、饒舌になる。結局何一つやり遂げることではできなかった。

オレは自虐的に言葉が続けた。

「夢を見続けるのは難しい。それに比べて夢を諦めることは簡単だ」

「俺は夢にしない。誰も死なせない。鈍い、弱い、未熟、そんな者にはならない」

「それでいいんじゃないやねえの。人には人の戦い方がある」

「俺は、前に進み続けるしかない」

堅苦しい生き方だ。だが錆兎の過去を思い出して納得した。後ろには絶望しかなかったのだろう。だから前だけを見続けて歩んだ。父の言葉を胸に掲げて。

もがいてもがいて何にもがいているのかわからなくなりそうな生き方だ。一種の呪いだ。

「暴力の世界は弱肉強食だ。強ければ生き、弱ければ死ぬ。いつも一緒にいたウザい奴が言っていた。『生きてるやつが勝ちだ』そのことに関してはオレも同意見だ。だから」

生きろ。

それは声に出して言うことはできなかつた。

8日目を迎えた朝、鑄兎と共に藤の花が咲く地点に向かうと予想よりも多くの人がい

た。

そこには鑄兎の同門がいたらしく、鑄兎はそつちへ行つた。

後に知つたことだが、この年の入隊者数は近年稀にみる数だつたらしい。どうせすぐに減るんだろうけど。

鬼殺隊。別名鬼狩り。その数およそ数百名。人を守り鬼と1000年闘い続ける政府非公認組織。

そしてこの度正式に入隊することとなつた。

——鬼は1000年たつても人間を滅ぼせなかつたんだな。

そう思いながら目の前にある玉鋼を選ぶと女の人と目が合つた。

「刀の要望つて聞いてもらえるのか」

「へえ、これがお前の刀。小せえし短けえし地味だな。短刀ぐれえじゃねえか。地味地味だ」

「使いやすさ重視だ」

宇髓の元へ帰り、暫くして刀が届いた。太陽に一番近い山、陽光山ようこうざんの砂鉄と鉞石を原料にして作られているらしい。

玉鋼を選んだ後、刀の要望を紙に書いて女の人に渡しておいた。刀は向こうの世界でよく使っていた2本のペンスナイフに似せて作らせた。事細かに要望を書いておいてよかった。

ナイフを持つ。手にも馴染む。やはり刀よりもペンスナイフ（擬き）の方が良い。刃の色が変化し宇髓の嫁3人はきやびきやびとはしゃぐ。

予想以上のナイフの出来に柄にもなく浮かれていると、3人の嫁の内の一人、須磨すまと目が合った。

「なんだか、天元様の刀が小さくなった感じですね」

えへへへーと、良かれと思つて純粋な気持ちで言つたのだろうが、悪意の塊のように聞こえた。

急激にテンションが下がると共にうるさい視線を肌で感じる。

死んだ目を腐らせて宇髓を見た。宇髓はにやけた顔でオレを見た。「俺に憧れて双刀にしたのか」と言いたげな表情に、オレは天を仰いで膝から崩れ落ちた。

「そんなんじゃないからねえから……」

時間よ、
戻れ！

03

似てるけど違う。だから似通ってるんだけど。

「遅っせえ!! なんてあいつ帰って来ねえんだよっ! もう5日だぞ。1日で終わる任務が5日も帰ってこないってどういうことよ! どこほつつき歩いてんだよあいつは!!」

「天元様、落ち着いてください」

「そ、そうですよっ。クルイ君なら大丈夫ですよ」

「須磨、大丈夫かどうかじゃねえんだよ。任務が終わったら遊んでねえでさっさと帰って来いっていう話なんだよ!! 何度も何度も同じこと言わせやがってあいつは。一端出ていたら帰ってこねえのどうにかなんねえかね」

「落ち着いてください。確かに出てったきり帰ってこない時が多いですけど、でもほら、今回はちゃんと鴉經由で言伝があるじゃないですか」

宇髓の3人の嫁の内の一人であるまきをは、苦笑いながらクルイからの手紙を見せた。手紙には『遅くなる』と書かれている。

「だからってただ遅いんだよ！ 寄り道してんじゃねえぞ！ 帰ってきたら説教だ！！」

一人で喚いている宇髄を後目に雛鶴ひなつる、須磨、まきをはクルイが帰ってきた時の喧嘩を想像し、ため息を吐く。

クルイの実力は申し分ないどころか、柱に匹敵するほど群を抜いているのだが、性格に少々問題がある。本人はそのつもりはないのかもしれないが、他人の心の奥底にしまい込んでいる大事な思いを踏みにじる。

世間知らずも乗じて、より問題を起こす。宇髄がクルイに教えていることは、鬼を倒すことよりも一般常識の方が多い。

「心配なんだろうね、弟みたいで」

「……似てますけど、違いますよ。天元様も、クルイ君はあの方じゃないのに……」

須磨は、目を伏せて宇髄の背中を見た。記憶の中の宇髄の弟、忍び時代の首領が顔を出す。機械的で無機質な目。目的達成のためには人を人と思わない非情な策。

「そうだね。ま、どつちにしろあの子が帰ってきたらまずは説教だね」

まきをは明るい声をだして須磨の背中をパンツと叩いた。

「まきをさん、痛いですよー！」まきをの意図を組みながらも須磨は反論し、雛鶴は二人を見て微笑んだ。

小言を言いながらも宇髄、須磨、まきを、雛鶴はクルイの事を信用している。それが元暗殺者と元忍者という殺伐とした世界に身を置いていた共通からではなく、クルイの本質がまだ無機質ではない、泣きたくなるほど優しい人間だと気づいているからだ。

だからこそ、目の届く範囲に置いておきたい。刃の上を歩くように、優しさと無常さに揺れて心が血を流しているのならば、足の裏が痛くなり倒れる前に抱きかかえて違う道があることを教えるつもりだ。

「本当、どここうろついでんだよあの餓鬼は!!」

一卵性の双子というものは外見が似ているもので、第三者から見ればどちらがどちらか見分けがつきにくいものであるが、本人同士にしてみれば、似ているけど違う存在なのである。

ミルキは部屋にこもり情報を操作し、オレは外に出て未来を操作した。その反動か、ミルキは脳を酷使することにより糖分を食べ続けないと病的にやせ細る体質になってしまった。もともと遺伝に恵まれていた我がゾルディック家は皆代謝がとて面白い。それに加え糖分を最も消費する脳を酷使するミルキは、我が家で随一エネルギーを消費するようになった。故にオレは自分の分のお菓子をミルキに渡すようになったのだけ

れど、そのおかげでミルクは今豚のように肥えている。

非常に備えて体にエネルギーを貯蓄しているのだろう。

それに伴いオレはミルクの分まで外の仕事をこなすようになった。ミルクとは反対に、食べ続けなくとも動き続けることができる省エネの体質に変化したのだが、それによつてイルミのような体格には恵まれず、華奢な体つきへと変化し、代わりによく眠るようになった。目の下にはくまが濃く刻まれている

睡眠不足、ということはないだろう。睡眠をこよなく愛し暇さえあれば眠り続けているのだから。

常に食べ続けるミルクと常に眠り続けるクルイ。

それを見て、キラアはブタとクマの動物コンビだと笑っていたが、くまを熊に変えたキラリと光るネーミングセンスに満足したキラアの好きなお菓子、チョコロボクンをミルクと一緒に腹いせに全部食べたのは、言うまでもない。

つまるところ、似ているけど違う。だから似通っているんだけど。

スピードに乗った石が飛んできく。身体を傾けて石を交わし、目を開けた。

木の下では少年が未だ鬼と戦っていた。猪の頭をかぶった少年が、操り人形のように体中に縄を張り巡らされた鬼と対峙している。縄は木の上に続き、クルイが縄先を持ち

人形師のように鬼を操っていた。

「寝てんじやねエぞくま野郎!!」

クルイは眠りながらも少年の気配を察知し、それを鬼に反映させて動かしていた。

「なんだ、まだだったのか山の王」

「うるっせー! うおおおおおおお! ちよとつもうしん! ちよとつもうしん!!」

少年は叫びながら枝を鬼の目に突き刺そうと走り出している。

鬼は迫る突きを止め、爪で少年の体を切り裂こうとしたが、クルイが鬼の腕につながる縄を引いたことにより爪の軌道が変わる。少年は切り裂かれることはなく、地面に這いつくばり爪を避けた。

「てつめえ邪魔してんじやねえぞ。餓鬼を仕留めそこなつたじやねえかつ」

「飢えた鬼がガキに餓鬼とかセンスが高くてついていけないな」

「この能面野郎が! 餓鬼喰ったら次はてめえを喰ってやるっ」

「高みの見物としておくよ」

「俺を無視して話してんじやねえエエエエ!! 鬼イ!! 俺はお前に勝アつ!!」

「『鬼さんっ!』っちら」らしいぞ」

「本気でおめえを喰ってやる」

クルイは口端だけを上げてほほ笑んだが、目は冷たく鬼を見ていた。鬼が少年に勝つ

とは思っていない。

そもそもクルイが鬼と少年を闘わせている理由は、少年への当てつけだった。

任務帰りに立ち寄った山でタケノコ狩りならぬ鬼狩りをしようと思いついたことが原因である。土の中にある隠れたタケノコを足の裏の感覚で探すように、日光に当たらないように隠れている鬼をオーラで見つける訓練をするために足を踏み入れた。

だが入山早々、猪が突進してきたことで邪魔をされた。正確には、猪の頭をかぶった上半身裸の幼い子供が突進してきた。

「お前が最近この山を荒らしているやつか!!　ここは俺の山だ!!　俺の山を荒らすやつは許さん!!」

少年は両腕を上げ、指を爪に見立てて熊の様に威嚇している。

宇髄同様、コイツも相当変わっている。

クルイは気の抜けた声で少年に言った。

「この山にいる鬼を狩りに来ただけだ」

「俺はこの山の王だ!　そして総ての山の王となる男だ!　王の許可なく山を荒らすことは許さんっ!」

会話が成り立たない少年の返事に、クルイは思わずため息を吐いた。まだ宇髄の方がまともに会話できていたと思いつ返す。

クルイは再度、威嚇し続ける少年を見て気分が降下した。少年に関わると面倒なことが起きる気がしたのだ。クルイは先手を打つために数秒先をシミュレーションし、少年に背を向けて歩き始めた。

少年は自分に背を向けたクルイを敵前逃亡とみなし、猪のようにまつすぐ突進する。

「ウリイイイイイイ！ お前は俺より弱いいいい！」

「単純で楽だな」

獣ならそうすると思っていた。

背を向けたまま、クルイは間合いに入った少年の首を掴み勢いよく投げつけた。少年は木に強く叩きつけられ、動きを止めた。近づくと少年は気を失っていた。

「静かになった。責める気はないが守る気はさらさらない」

少年が気を失っている間に植物の蔓で縄を作り、少年を木に吊るす。意識が戻ったとしても、追ってくることは困難だろう。この少年が弟達みたいに規格外でなければの話となるが。

先程の少年然り、宇髄然り、自身を王とか神とか名乗っている奴は総じて妄想が激しい。

カアーと銚かすがいがらす鴉が鳴いた。鴉はクルイを咎めるようにじつと見ていた。伝達用のためにクルイについてきているが、四六時中見張られていては監視カメラの様で気分が悪

い。

クルイは、鴉に拷問用の縛り方じゃないことをアピールして少年と鴉を置き去った。

シンとした森の中、意識を集中させて気配を探る。目を閉じて、視覚、聴覚を切り離す。暗闇の中の水をイメージし、入水するように自身を溶け込ませ、感覚を研ぎ澄ます。鬼の気を思い出す。他の生物とは違う鬼特有のオーラを真つ暗な水の中、肌で感じてる。

暗い水の中で光が見えた。

——見つけた。

クルイは走り出した。水の中で見つけた光の方角へ走り続けた。

暫く走った後、辿り着いた先は何もなかった。洞窟、小屋、倒木も何も見当たらなかったが地面からは鬼のオーラが見えている。爪を伸ばし、オーラを中心地に手を突っ込む。中は空洞だった。

山一つ分の範囲ならば、鬼の位置が予想できるようになってきた。

鬼は恐らく垂直方向にある程度掘った後、水平方向に数メートル程掘っているのだろう。日中、間違っても日が当たらないようにするために。

クルイが火薬を投げ入れる準備をしていると、遠くの方から鎚鴉の鳴き声が聞こえて

きた。鴉に大体の居場所を特定されていることにクルイは嘆く。

クルイは鋭鴉の監視に嫌悪感を抱き、鴉をよく撒いていた。日に日に鴉の探索能力が上がり、今ではかくれんぼが激化している。

クルイが鬱々と鴉との関係について考えていると、鴉とは別の鳴き声が聞こえだす。猪の少年だ。

縛り付けていた蔓をどうにかほどこいて探していたのだろう。その途中、オレと一緒にいた鴉を見つけて追いかけまわし、鴉はバトンタッチのつもりで連れてきたのだろう。オレを差し出せば自分は助かる。鴉の打算的な考えにため息が漏れた。誰に似たんだか。

こんな煩い奴がいるなら気まぐれでこの山に入るんじゃないかと今更ながら後悔する。

「やつと見つけたぞ荒らし屋ア！ 次は負けねエ、勝負だ!!」

「ウリヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！」叫びながら少年は突進してくる。さつきと同じ戦法かと思つたが腕を振りかぶつた瞬間、肩と肘の関節を外し少しでも間合いを詰める。

「チツ、上手かいかねエな」

外した関節を難なくはめながら再度突っ込んできた。先ほどよりも速い。

クルイがナイフを構えようとした時、鎧烏が大きく鳴いた。

一般人にナイフを向けるなつてか。

少年はその間も型にはまらない動きを繰り返して来る。

本当に面倒くさい。

クルイは攻撃をいなし躲すにつれ、少年のリズムを理解し始めた。少年にとつては無意識な癖。無意識に心地よいと感じる攻守のリズムがそこにあつた。宇髄が口うるさく譜面譜面と言っている理由が分かつてきた。

——相手の無意識下のリズムが分かれば、合いの手を入れるように攻撃すればいい。いつの日か、宇髄が言っていた言葉だ。感覚で、譜面の概要を理解した。

クルイは気だるく少年に言った。

「いい加減、飽きたんだけど」

少年は焦っていた。こんなにも蹴りと拳を打ち込んでも当たらないのは初めてだった。山の中の動物相手では経験しえないことだった。

クルイは少年の腹を蹴り上げ延髄を叩く。少年は再び意識を落としたが、地面に倒れることはなかった。倒れる前に意識を回復し踏みとどまっていた。

ズシ並みのタフさだな。

少年はもう一度突進しようとして走り出したが、クルイの間合いに入る前に、地中からの

殺気に気づき後ろに飛ぶ。

瞬間、地面から土が飛散した。土の中から鬼が起き上がっていた。

「俺が寝てる地面の上で騒ぎやがっててめえら楽に死ねると思うなよ」

「だってよ、少年」

「俺は死なねエ！ お前らを倒す!!」

少年は鬼がいるにもかかわらず、クルイに突進してくる。それを見て、鬼も爪をむき出しにしてクルイに襲い掛かる。

鬼は少年と共にクルイを殺した後、少年を喰うのだろう。

予定は未定だ。太陽が昇っている間に、鬼のオーラを見つけ出す訓練を完了させる予定だった。山に潜む鬼をタケノコのように掘り起こしていれば、さつさと次の場所へ移動していたのだが、それは予定に終わってしまった。ならば、予定が狂った代償として、少年には憂さ晴らしに付き合ってもらってもいいのではないだろうか。

クルイは、少年がクルイをめがけて蹴り上げた脚を、鬼が振りかぶった腕を、各々の攻撃がお互いにダメージを与えるように軌道を逸らした。

少年は猪の被り物が裂け、鬼は鳩尾に蹴りを食らった。

クルイはすぐさま鬼の四肢に、縄を結び付けたクナイを埋め込み、縄をもって木に登った。

即席の操り人形の出来上がりである。

「少年、この鬼を倒したら勝負してやる。鬼、少年は餌だ」

「俺は少年じゃねえ！ 嘴平伊之助様だ!! 山の王になる男だ!!」

「てめえ、こいつを喰った後はお前の四肢を引きちぎって痛みにもがき苦しみながら殺してやる」

「売られた喧嘩は他人に転売する主義なんだ。誰かにやってくれ」

「ここにはお前しかいねえだろうが」

「アンタが生きてたらそうなるな」

「俺を無視してんじゃねえ!! このくま野郎！ こいつに勝ったら俺と勝負しろ！」

操られていても鬼は自由に動き、伊之助の体力を奪う。鬼が意図的に距離を取った場合、もしくは伊之助が致命傷を食らいそうになった場合、木の上にいるクルイが縄を引つ張り、鬼の体を動かす。

鬼は弱かった。恐らく鬼になったばかりなのだろう。人を一人喰った程度にみえる。最近この山に来て獣を喰い漁っていたのはコイツのはずだ。

鬼は伊之助を食べようとするが、伊之助の脚力は幼いながらも強かった。

始めは鬼が速さ、体力、力から伊之助を圧していたが、時間が経つにつれて、伊之助の予測しづらい動きが鬼の急所に入るようになってきた。

クルイは、伊之助に日輪刀を渡せば鬼を倒すと確信する。

夜空が白み、日が空を侵食してきた。

この光景ももう見飽きた。

「理不尽に生まれて意味不明に死んでいけ」

クルイは縄を持ったまま枝に引つ掛けるようにして木から飛び降りた。それにより、鬼は滑車運動から高く持ち上げられる。鬼は太陽に灼かれ、断末魔を残して塵となった。

伊之助には何が起こったのかわからなかった。一瞬のことだった。鬼が視界から消えた途端、聞いたことのない耳障りな叫び声が響き渡り、途切れた。

日の光が目に入り頭が冴える。理解できたのは、目の前のくま野郎が鬼を倒したということだ。

鬼の叫びを訊いても感情の揺れが一切ない男に、伊之助は底知れぬ危機感を覚えた。遠くから兄弟の足音が聞こえる。さっきの叫び声を聞いて駆けつけたのかもしれない。だめだ。来るな。兄弟の足音が大きくなるにつれ、自分の心臓の音が耳元で聞こえてくる。

くま野郎がゆるりと動いた。手には刀を持っていた。

起きたことは一瞬なのに、頭に焼き付いて何度もゆっくりと再生される。

叫び声が聞こえた。誰が叫んでいるのかわからなかった。喉の痛さから叫んでいたのは俺だと知った。

鬼を焼いた後、大型の猪が姿を現した。身も多く、食べ応えのありそうな立派な猪だった。

宇髓の元に帰る時に、手土産の一つでもあれば、嫁3人は味方についてくれるだろう。そんな打算的な思いが生まれた。

クルイは真上に飛び上がり、ナイフを投げ落として猪の首に突き刺した。すかさずもう一本のナイフで体重をかけて猪の頭を落とした。

一瞬の事だった。

猪は鳴き声をあげる前に絶命した。

クルイは新鮮な猪の死体に満足した。

良い肉が手に入った。これで説教の時間は減るだろう。

双刀についた血を払うと、少年が雄叫びを上げた。鬼の叫び声とは違う、怒りの声だった。

「兄弟につ!! 何をするつ!!」

少年は木の棒を構え、目をめがけて刺突する。鬼と対峙していた時よりも桁違いに動きが速い。怒りで瞬間的に力が発揮されていた。

だが戦いで冷静さを失った奴は最初の攻撃に固執する。

クルイは身体を逸らし、伊之助の足を払い体勢を崩した。伊之助の腕を掴み遠くへ投げ飛ばす。投げ飛ばされた伊之助は空中で体勢を整え幹に着地し、着地の反動を利用して再び突きを放つ。

だがクルイを目掛けて飛んでいたはずなのに、いつの間にかクルイの姿は消えていた。

「本当、単純で助かるよ」

クルイは伊之助の鳩尾を殴りつけ地面に拘束した。腕と足の関節を全てはずし、隊服のベルトで縛り上げる。着ていた羽織を裂いて簡易的な縄を作り、伊之助を木に吊るし上げた。

「まさか、猪が兄弟とは思わなかった」

我が家同様、複雑な家庭事情もあるもんだ。

その後、クルイは淡々と猪の血を抜き、皮を剥ぎ、枝肉にしたところで、肉を棒に結び肩に担いだ。

伊之助はその後ろ姿をじつと見ていた。背中に文字が書かれた黒い服、2本のガタガ

夕した短い刃の刀。黒髪黒目の濃いくまのある顔。全ての特徴を脳に刻み込む。

憎悪で濃縮された声を絞り出した。

「次会った時は、俺がお前を倒す」

「オマエに殺される気はないよ。悪気はない。善意はもつとないけど」

無感情な声を伊之助に向け、「それじゃあ」とクルイは山を下りた。

空はすがすがしく青かった。昨日と変わらず、同じような一日が始まっていた。

クルイは無心になって猪の皮を剥いている時に宇髓の言葉を思い出した。

——お前の音の呼吸は音がねえな。地味なお前にはちようどいい。

音の無い、音の呼吸。鬼の喚き声も、宇髓の轟音も、煩わしい。うるさいのは嫌いなんだ。宇髓の音の呼吸とオレの音の呼吸。似てるけど違う、だから似通ってんだけど。

宇髓はクルイに音の呼吸を極めてほしいのだろう。だが、クルイの目的は音の呼吸を極めることではなく、手段の一つとして音の呼吸を使うだけであった。

クルイは瞳を閉じてため息を吐いた。肩に担いでいる猪肉を持ち帰るために歩みを進めた。

宇髓の元に帰ると宇髓が痲癩玉を放ってきた。訂正、痲癩を起していた。

何を心配しているのか、オレと誰を重ねているのか詳しく知りたいとは思わないが、とりあえず、嫁3人に猪肉を渡して宇髓を落ち着かせてもらおう。

「ただいま」

古き悲しみの上に新たな涙を流すべきにあらず エウリピデス

うちは何代も続く医者の家系です。

幼い頃から勉学に励み、父の背中を見て走り続けました。父もまた、時に厳しく時に優しく私に医学を教えてくださいました。私はその時間がとてもうれしく、より一層勉学に励みました。

しかしながら母はそんな私を見て「もう少し待っててね」と頭を撫でながら言い聞かせます。

幼い頃私は、その意味がよくわかりませんでした。15歳を迎えた時ようやく理解しました。私の家に、親戚の次男坊が養子として迎え入れられたのです。

それ以降、父と私の間には医学にまつわる会話は減り、父と彼の会話は増えました。

私は母の『もう少し待っててね』という言葉を思い出しました。

なにを待つのか？ 「跡取」を。

なぜ待つのか？ 「あなたは繋ぎ」

どうして繋ぎなの？ 「女の子」だから。

全て私の予測です。母には聴けませんでした。

聴いてその通りの答えが返ってきたら、私は私を保てません。

だから私は両親に言いました。父のような医者になりたいのだと。父は言いました。彼が家業を継ぐからお前が医者になる必要はないんだと。

家業に携わりたくないなら看護婦として彼を支え、彼と結婚し、子供を産み幸せな家庭を築きなさい。それが、お前の幸せだと。

父の目は、私の幸せを夢見ていましたが、私を見てはいませんでした。

——闇に身投げした瞬間でした。

大量の墨の中に突き落とされたように、目の前が真っ暗となり、頭が映像と音の解析を放棄した。

手を結び、手をほどき。息を吸い、息を吐き出す。その動作を何回も行って、ようやく父が言った言葉を処理することができた。それぐらい時間を要しないと自分を取り戻せなかった。

だが自我を取り戻したことでどうしようもない怒りが這い上がる。体中を暴れまわり、嵐が出口を探して口元へかけ昇る。

私を、侮辱するな！

気がついた時にはそう叫んでいた。その後も口が勝手に汚く両親を罵り続けた。

気がつくときどこかの部屋に閉じ込められていた。

私はただ誰かの補助として、世間一般が描く幸せを築くのではなく、父のような常に前線で活躍する医者になりたかっただけなのだ。自分の思い描く幸せをつかみたいだけなのになぜ理解してもらえない。家族は一番似た環境で暮らしているのに、その家族に理解してもらえないこの状況に苛立ちが募る。

ある日、家の噂を聞いた隣町に診療所を構える医者が家に来た。彼曰く、彼の友人が構える病院が人手不足で困っており、そこで学びながら医者を目指したらどうか、という願ってもない話だった。

私は二つ返事で了承した。

暴言をはいてから私と両親、彼との関係はぎこちなく、四六時中緊張している状態だったからだ。

息がつまる。精神がゆっくりと絞め殺されていく。

私は町医者に紹介された山奥の病院へ行き、彼に出会った。

人間離れた冷たい雰囲気、まなざし、美貌、一目見たときから胸がどきどきした。前髪を左に流し、左目が見えづらくなっている姿も彼をより理知的に見せた。

外科と内科を担当する彼は多忙だった。昼間は疲労から気だるげに患者の診察をし、夜になると手術室に籠り何人もの治療に当たった。

私の知っている限り、ほとんどの人を助けることはできなかつたけれど、この病院は終末患者が多い。彼は全力を尽くしたとしか言えない。

だから彼が落ち込まないように、励まし続けた。彼の負担を減らすために今まで以上に医学の勉強をし、彼の右腕となるように自分を研磨し続けた。

ある日のことだ。一人の少女が例の町医者を紹介を経て転院してきた。

彼は寝ており、代わりに私が話を聴いた。彼女はただの軽度の喘息だった。喘息の彼女がなぜこの病院に来たのか理解できなかったが、入院の手続きを行った。

その日の夜、院内を巡回していると彼女の病室に彼が入っていくのを見た。彼女の様子を診るのかと思ひ彼の後を追ってこっそり眺めていると、彼は彼女から採血した注射器をそのまま自分の腕に刺した。

事故か、と思ひ部屋の中に入る直前、彼は喜色に満ちた声で呟いた。

……マレチダ。マレチダ、マレチだ、マレ血だ。稀血だ。

聴いたことのない声だった。

私はあの子に嫉妬した。来たばかりの小娘が彼をあんなにも喜ばせている。彼のあんな嬉しそうな顔を見たことがない。

私は病室に入った。彼は気づき、私を殺そうとした。私の両手足を折り、温度を感じない目で私を見下ろしていた。

「役に立ってたんだがな」

私の両肩を掴み、口を大きく開けた。その時初めて喰われると思った。

嬉しかった。私の血肉が彼の体を作る。こんな夢みたいなことを考えたことはなかった。うれしさが全身から溢れ出てくる。

「あなたのためになるなら何でもしたい。私を食べてあなたの血肉になるなら喜んで食べられる」

彼は逡巡した後、大きく開けた口を閉じた。

私は残念に思った。

だが彼は約束してくれた。私が死ぬ時は、彼が私を食べる時だと。それまで彼のために尽くし、一緒にいることを。

それから私は医者となり、彼のために患者（脚）の体調管理（鮮度）をしている。彼の「美味しい」という口福の言葉は私の幸福となった。

「今日はどうやって食べたい？ 刺身かな？ もつ煮込みかな？」

新婚の会話みたいでなんだかくすぐつたい。

「処理した方がうまいが、捨てるどころが出る」

「余すところなくきれいに全部使うつもりだけど……それともまさかの踊り食い？」

「一度締められた方が食べやすい。今日は醤油につけて食べたい」

「ならやつぱり今日の夜は刺身ね！ 私が捌いてあげる！ 楽しみにしてて」

「捨てるところは必要最低限にしてくれ。あと血液は輸血パックに入れといてくれ。忙しい時の10秒飯にする」

「まかせて！」

私は父の言葉通り、男性を支え、体を気遣い、幸せな生活を築くことが私の幸せなんだと理解した。

私は彼と一緒にいられれば無敵だ。

クルイと宇髄は鬼殺隊の本部にいた。

広い日本家屋に美しい日本庭園。季節の花が一年中咲いている。

本日、クルイは鬼殺隊当首、産屋敷耀哉より柱任命の儀を受け、本部へ足を運んだ。

鴉曰く、記念すべき50匹目の鬼を倒したためだ。人と鬼の生命エネルギーを見分ける眼は鬼の探索に優れ、誰よりも速く鬼を殺していった。

「いつてらっしゃい」「いつてきます」「おかえり」「ただいま」宇髄の元でそのやりとり

を2ヶ月間続けた結果、クルイはいつの間にか鬼を50匹殺していた。殺した人の数を数えていないように、殺した鬼の数も数えていなかった。——鴉は全て数えていたようだが。

クルイは、鬼殺隊最高位の柱に就任と言われても宇髓の嫁達のように嬉々とする事はなかった。庭に立っている現在も、非常に面倒くさいと思っている。

「いいか、絶対に失礼のないようにしろよ」

宇髓は強い口調でクルイに言いつけた。

「わかつてるよガミ様」

クルイは演技気味に肩をすくめて言い返した。

「そういうところなんだよ」

「はいはい」

——来たぞ。

宇髓は即座に片膝をつき頭を下げた。そんな宇髓の姿を立って見ていると、膝裏を蹴られ頭を地面に叩きつけられる。クルイの額が砂利と接触した時、襖から美しい少年、お館様こと産屋敷耀哉が姿を現した。

くそつたれ——。

未だ姿を見ていないが、足音や気配から目の前の縁側に少年が座つたことを察する。

「面を上げてくれないかい、2人ともよく来てくれたね。今日はいい天気だ」

たったそれだけの言葉だが、人が心地よいと感じるトーンと話し方を目の前の少年は網羅していた。リーダーに必要な人心掌握の術に、産屋敷耀哉は長けていた。

カリスマ的に人を惹きつけていた奴の姿が頭に浮かぶ。少なからず、自分もソイツに引かれていた一人である。知識として除念したことは知っているが、あの日以降から会っていないため事実は知らない。

過去の感傷を振り払うように、クルイはどうでもいいことを考えて眠ることに努めた。朝特有のひんやりとした空気と暖かい日差しが、クルイの眠気をより一層深く誘う。仰々しい宇髓の挨拶を聞き流して微睡むクルイに、宇髓はクルイの頭を握りつぶすように強く握った。

クルイは起きていることをアピールするために、米神を指し2回くるくると回して掌を開ける。手刀がきたが、即座に叩き落とす。

耀哉は、クルイと宇髓の小競り合いを見届けた後話し始めた。

「クルイはこの2ヶ月間で誰よりも鬼を倒した。柱となる条件が満たされた」

当たり前だろ。と言いたいが、宇髓に未だ頭を抑えつけられうまく話すことができないでいる。

宇髓は耀哉の視線を受け、クルイの頭から手を離す。同時に鋭い視線を投げつけ、言

葉にせずつとも余計な口をはさむなという声が聞こえてくる。

「今日からクルイを柱に任命する。担当地域は後から鏖鴉より追って連絡する。いいね」

よくない。

すつと息を吸い、通る声を発する。

「オレは柱になる気はない」

宇髄が動いた。

「申し訳ございません、お館様」宇髄は再びクルイの頭を掴み地面に抑えつけた。その目は怒気を孕み凍てついている。

常人であれば心を病む程の視線であるが、クルイはこれまでの経験から耐性がついている。

「理由を聴いても?」

「ある血鬼術を持つ鬼を探している。柱になれば担当地区内から出られない」

「それは、日本中を旅して回りたいということかい」

クルイは耀哉を強く見つめ、頷いた。ここで妥協する気はない。

「君はいつも他の子とは視点が違う。最終選別の時は藤の花を持って山に入ったり、刀の要望を言ったりしたそうだね」

クルイは淡々と言った。

「釣りをしたことはあるか」

脈絡のない一言に、耀哉は一瞬虚を突かれたが、予測のできない話に口角を上げた。

「ないよ」

人間を餌に例え、鬼を魚に例える。

「餌がないと魚は釣れない」

「素潜りで狩る手段もあるんだよ」

現在の方法、鬼の後を追い狩る手段を伝える。

「労力は最小限にとどめたい」

自分を餌に釣ってやる。

耀哉はクルイの言いたいことを察しほほ笑んだ。

「餌と思つて食いつくが最後、気がついた時には喰われているということだね」

鬼のいるところに隊士を派遣するのではなく、隊士を餌にして鬼を釣る。実力のある者にとってはその方が効率的だ。

「言いたいことはわかった。それでもそれらの理由では例外は認められない。柱の一人当たりの担当地域は広い。柱の人数が増えることで一人当たりの警備地域を減らすことができれば、一周りにおける警備の時間を減らすことができる。それはこれまでと同

様に、同じ巡回時間を使つてもその地域をより詳細に調べることができると」

耀哉はクルイを見つめてほほ笑んだ。慈しみながらも有無を言わせない瞳だった。

「柱となる以上、覚悟してくれないか」

クルイは答える代わりに瞼を閉じた。

「柱の刀には『悪鬼滅殺』の文字を入れるようになっていてね、しばらくの間刀を預からせてもらうよ。その代わりに、この刀を渡しておく」

クルイは脇差と短刀を受け取った。せめて同じ種類の刀にしてくれと言うが、耀哉はここにことほほ笑むだけで聞き入れてはくれなかった。

本部を出た後、クルイは宇髄に蹴り飛ばされガミガミと説教されたのはいうまでもない。

——早く、早く姉ちゃんを助け出さないと。

診療所の玄関で、少年と医者と助手が口論していた。

「姉ちゃんをどこにやったっ!! 早く姉ちゃんを返せ!!」

少年は喚きながら医者白衣を掴んでいる。医者は嫌悪を隠さず少年を見た。

「はあ……、何度も言うけど、君のお姉さんは結核でね、この町よりも空気のきれいな病院に入院させたんだよ」

「そんなの嘘だ。父さんや母さんみたいに戻って来なくなるんだ!! お前の診療所に行く人はみんな帰ってこないんだ!! このヤブ医者!! 家族を返せ!!」

「こっの餓鬼……。人が優しく言えばつけあがりやがつて。世の中の厳しさを教えてやろうか」

町医者が視線で助手に指示を出す。助手は苦笑いし、少年の頭を撫でた。

「ごめんね、君はちよつとおいたが過ぎちやつたかな」

線の細い優男である助手は、少年の後ろ首を掴み門の外まで引つ張りだす。

「やめろ!! 離せ!!」

せめてもの抵抗に、少年は足を踏ん張り腕を振り回す。

助手は少年の声を聴かず門の外へ放り投げた。

少年は、全身を強く打ち地面に横たわる。身体が軋み、目に涙が溜まる。惨めな自分が。嫌気がさす。泣くな。悔しいならまだ泣くんじやない。まだ何もやつてないだろうが。

自分を叱咤するが、涙が込み上がる。必死に涙をこらえて空を見上げると、青空が自分の代わりに泣いているように見えた。

早く姉ちゃんを見つけないと、家に姉ちゃんが返ってこなくなる。父さんと母さんの時と同じだ。今度は一人になる。一人は、嫌だ。

何もできない悔しさから涙が止まらない。両腕で目を覆うが、目の端から涙が落ち続ける。何で自分はこんなに何もできないんだ。

近所の人がひそひそと話す声が聞こえる。

傍観者はさっさと消えろと、心の中で助けてくれない周りの人間を罵る。

足音が聞こえ、すぐそばで止まり、声が降ってきた。

「大丈夫ですか。何か事情があるようですが、教えていただけませんか？」

優しい、声の人だった。目を覆っていた腕をどけると、きれいな女の人があった。

「私は胡蝶カナエと申します。あなたのお名前は？」

気がついたら差し出された手をとっていた。

「……藤咲紫緒ふじさきしおです」

初めて、女神を見た。

青年は診察室に戻り、笑顔で医者に話しかけた。

「先生、追い出しましたよ」

「すまない。全く、毎日毎日……あれは誰の身内だったか」

医者は、椅子に背をもたれて天井を見ていた。医者は患者を一切覚えていない。死んだ患者を覚えても意味がないからだ。

「この間、山奥^鬼の病院へ送った少女の弟ですよ」

「ああ、稀血だったって喜んでた時のか。弟も稀血か？」

「以前傷の手当てと称して調べてみましたが、違いました」

「なんだそうか」

人を一人、鬼が構える病院へ送ると見返りとして鬼の血が1 mL贈られる。だが稀血だと読んで字のごとく稀少な血であることから贈られる血は10 mLと跳ね上がる。

その鬼の血を使つて、二人は人間でありながらも鬼の力が使える薬を研究している。人間の可能性を広げる第一歩であり、超人を作る研究である。

青年は、医者の研究を知った時目が輝いた。こんな面白い研究は他に聞いたことがない。それ以降、患者が研究の材料に見えるようになった。邪魔をする奴は鬼の餌となった。

「彼は、何か嗅ぎつけてるんでしょうか」

「ないだろうな。だから毎日来て探してるんだろ」

医者は氷が入っている桶から小瓶を取り出した。

「これからはもつと慎重に、ですね」

「そうなる。だがこれもそろそろ試作品が完成する」小瓶の中のある赤い液体を見て医者は笑った。

「楽しみです」

青年は柔らかな笑顔を更に深くしてほほ笑んだ。

クルイは柱就任の儀を終えた後、小さな町に来ていた。鎡鴉が次の任務を伝令したためだ。

鴉によると、この町に住む人は病にかかりやすく、すぐに死ぬらしい。噂話に過ぎない、と普通の人は笑い飛ばすだろう。聴く人によれば、笑わないだろうが。

町に入ったクルイは、人目につかない町の中心地で感覚を研ぎ澄ました。足の裏から静かに入水するように、町全体の気配に溶け込み鬼の痕跡を探す。

町中に、鬼が紛れているように感じない。町に血鬼術は使われていない。それでも僅かに、——鬼のオーラを感じた。

気配を感じる方角へ進むと診療所に辿り着いた。この診療所から鬼のオーラを感じ

る。

クルイは窓から殺風景な部屋に足を踏み入れた――。

物のないその部屋は、シンプルであり統一感のある部屋であったが、無機質で、人を寄せ付けない雰囲気をつけていた。

部屋を見回し、床から天井の隅々まで視る。

日陰に置いてある桶に近づき、小瓶を手取る。中身の赤い液体を眼で視ると鬼のオーラが見えた。それは血と薬品の混ざった匂いがした。

クルイは口端がゆつくりと上がっていく様を自覚した。噂話の概要が見えてくる。ここは、鬼と繋がっている。それも従属ではなく協力者として。

この世界で初めて鬼を見た目を思い出す。あの時も、人は生き残るために人を差し出し生き抜いていた。人は極限状態に陥るとどこまでも残酷になれる。

クルイは再び小瓶を見た。目を引くほど鮮やかな赤い液体は怪しく人を魅了している。

ここの奴らは鬼の血を使って薬を創っているのだろう。何に使うかは大体予想できるが、それはオレの知ったことじゃない。知的好奇心は最も暴力的でない暴力だ。

クルイはポケットに小瓶を入れ、部屋を歩き回った。血液の入手経路を探るが、元より物のない部屋には手掛かりになる物すら見当たらない。

まだ会ったことがないにも関わらず、相手のプライドと警戒心の高さを感じた。

普段から低いテンションが更に降下していく。

建物内の気配が動き、誰かが部屋に近づいてくる。このまま忽然と小瓶が消えれば、ここにいる奴は怪しむだろう。

クルイは鎧鴉を見た。普段使わない表情筋を使い、鴉にはほほ笑みかける。ゆつくりと近づき、驚掴む。クルイは人が部屋に入ってくるタイミングを見計らい、鴉を投げつけた。

鴉は文句を言うように大きく鳴き、怒りを発散するように、そいつを蹴り上げ羽をばたつかせた。

「うわ、何だこの鳥は?! くそーどけー!」

クルイはその隙に窓から逃亡した。

持つべきものは鴉だ。嘘だけだ。

姉が人を拾ってきた――。

胡蝶しのぶは、鬼殺の剣士、胡蝶カナエを姉にもつ。姉、カナエは2ヶ月前に鬼殺隊の最終選別を受かり、鬼殺の剣士となった。

胡蝶家の家業は、先祖代々医療に従事している。父もまた医者であり、母は看護婦をしていた。カナエとしのぶもまた、幼い頃より両親から怪我の手当て等の簡単な処置を指導されていた。

姉のカナエは、母親に似て聖母の様な笑顔で患者の心と体を労り、両親の手伝いをしていた。妹のしのぶは、父親に似て医学に興味を持ち、父親の本から知識を吸収していった。しのぶはその本の中でも特に、薬学に興味を持った。漢方から薬を創る、薬品同士を調合して新たな薬を創る。それらを摂取することで、体内の悪い所を治療する面白さに気がついた。

好奇心を抑えられなかったしのぶは、家族の目を盗み、父親の見様見真似で適当な薬草と薬品を混ぜ合わせて怪しい液状の薬を創り上げた。

しのぶは嬉々としてその怪しげな薬を父親に見せた。薬を見せてきたしのぶに、父親は驚きを表したが、しのぶを強く抱きしめた。

本来は叱らなければならない。勝手に薬品に触れてはいけない、危険だと。言いたいことはたくさんあったが、父親はそれらを呑み込んだ。

「しのぶ、よくやった」

その後、しのぶは当然叱られたが今では幸せな話の一つとなっている。

——その数年後、カナエとしのぶの目の前で両親は鬼に喰い殺された。

カナエはしのぶを連れて救助してくれた鬼殺の剣士に弟子入りし、尋常じゃない努力を経て鬼殺隊の道を切り開いた。しのぶは、そんな姉カナエを誇りに思っている。

だが、一つだけ相いれないところもある。両親が目の前で鬼に殺されたにもかかわらず、カナエは鬼に慈悲深い。

カナエ曰く、鬼は元を辿れば人間である。故に故人の人格を殺され、強引に強力な捕食性と本能を植え付けられた鬼は可哀そうな存在だと。鬼血術は、故人の執着したものの現れなのだと。

何を言っているのだと思った——。

——カナエは誰にも言ったことはないが、感情を読み取ることが得意である。自らの

意思で鬼になった者、意に反して鬼になってしまった者、カナエにはその違いがなんとなく分かる。鬼という鎧を剥いだ時、無防備になったその故人の心を感じ取ってしまうのだ。故に、カナエは後者の鬼に対して、両親を殺された憎しみよりも哀れみを感じてしまう。

本当はこんなことしたくはなかったんですね。悲しいですね。もう眠ってください。鬼の頸を斬った後、そんな泣きたくなくなるような思いが溢れてくる。

こんなことは理解されない。共感されないことはわかっている。——しのぶにもだ。

そんな、どんな生物にも慈悲深いカナエ姉さんが、人を拾ってきた。

しのぶはつり上がる眉を鎮めるために深く息を吐き出した。

連れてこられた少年は、しのぶの怒りを感じ取りカナエの後ろに隠れている。当の本人は、しのぶの怒りを蝶のようにひらりと躲し、にこにこほほ笑んでいる。

「しのぶ、ちようどよかった。この子の手当てをお願い。打ち身もあるからちよつと診てくれる。」

しのぶはまだ燻る怒りを鎮火するために、再度深く息を吸って吐き出した。

「紫緒はどうして診療所あそこの前で泣いていたの？」

カナエは拾ってきた少年、紫緒の顔を覗き込み柔らかく聞いた。カナエのほほ笑みは、どんな傷ついた心も癒す。

しのぶは紫緒を見た。紫緒の瞳はずっと下を向き、悲しみの色に染まっている。自分のことを言えたものではないが、10歳も満たない子供が世の中を悲観するには早すぎる。普通の人では推し量れない、絶望することが起きたのだろう。怪我の手当てをしながらしのぶは会話に耳を傾けた。

紫緒はカナエを見た。泣きたくなるほどのやさしい笑みが、年の離れた姉の笑みと重なる。

カナエを通して姉を見る。気がつく、記憶している姉の笑顔が頭に流れて止まらない。

姉が消えてから自身に絡みついていた緊張の糸がプツリと切れる音がした。喉の奥に熱が集まる。目に涙が溜まり、鼻がツンとする。声を出そうとするが、喉に声が引かかる。

紫緒はゆっくりと話し出した。

「……あそこの医者たちを問い詰めてたんだ。前に、父さんと母さんが調子悪くなって、あそこの医者に診てもらったんだ。そしたら、その後すぐに体が悪くなって、どっかの

病院に入院することになったんだ。それからもう、ずっと母さんたちは帰ってこない。手紙を出そうにも、病院の名前すら教えてくれない！」

紫緒の握りしめる拳をしのぶは優しく触れた。

「姉ちゃんの時も同じだ。始めはただの咳だつてあいつら言っていたのに、この間血を採つたらすぐに入院させようつて言いだしたんだ！」

紫緒の目は涙に濡れており、カナエをまつすぐ見る姿は痛々しい。

「そんなの、おかしいだろ?！」

しのぶはカナエを見た。眉を下げて紫緒を見つめるカナエに、しのぶはカナエの考えを察した。

カナエは人の弱みに弱い。どうかかして聞き入れたいと思つてしまう。紫緒の主張を肯定したいところだが、診察後に病状が回復せずに悪化することはある。おかしくは、ない。紫緒を傷つけずに、カナエはそれをどう伝えようか逡巡している。

しのぶは息を吸つた。意志の強い目が紫緒を射抜く。

「おかしくは、ないですよ。一応言つときますけど、そういうことはよくあることです」
凜とした声が、カナエの思つていたことを代弁する。

「正確には、処方薬が患者の体質に合わないということが挙げられます。薬が効きすぎたり、逆に効かなかつたり。または、薬の成分が体質によって副作用を起こしてしまう

ということもあります。そういう事がないように、医師は問診の際に患者の体質をよく訊く必要があるんです」

「しのぶ……」

カナエはしのぶを窘めたが、その声に否定はない。

紫緒は、しのぶの顔を見ることができなかつた。しのぶの言ったことを素直に聞き入れられない自分がいた。心の中にはわだかまりしかない。でも、だって、そんなこと、といった聞き分けのない言葉が頭を埋め、目に涙が溜まる。

悔しくて、悔しくて、腿の上で握りしめる拳に涙が落ちる。

しのぶは、涙にぬれる紫緒の拳を優しく包みこんだ。

「まだ家に、ご家族に処方された薬があるようでしたら、見せてもらってもいいですか？」

紫緒は耐えきれない涙と嗚咽を零し、大きく頷いた。

「先生、何があつたんです？」

助手は、落ち着きなく苛立っている医者を含めた目で睨みつけた。

医者 of 荒れた心境を表す様に、部屋は物が散乱し、桶の中の水や氷がぶちまけられて

いる。

医者は鳥を追い払った後、取られた物がなにか確認した。頭に浮かんだのは、赤い液体が入った小瓶である。

医者は小瓶を保管している遮光を施した桶を見た。数分前にはその中であつた小瓶が、消えていた。

——変若水おちみずが、無い。

長きにわたつて鬼の血液を基に創造した薬、変若水が消えた。

変若水は、医者と助手にとつて最も大切なものである。多大なる人間と金と時間をつぎ込んで創り上げた、人のまま鬼の力を得る薬だ。

外国との先の大戦を見据えて創り出したこの薬は、政府を相手に大金を巻き上げる予定である。

戦争に勝利した場合は、より強い富国強兵政策によつて求められ、負けても強力な力を求めて海外から買い手が殺到する。

薬が血と金の海を創り出す。

その試作品が忽然と消えたことに、医者は呆然と宙をみつめるしかなかつた。その瞳は小刻みに揺れ、現実を受け入れられないでいる。そんなはずはない、そんなことがあつてたまるか。数分前には、この中に、あつたんだ。

医者は何ぼうう瞳で再び桶を見た。

今まで感じたことのない不安が背後から襲い掛かってくる。それを追い払うように、必死に部屋の中を探し回り、手当たり次第苛立ちを物にぶちまけた。

言いやしない絶望と怒りで顔が歪む。

確証のない仮説を並び立て、医者は頭の中で鳥を惨殺した。

部屋に入る直前に襲ってきたあの鳥が変若水を持っていったに違いない。

「くそつ!! 鳥が!! 持っていてきやがって!!」

怒りを爆発させて叫ぶ医者に、助手は冷えきった表情を変えることはなかった。

「先生、深呼吸をしてください。一端落ち着きましよう」

「落ち着けるか!!」

長い時間と金と危険をつぎ込んだ変若水が消えたのだ。助手のようにすぐに冷静になれるはずがない。

焦りから頭を掻きむしる医者姿を見て、助手はため息をついた。

「窓を開けていたのは、先生の瑕疵です」

その目は、医者を冷淡に見ていた。相手の汚点を突きつけ、言葉で頭をぶん殴る一種のショック療法であった。

「現実を受け入れて、やるべきことを考えましよう」

助手は医者の手を掴み、穏やかにほほ笑む仮面を取り着けた。

「幸い、鳥に持っていかれたのならば、薬はもう日光に当たっているはずです。鬼の血は消滅しているのです、飲まれても発現しませんし、人の手に渡っても見つかりません」

助手の言葉に、冷えていた医者 の 指先が温度を取り戻す。人と触れることによって、焦りから狭まっていた視野が次第に広がる。

「少し、焦りすぎていたようだ」

医者は目を閉じ、これまでの事を思い返す。過去のデータと体験と知識からより理想的な物語を考え、何通りもの道筋を立てる。今なら、最善の策が考えられる。

医者は瞳を開けて、助手に頷いた。

「今夜、逃げるぞ」

力強く、堂々と宣言した。

医者 の 発言と行動には心底失望したが、彼は研究に大いに役立った。

あいつの言う通り、変若水が鳥に持っていかれたということが本当であるならば、それは既に使い物にはならない。

変若水は、日の光に当たることによって鬼の血液成分は消滅し、ただの薬品を混ぜ合わせた液体へと成り下がる。

その性質は利点であり、欠点でもある。薬が不本意な者の手に渡った時は、太陽の光に当たることによって効力が切れる。薬を飲まれていたとしても、その者は太陽の光を浴びた瞬間死ぬ。それは欠点もまた同じである。飲んだ者は、日中外へ出歩くことができなくなる。

医者と助手は診療所を出た。これから家に帰り、各々の荷物をまとめるためである。医者は助手に言った。

「夜、ここに一度集合しよう」

それを合言葉に、医者は自宅のある方向へ歩き出した。

「先生、また夜に！」

助手は笑顔で手を振った。その笑顔はいつもの優しいほほ笑みよりも、口角が上がっていた。

医者が道の角を曲がった途端、助手は自分の家の方向ではなく、医者と同じ方向に歩き出した。

用心深いあいつは、もうここには戻らない。夜を待たずしてこの町を出ていくはずだ。その前に、薬の情報と残りの鬼の血を奪わなければならない。一人だけ利益を搾取することは許さない。

医者は横目で窓硝子を見た。尾行する助手を確認し、想定通りの行動に口端が上がった。

——鏝鴉が烏ネットワークを掌握していた。

クルイは胡蝶家、通称蝶屋敷を訪ねていた。

鏝鴉を使って、盗んだ小瓶の情報を産屋敷本館に報告した後、耀哉の命により胡蝶しのぶと面会することになった。

鬼殺隊には支援者がいる。正確には、危険を冒さない程度までは、無償で手を貸してくれる人達がいる。鬼殺の隊士によって命を救われた一族が、藤の花の家紋を掲げる家に住み、末代まで恩返しとして手を貸す。

鬼殺隊の支援者には、胡蝶一族以外にも医療に精通する一族はいる。だが、危険域にまで足を踏み入れることができる人物は、胡蝶しのぶだけである。医学に精通し、鬼殺の剣士を姉に持ち、自らも鬼殺の剣士を志す胡蝶しのぶは、鬼殺隊にとって非常に重要な人物である。その胡蝶しのぶに、クルイは赤い液体の解析を依頼しに足を運んだ。

蝶屋敷は、周囲の家と比べて敷地面積が広がった。先祖代々医療に携わる家系であったため、そこらの診療所よりも、医療器具と薬品が揃えられている。

開け放たれた窓からは、木に染み付いた消毒液の匂いが微かに漂い、歴史の長さを感じた。

クルイはうんざりしていた。

随分と長い時間、門前で待たされているのである。門にノックカーが見当たらないことから手でノックしてみたが、誰も出てこない。その代わりに、怒りを爆発させた声が、母屋から門前まで長い顔を出した。

ずっと聞こえてくる怒声に辟易したクルイは、勝手に敷地に入り玄関まで悠然と歩き始める。その間も少女の怒鳴り声が途切れることはない。

ポケットに入れている小瓶を触りながら、怒り狂う少女の声に耳を傾け情報を整理する。

先程行った診療所は、患者の容態を故意に悪化させていたらしい。恐らくその患者らを鬼に流しているのだろう。この赤い液体と、患者家族から入手した処方薬は、診療所の弱点となる。この二つはまだイコールで繋ぎ合わせることではできないが、鎧鴉が掌握する烏ネットワークから有益な情報を得ることができれば、点在する点を俯瞰してみた時、一枚の絵となり全てを理解することができのだろう。

特別、興味はないが。

そこまで思考して、クルイは未だ怒り続ける少女にため息を漏らした。

どうしてそこまで他人のために感情を動かすことができるのだろうか。怒り続けることは、存外、自分も周囲も体力を奪うというのに。

母、キキヨウのヒステリックな叫びを思い出す。キーキーと甲高い声を出して叫ぶ弾丸トークは、そのまま耳の穴を的にして弾を放ち脳にダメージを与える。そういう時の対処方法は、話に共感するしかない。

かわいそうに、同情するよ。

相手を落ち着かせるシミュレーションをしながら同情という言葉も使ってみたが、その口調からそんな気持ちさが微塵もないことが自分でもひしひしと伝わってくる。

これでは相手の精神を安定させるどころか逆撫でするだろう。自分には向いていない。

クルイは失敗することを前提に勝手に玄関の戸を開けた。

胡蝶姉妹は信じられないのを見た。

家の塀から屋根にかけて、大量の鳥が留まっているのだ。紫緒は尋常じゃない数の鳥の大群に恐れをなして、一目散に部屋の奥へ逃げた。

「しづ、鳥に石でも投げたの？」

カナエは笑顔でしのぶに訊いた。

「姉さんは私をなんだと思っっているのよ」

しのぶは眉間にしわを寄せてカナエを見た。

しのぶはつい先程まで激怒していた。紫緒が持ってきた彼の姉の処方薬は、治療薬ではなく明らかに症状を促す薬だった。

副作用どころではない。故意に病状を悪化させるものだ。悪意をもって患者を苦しめた。亡き両親と同じ職に就く人間が、そんなことをする様に沸き上がる怒りを止めることができなかつた。両親を侮辱された気がした。

苛立ちが抑えられず、カナエの冗談に返す余裕もない。

「じゃあ、どうしてこんなにも家に烏が押し寄せているのかしら」

そんなの私も知りたい。

「ここに、オレがいるからだ」

背後から、カナエとしのぶが今最も知りたい答えを知らない人間が答えた。

二人はすかさず庭に飛び出し距離を取る。気配に敏い二人でも、目の前の少年の気配に気づくことができなかつた。

「紫緒!!」

カナエが叫んだ。目線の先には、紫緒が少年に抱えられており、ぐったりとしている。

カナエの声に反応しない様子から意識があるのか定かではない。

しのぶは腰に手をやったが、空を切っただけだった。つい、刀を持っている気になっていた。家の中だからといって刀を置いていた自分に苛立ちが募る。その油断が、命を分けると師範に教えられていたにも関わらず。この様だ。

しのぶは袖から小太刀を取り出し——構えた。

「しのぶ、やめなさい」

いつものまにか、目の前にはカナエの掌があつた。

カナエは前に出て、小太刀を構えるしのぶを手で制す。

視界を遮る手とカナエの声で、しのぶの張りつめた緊張が緩んだ。

「この人は鬼殺隊の人よ。刀を降ろしなさい」

紫緒に神経を使っていたが、よく見てみると、外套の下には鬼殺隊の隊服である黒い詰襟と刀を携えていた。死神に取りつかれたような死んだ目は、冷淡にこちらを見返し隙が無い。

そいつは、何事もないように淡々と言った。

「鬼殺隊、音柱のクルイだ」

しのぶは小太刀を降ろし、顔に笑顔を張り付けて心の中で罵倒した。

勝手に上がるな。門前で立ってろ、くそ野郎。

鏝鴉と胡蝶邸に集まった鳥が、大合唱という名の報告会を行っている間に、クルイは案内される形で部屋に入った。

テーブルを挟んだ向かいには、隊服を着た、頭に蝶の髪飾りを二つつけた胡蝶姉が座り、その後ろに紫緒と呼ばれる少年を寝かせている。姉の隣には、隊服を着ていない、頭に蝶の髪飾りを一つつけた胡蝶妹が、剥がれかけの笑顔の仮面をかぶって座っている。先ほど発した姉の声からして、さつきまでさんざん声を荒げていたのは妹の方なのだろう。感情を隠すためにかぶっている笑顔の仮面が目元まで落ちていく。

お前が気に入らない——と顔が語っている。

クルイはさっそく本題に入って逃げることにした。

「鬼殺隊当主、産屋敷輝哉の命によりはせ参じた。胡蝶しのぶにこの液体の解析を願いたい」

「お館様からの命ですって……」

クルイは、ポケットから布に包んだ小瓶をテーブルの上に置き、小さく頷いて説明を始めた。

「近くの町に住む人達は、病にかかりやすく、死に至るそうだ。その話に鬼が関与しているのか調査していた。結果、町に鬼の痕跡は見当たらなかった。かわりに、その町の診

療所からその小瓶を見つけた」

クルイは立ち上がり、障子を閉めて日の光を遮蔽した。布を開き、赤い液体の入った小瓶を二人に見せる。

「鬼の血を基に作られた薬だ」

カナエとしのぶは視線をクルイに戻した。その目は見開かれ、信じられないと言っている。

「この薬から、その診療所と鬼は繋がっていると見える。だが、鬼がその人間を食べずに、自分の血を無償で与えるはずはない」

しのぶの背中に、じつとりとした嫌な汗が流れた。『この近くの町』とは紫緒の住む町だ。薄々と、話の全体像が見えてきた。胸の内側から、不快な感覚が広がっていく。

目の前の人物は、文章を読み上げるように淡々と言った。

「体調を悪くした人は、誰を頼る」

先程まで、自分が怒りをぶちまけていた医者と目の前の人物が言っている診療所がはつきりと重なった。

「町の人の病は人為的だった、ということですね」

カナエの厳しい口調に、クルイはゆっくりと頷いた。

「正確には、作為的に悪化させている」

しのぶは後ろで気を失っている紫緒を見た。

「この子の家族も、その診療所の者が診たことによつて、現在行方が不明になっていきます。つまり、そういうことなんですネ」

「その情報を今、鏝鴉がこの地域に住んでいる鳥から訊きだしている。恐らく想像通りだと思うが」

鏝鴉に情報収集の方法を叩き込んだことが功を奏した。昼夜問わず飛び回ることができる鳥ネットワークは広くて深い。診療所に通っていた人間がどこへ向かったかはすぐに判明するだろう。

クルイは、『産屋敷耀哉』という名前の影響力を利用した。

「だからこそ、薬学に面識のある妹に、この液体の解析を願いたい。見たところまだ完成はしていない。成分を分析し、このようなことが起こらないように今後の役に立てたい、とお館様が言っていた」

「役に立てるつて、どんな……」

クルイは指を一本立てた。

「近い未来、その薬を飲んだ生物が現れるかもしれない。治療法を見つける必要がある」
 続けて2本目の指を立てる。

「鬼の生態を研究する。毒と太陽以外にも鬼を殺す方法が見つかる可能性があるかもし

れない。鬼の軌跡を細胞から辿る」

3本目の指を立てた後、薬の効力について言おうとしたところでクルイは言葉を止めた。

胡蝶姉妹の後ろに寝ている少年をじつと見る。先程までの空気の揺れと呼吸音の違いから、紫緒の目が覚めたことに気がついた。

しのぶはともかく、鬼殺隊に関係のない人間が聴いていいものではない。

クルイは手を降ろし、会話を勝手に終了した。突然話をやめたクルイの行動に胡蝶姉妹はついていけず、頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいる。

そのまま両者とも黙り続けていると、沈黙を破るように、羽根の音が聞こえてきた。鋌鴉が報告会を終えて告げに来たのだ。

……まずいな。

意識を失っていたはずの紫緒は、話を聞こうと狸寝入りを決め込んでいる。

クルイは、胡蝶姉妹に気づかれないように、テーブルの下から紫緒の頭を強打してもう一度意識を落とすことを考えた。

だが刀を握った時には既に遅く、鴉が部屋を旋回し叫んでいた。

「合ってたアア!! 合ってたアア!! 診療所の奴ら鬼に人間贈ってたアア!!」

その後も鴉は烏会議の要点を話し続け、鬼の潜む病院まで報告し終えたところでクル

イの肩に着地した。

クルイが無感情に鴉の足を掴んだと同時に、狸入りを決め込んでいた紫緒は勢いよく起き上がり、宙を睨んだ。顔色は血の気が無く、青を通り越して白くなっている。

紫緒は淀んだ目でクルイを見た。

「鬼って、何。……父さんも、母さんも、姉ちゃんも、みんな、あいつらがその変な薬を創るために、鬼のところへ連れて行かれたのかよ」

「紫緒っ」

カナエが口をはさんだが、紫緒はかまわずクルイを見続けた。

クルイは黙って紫緒を見た。その目は何も答えを映してはいない。

紫緒は勢いよく立ち上がり、クルイに駆け寄りすがりつく。抑えきれない衝動が体を突き動かし憎悪を吐き出す。

「……一生のお願いだ。あいつらを殺してくれ。父さん、母さん、姉ちゃんを奪った、あいつらを殺してくれ!! 頼む!! 頼むよ!!」

クルイは嘆息した。基本的に低いテンションが更に降下していくのを止めることができなかった。

こいつに暗殺者だったと言った覚えはないのに、こいつは人殺しにオレを選んだ。自分の中で、乾いた笑い声がこだまする。

いくら手を汚しても洗うのは足だ。汚れたれ手で足を洗っても汚れたままだ。家業という色素が己に刻み込まれて染みついている。

まあ、別に嫌なわけじゃないけど。

残酷な王が出来な臣下を問い詰めるように、クルイは紫緒の眼を見ながら心に見えない刃を突き刺した。

「殺してくれ？ オマエは何を差し出せるんだ？ その年じゃ金はない。生涯待ったとしても予測範囲内の稼ぎじゃ価格の足元にも及ばない。才能という才も開花していない、利用してもオマエのような考える力も、体力もないやつは使い物になる前に死ぬ。身代わりにしてもその貧弱な体じゃ盾にもならない。存在の価値も無い。そんな利用価値の無いオマエと、何を取引に契約するんだ。自分の価値を考えろ」

紫緒は絶望した。勢いよく、心から血が流れていき、自分の中が空っぽになる。言葉を否定して、壊れたように頭を左右に振ることしかできない。

「紫緒……」

肩を触るしのぶの温かさに、涙が溢れ、どうしようもない思いが溢れてくる。

——今の自分は、無価値だ。

その事実には耐え切れず、紫緒は部屋を飛び出した。

クルイは掴んでいた鴉の足を離し、鴉は飛び立った。

06

踏ん張れ、踏ん張ったその先に可能性はある

走り去った紫緒の名残を見ながらクルイはしのぶに言った。

「追わないのか？」

「追うなら貴方が責任をもつて追うべきです」

「なら捨て置く」

オレが行く必要は無い。何の責任があるのか理解できないが、情報源の子守りは後を追った鋭鴉に任せる方が得策だ。少年が身の丈に合わない危険に足を踏み入れた時は、鴉が面倒を見るだろう。監視するよういつも目を光らせている。

しのぶは、涼し気に紫緒のことを気にしないクルイに怒りを覚えた。笑顔の仮面を剥がし睨みつける。

「あなたねえっ」

「しのぶ、やめなさい」

苛立ちを濃縮した声は、カナエによつて言葉を繋げることができなかったが、しのぶ

を咎めたカナエの目は、しのぶと同様に強くクルイを批難していた。

「他にもまだ、何か用があるんですよね」

言葉の裏から「用が無いならさっさと帰れ」という声が聞こえてくる。

クルイはゆつくりと小さく顎を引いた。

「今夜、鬼を殺しに行く。これから本部に連絡し、救助の人員を確保する。胡蝶姉は隠かくしの護衛をしろ。オレが鬼と闘っている間にアンタは隠を引率し、生きている人の救助に向かってくれ」

鬼との戦闘は一人で十分だが、救出と事後処理は人手が必要である。一人でするよりも人数を集めた方が効率的だ。一人の労力を最小限に済ませ、最大の効果を図る。たがらこそ人数の確保が必要となる。

「わかりました」

しのぶは遠慮がちにカナエの袖を掴んだ。

「ねえ、姉さん。隠ってなに」

「……隠は、非戦闘員の事です。剣技で鬼殺隊に貢献するのではなく、剣士の補助、後処理、医療や隊服の開発など前線部隊の補助から裏方まで手助けしてくださいださる方々のことよ」

そうですよね、とカナエはしのぶからクルイに顔を向ける。

しのぶに見せないその表情は、口角だけが上がった歪な笑みだった。今まで隠の存在をしのぶに隠していたような、そんなぎこちなさをクルイは感じた。

「医療……」

眩きながら考えているしのぶに、カナエはじわりと汗が吹き出る。しのぶが次に言ひ出す言葉が既に分かる。

「姉さん、私も行く。行つて怪我人の手当てをする」

「それは駄目。しのぶはここで待ちなさい」

「でもっ」

クルイは胡蝶姉妹を見て察した。

互いが互いを大事にして縛りあっている。立ち位置の違う二人が、互いの見えない命綱を持ち、縋りついているように見えた。片方の命綱が切れた場合、もう片方は己を変えざるを得ない危うさがある。

どの世界も、いつの時代も、家族、特に兄弟は特別だ。だからこそ、執着する。

イルミとキラア、クルイとミルキ、キラアとアルカ、カルトとアルカ。胡蝶姉妹と自分達の関係を比較し、思わずため息が出た。我が家の兄弟間の執着は、昼ドラに負けず劣らずどろどろとしている。

姉は妹を危険な場所へ行かせたくないのだろう。そもそも、鬼殺隊を目指すことすら

何かしら思うところがあるのかもしれない。たった一人の残された肉親。危険度の低い場所で、寿命尽きるまで幸せに生きてほしいと願うのだろう。

まあ、オレには関係ないことだが。

クルイは軽く目を閉じて計算した。

喰食われる者を取り除くためには、人手が必要である。たとえ新人であっても、一人でも多くの手足が生存者の数につながる。

クルイはカナエを連れていく代わりに、カナエの意志を汲むことにした。これから起こることを何通りもシミュレーションしてカナエに仕掛ける。

「妹は、鬼殺隊の一員なのか？」

その答えはわかりきっている。

「いいえ、まだです」

「呼吸は使えるのか」

それも知っている。

「使えます」

しのぶがカナエよりも先に答える。だがカナエはその答えに注釈を付け加えた。

「妹は、私と同じ花の呼吸の使いです。ですが、しのぶは小柄で腕の力が弱いので、鬼の頸を落とすことはできません。今は、花の呼吸から派生させた蟲むしの呼吸、突き技に特化

し、かつ毒をもって鬼を殺すように研究と訓練を積んでいる最中です」

カナエが話している最中から、しのぶはカナエをきつく凝視した。

——余計なことを言わないで。

口に出さずとも、その声が聞こえてくる。

クルイはため息をついた。カナエの言いたいことがひしひしと伝わってくる。

——しのぶを連れて行かないで。

カナエから視線をずらし、しのぶの身体を見た。

細く小さな肢体だ。骨格からして、これから成長期に差し掛かっても予測範囲であれば、頸を切り落とす程の筋力はぎりぎりつくかつかないかのところだ。たとえついたとしても、一体斬り落とすのが精一杯となるだろう。

王道で戦い続けるには向かない体格だった。故に、力を使わない相手の致死量に頼る毒殺。

クルイはしのぶの地雷を察知した。爆発しないように、爆弾を覆っている土をきれいに掃いて存在を顕にする。

「他力本願の毒殺か」

しのぶの眉がぴくりと動いた。

突きで毒を注入し、毒をもって鬼を殺す。

恐らく、毒は藤の花を濃縮して濃度を変えて創っているのだろう。

クルイは最終選別の期間、自身が検証していたことを思い返した。

しのぶは、人よりも劣る能力に見切りをつけ違う能力をもつて補うという選択をした。蝶のように舞い、蜂のように刺し、毒を以て毒を制す。時間を掛けて足りないものを伸ばし、人並み以下になるよりも、足りないものを捨て、伸びる能力に可能性を賭けた。

クルイは、しのぶの苦渋の決断に気づきながらも地雷の周辺を撃ちぬいた。

「毒を使うなら2の手3の手を用意しないと使えないな」

猫が毛を逆立て威嚇するように、しのぶは殺気を飛ばしてクルイを睨みつけた。自分ではどうしようもない悩みに焦りもがき苦しむ少女がそこにいた。

「あなたに……何が分かるんですか。身体が小さく、筋肉量が圧倒的に乏しい人間が、努力してもどうしても手に入らないものを、悔しそうに、物欲しそうに見ていると言っんですか。私は、好きでこんな小さな体なんじゃない！　せめて姉さんと同じように、自力で鬼の頸を斬れるくらいの体格が欲しかった!!」

しのぶの目に涙の膜が張る。悔しさから感情が高まり、涙が溢れて止まない。

「仕方ないでしょ！　これから先の成長なんて知れてるんだから！」

クルイは地雷に照準を当て、撃ちぬいた。

「かわいそうに、同情するよ」

何の感情も無く、薄っぺらい言葉だった。

しのぶは、目の前の人物が同情という言葉を使っているが、その口調からそんな気持ちが無さなことを心底感じとった。

「きゃーまあー!!」

毒を塗った小太刀を構え握りしめる。畳を踏みしめ、力を爆発的に発散させた。瞬間、しのぶの姿が消える。しのぶがいた畳は穴が開いた。

速さに自信を持つしのぶよりもクルイは速く動いていた。しのぶの速度、移動場所を予測し、背後から小太刀を奪い取る。

クルイのその行動が、しのぶの怒りをさらに爆発させた。力の無いしのぶは誰よりも速くあることを目指してきた。速さだけであれば、隊士である姉のカナエよりも速いと自負している。その速さを目の前の男は顔色一つ変えずに凌駕した。しのぶの自尊心が、次々と傷つけられていった。

クルイは、小太刀の刀身を日に当てた。油のような粘土の高い液体が刀身に付着している。クルイはしのぶを見て鼻で笑った。

「オレに毒は効かない」

毒を塗っている刀身を指で拭き取り、舐める。

しのぶとカナエは愕然とした目をクルイに向けた。

「すぐに吐き出してください!! 水を取ってきます!!」

カナエはすぐさま部屋を飛び出し、水を取りに行った。

「別に死なねえよ」

その眩きは、カナエにも近くにいるしのぶにも届くことはなかった。

クルイはため息を吐き、しのぶの目を射抜く。ゆつくりと暗示をかけるように、しのぶの心を揺さぶった。

「オマエ、死ぬよ。オレみたいに毒が効かない鬼がいたらどうする。戦いながら調査したとして、新たに毒を解毒され続けたらどうする。どちらが先に尽きるか耐久戦に入ったらしたら、確実に体力のないオマエが死ぬ」

しのぶの足元に小太刀を投げ刺す。

「そうなることを前提に戦略と戦術を立てろ。薬で自分の肉体を強化し頸を斬るか、もしくは自分の体を毒の塊に変えるのか。喰われて運よく相手を殺すか、弱体化したところで仲間頼って殺してもらうのか」

胡蝶しのぶという名前の人形を見るように、何の感情もなく評価を述べた。

「毒を使うなら戦術を増やせ。じゃなきや使えねえ」

しのぶの頭に「使えない」という言葉が鳴り響く。全身の血液が一瞬にして奪い取ら

れ、体温が消え、立っていられなくなる。

「死^最に方^後を選択するのは己だ」

呆然と座るしのぶに、クルイは小瓶を握らせて部屋を出た。

人は平気で嘘をつく。先生との関係は嘘の塊だった

思わず頬が引き攣った。

これから先生を殺し、研究資料を盗む。

窓に触れるまで、数秒の時間が必要だった。早まる心臓を抑えつけるために、深く息を吸う。

小刀を握り、覚悟を決める。閉じていた窓を開けて部屋の中に入ると、突如すさまじい破裂音に襲われた。糠床をかき混ぜるように脳内をかき混ぜられて思考がぐにやりと歪み、吐き気を催す。暫くの間聴覚が消え、同様に他の感覚も消える。

右手に激痛が走り、声にならない叫びと共に床に蹲る。右手は血で赤く染まり、普通ではありえない角度まで手首が曲がり垂れている。視認して思わず叫ぶ。

視覚と混乱から脳が必要以上の痛覚を訴え、精神を錯乱させる。

頭に何かがつきつけられた。目線の先には、銃を構えた先生がいた。

白黒する目を落ち着け呼吸を整える。全身から大量の脂汗が噴き出し、痛みと悔しさから顔が歪む。

——全部、掌の上かよ。

舌打ちをすると、男はにこやかにほほ笑んだ。その表情から、自分の行動が全て読まれていたのだと再度理解する。

別れた後すぐに追ったことも、窓から入ることも、武器を持っていたことも全て読まれていた。

「よく来たな。体調不良か」

いつも通りの男の声音に恐怖から尋常じゃない速さと大きさの鼓動が聞こえてくる。息も早くなり目の奥がチカチカと点灯しては消える。まともな精神状態ではない。それでも強がらなければならぬ。弱っていると見せてはならない。仕掛けたのなら、勝たなければ意味がない。

「華やかなおもてなしのおかげで、たった今」

血の花火なんて初めて見ました。あまりの激痛にそんな軽口は続けられなかった。痙攣するように、片頬だけが引き攣る。

活路を見出すために、呼吸を整えながら目だけで周囲を見渡す。持っていた小刀は手を伸ばせば届く距離に落ちているが、男はそれを許すはずがない。その僅かな距離が、

ひどく遠く感じた。

気づかれぬように軽く部屋を見渡す。視認できる範囲には、罨はない。もつとも、綿密な罨を仕掛けているか、この思考すらも罨で追い打ちをかけようとしているのであへば見抜きようもないが。

耳元でカチャリという音がした。

男には表情がなかった。長年連れ添った助手を殺そうとしているのに、実験動物に薬品を注入するような作業的な目をしていた。そこには何の感情もない。手間をかけさせるな——そんな心の声が聞こえてくる。

——このままだと確実に死ぬ。

時間を稼ぎ、銃の軌道を逸らすことができなければ即死だ。

1分間、自身の話術に未来の時間を賭ける。喋り続けていけば、銃を扱い慣れていない先生は、腕の疲労から照準がずれるのではないかと考える。それは願望でもあった。

医者が苛立つように、助手はシニカルに笑う。

「先生、変若水は……本当に鳥が持つて行ったと思ってるんですか？」

上目に医者を見て、心の片隅にある疑心を煽る。

医者は何も答えなかった。質問に反応すること、自身の思考と心理情報を読み取られると危惧しているのだろう。だが、この質問に関して沈黙という選択は過ちである。

静寂が、医者 of 心の声を雄弁に語っている。

「先生もおかしいと思つてるんじゃないですか？　じやなきや急いで今夜この町を出るなんて言いだしませんよ。鳥が持つて行つたのなら、部屋から持ち出した瞬間、太陽の光で使い物にならないはずじゃないですか。研究は秘匿されたままです。なのに、何で、町を出ていくんですか？」

激痛と血が流れすぎて考えがまとまらなくなつてきた。何が効果的な言葉なのか、導き出すことすら億劫になる。

それでも、虚勢を張つてにやついた笑みを浮かべ続けた。

「先生、本当は思い出したんじゃないんですか。部屋にいた鳥は、足に、口に、何か啜えてました？　予想では——」

嫌らしく嗤い、声を潜めて言つた。

「鳥を囿に、誰かが盗んだ——」

「なんてね」という言葉と同時に俺達は動いた。先生の腕に向かつて突進し、銃口を逸らすと同時に腕を床に叩きつける。奴は引き金を引いたが、銃弾は関係のない方向へとそれた。

先に立ち上がったのは奴だった。奴は窓を背にし、再び俺に照準を合わせた。

こちらは立ち上がる気力も体力もない。先程の耳元の発砲で聴力もない。体当たり

は予想以上に体力を奪い、極わずかな延命を得ることになった。それでも、再び窮地だ。諦めからか、涙が零れ落ちてくる。死にたくないと思ふに、死にそうなる今、死ぬほど願っている。

自力でこの状況をひっくり返す方法が思いつかない。ここまでか、と生きることを――諦める。

先生に撃たれる覚悟を決めた時、窓が割れた。

窓を背にして立っていた先生の横を拳大の石が割って入ってきた。

先生は思わず外を見た。

俺はその好機を逃しはしなかった。床に落ちていた小刀を掴み胸を刺す。先生と一瞬目が合う。初めて見る、笑えるほど驚いた顔だった。それなのに、なぜだか涙が出てくる。湧き上がる感情にそんなはずないと、心を消す。

先生を殺した。すぐに止血して、研究資料を集めて出ていかなければならぬのに、体が動かない。達成感を凌駕する疲労と出血で、全身が重りになったように重たい。

少し休んだら、また動けるようになるだろうか。そう思いながらも意識が遠のいていく。

まだ、死にたくないな――。

——傷ついたら負けだ

あてもなく、腹の底から湧き上がる衝動を発散するように、紫緒は全力で走っていた。どこまで走るのか、いつまで走り続けるのかわからない。体は背中から疲労がのしかかり、頭は全てを拒絶して何も考えることができないうでいる。だが漠然と、立ち止まれば泥濘に足を取られ立ち上がることができなくなる気がした。

走りすぎて喉が苦しい。心を刺されすぎて心苦しい。

大きく息を吸い込み、咽て呼吸のリズムを崩す。唾液が気管に入り込み咳が止まらず涙が滲む。

足を止め、痛む喉と肺を鎮めるために壁によりかかった。口を開けて空気を吸い込み吐き出すが、唾液と涙が落ちるだけで呼吸と気分は落ち着くことはない。その焦燥がまた更に、無力な自分への苛立ちに拍車をかけた。

走ったって意味がないことぐらい本当はわかっている。あの人が言ったように、無価値で無力な自分に何ができるのかわからない。分からないから、走ってどうにもならない思いを発散するしかない。

家族を奪った診療所の奴ら、家族を殺した鬼を殺したい。ただ殺すんじゃなく、体の内側から腐るようにもだえ苦しめ地面に這いつくばるような苦痛を与えて殺したい。

自分が受けた以上の苦痛を思い知らさないと気が済まない。

紫緒は壁伝いに座り込んだ。石を握りしめ、鬱々と呪いを吐き続ける。石に呪いが籠るように、ひたすら強く石を握りしめた。

石を蹴つて歩く人を淀んだ目で見ると、人が蹴った石は小さく飛び、次々と人に蹴られていった。

握りしめる石を見た。蹴られて飛んでいった石の映像が何度も頭の中で再生する。蹴飛ばされた石と一緒に、このドロリとした暗い呪いも飛んでいけばいいのに。

呪いを纏った石を奴らに投げることで、消化できない憎悪を奴らに浴びせる。人の想いは、重い。

地面を睨んだ濁った目は、周囲にいた人達をひるませた。見てんじゃねえぞ。

怯える人の視線すらも、神経を逆なでた。自分を守るように、目を瞑り、耳を塞ぎ、情報を遮り——膝を抱えて俯く。

——近くで、バサバサと羽根の音がし、鋭利な細長い何かが頭を小突く。何度も何度も何かか頭を小突く。顔を上げて、ゆっくりと見上げると烏がいた。

鴉は頭上を旋回し、何度も紫緒の頭を蹴り続けた。

「痛っ！ 痛いって!!」

紫緒は立ち上がり鴉から逃げますが、鴉はしつこく紫緒の後を追いかける。

「なんで追ってくるんだよ!」

「命令ダ! アホーアホー」

「しゃべってる!?! あの人の鳥かよ?!」

紫緒はカナエの屋敷で見た、人の言葉を話す鴉を思い出す。逃げるのを止め、飛んでくる鴉に向き合う。鴉は近くの建物の屋根に着地し紫緒を見下ろした。

目に殺意を宿して、紫緒は鴉を睨み上げた。

「あの人の鳥なら、診療所の奴らがいるところに連れてつてくれ。知ってるんだろ」

誰にも頼らない。自分であいつらを殺してやる。

「バアーカバアーカアア。オマエが殺すのは人間じゃナイイイ。鬼ダアア」

「うるさい!! おれは両方殺す!! でも、姉ちゃんをそんな目に合わせたやつらをまず殺す。殺せる相手から殺す!」

バアーカアアアア。鳥は瘡に障る鳴き声を上げながら再び頭上を旋回し始めた。目で追うと次第に暗示をかけられていくような気になる。

「生きてルウウ 姉サン稀血イイ マダ生きてルウウ」

「姉ちゃんが、生きてる……?」

その情報だけで紫緒の瞳に光が戻る。目を覆っていた淀みがポロリととれ、目頭が熱くなる。

心のどこかで、姉はもう喰われたと思っていた。

「姉ちゃんのいるところへ案内してくれ。でもその前に……」

・
紫緒は石を強く握りしめた。

「恨^石みを投げ入れたい」握りしめた石を鴉に見せる。鴉は頷くように数回跳ね、飛び立った。

紫緒は鴉を追って再び町を駆けた。

——鬼のような人を初めて見た

ドン——つという音と揺れに目が覚めた。

地面が大きく揺れて地震かと思ったが、揺れ方が違う。花火のような焦げた匂いも鼻につく。

一体何なんだ。

部屋の外に出ると女医が走ってきた。

いつも院長を支え、優しい笑顔を浮かべている女医の目が血走っている。

「襲撃よ!! 備えて!!」

彼女は甲高い声で早口に命令した。

「院長を狙ってるやつが襲撃してきた!! 戦って!! 武器をもつて!!」

キャンキャンと叫ぶ声は周囲に響き、それにつられて多くの人が部屋から顔を出す。

しゅげきって、襲撃?

言葉を理解するのに時間を要した。隣にいた人と目を合わせるが、相手も目を丸くし

たことから自分と同様に状況を理解していないことが分かる。

ドン——つと再び大砲を撃つ様な音がした。直後に揺れと物が壊れる音がし、襲撃という言葉を実感する。

ずんと心が沈んでいく。破壊音と共に、この幸せな生活が崩れるのではないかという底知れぬ恐怖が、胸の内からじわじわと広がっていった。

親に売られ、人買いにも売られ、更に売られてこの病院に来た。最後に自分を買ってくれたこの病院での暮らしは、涙が止まらない程幸せに満ちていた。人は死んだら天国へ行くと聞くが、生きているにもかかわらず、自分は天国にいる。

衣食住を与えられ、優しい人達と会話し、患者さんの身の回りの世話をし、戦闘の訓練をする。十分すぎる生活だ。

全て慈悲深い、院長のおかげだ。

院長は、どこの医者も匙を投げた助からない患者を受け入れる。また、自分のように売られた人間も買い、奴隷ではなく普通の人の様に扱ってくれる。

神様がいたら、その座を院長に明け渡すべきだと自分は思う。

だから、そんな優しい院長に仇をなす奴、こんな幸せな生活を奪う奴を、絶対に赦さない。

玄関が見える廊下で身を隠す。

女医の号令に従い、爆破された正面玄関へ四人一組の隊が複数向かう。

白で統一された神々しい嘗ての玄関は、瓦礫の山へと変わっていた。粉碎された扉の破片は散乱し、四方の壁は黒く煤け、瓦礫が壁を砕き新たな瓦礫を生み出していた。

神聖な建物を汚されて憎しみが胸を歩き回る。その不快感に、薙刀を握りしめる手力が籠る。

自分達が襲撃者に立ち向かい、その間に院長と患者を逃がす。足の速い奴が山を下り、麓の人を呼んでくる。要は時間稼ぎだ。

自分達は院長の盾だ。一人じゃ耐えられないかもしれない。だが、ここにいる奴らであれば、襲撃者を迎え討つことができる。

足音も立てずに、そいつはゆっくりと入ってきた。

4人でそいつを囲み、じわじわと距離を詰める。訓練通り調子を崩さずに攻撃を仕掛ける。一人目が足元を蹴り、二人目が刃物を突き刺し、三人目が裏拳からの回し蹴りをし、自分が薙刀で斬りかかる。間髪入れずに次々とそいつを狙う。

連携して致命傷を狙い続けるが、そいつは涼しい顔で全ての攻撃を躲かしていた。

気がつくくと、有利だった自分達が、いつの間にか不利になっていた。

長い時間、全力で闘い続けて息が切れる。薙刀を振るう腕が重くなり、腕が上がらな
い。

そんな体の変化が隙を作り、相手を有利にした。

そいつは一瞬で仲間の懐に飛び込み、鳩尾を殴って気絶させ、それを盾にしながら他
の二人を昏倒させた。

えっ、と思った時には手遅れだった。顎への衝撃と共に目の前が真っ暗になり、立つ
ことができず倒れていた。

顎が痛く、頭をかき混ぜたように気持ち悪い。吐いて楽になりたいのに、胃の中に何
もなく吐くことができない。気持ち悪さが頭の中で円を描いて走り回っている。

目の前にあるそいつの足を睨む。掴む前に手を踏みつけられ、それは叶わなかった。
こいつに殺されるかもしれない、そう思うと怨念のように勝手に言葉が出てくる。

「赦さねえぞ……。院長を狙うとか、赦さねえぞつ！ あの人はなあ！ 自分達の神様
なんだよ。どんな難病な患者も、自分達みたいな売られた人間も、あの人は絶対受け入
れてくれるんだよ!! そんな人を、お前は何で狙うんだよ!! お前はそれでも人間かよ
!!」

見上げて、睨みつける。下からはそいつの顔がよく見えた。

無表情で、温度の無い残酷な瞳が自分を見る。どこまでも不安を煽る真黒い視線に、

体が震える。

「残念ながら、オレは人間だ」

そう言つてそいつは歩き出した。歩く先には院長がいた。

幼い頃の話だ。初めて暗殺^{仕事}を任された時は、鼓動が激しく鳴る中、どうにか仕事を終えていた。数え切れなくなるほど仕事をこなしていくと、慣れからか、恐怖や緊張で鼓動が増すことはなくなっていた。

そんなオレの訓練は、幼い頃は祖父のゼノが面倒を見ていたが、キルアが訓練に加わるようになってからは、イルミに変わった。

ゼノとイルミは仕事の考え方が違った。ゼノは可能な限り堅気の人間の命を奪わないことを心がけていたが、イルミにはそんな信念はなく、ターゲットと自分の直線上に邪魔があれば、排除して仕事を全うしていた。それは一般人であつても変わらなかつた。

イルミはゼノの教えを上書きしていった。

クルイは、初めてターゲットとは関係のない者を手にかけて時、珍しく鼓動が増した。それを期に、メンタルが崩れるということではなく、数え切れないほど邪魔を排除した

時、慣れからか鼓動が増すことすらなくなっていた。

——宇髄に会おうまでは、そうだった。

目の前に立つ、白衣を纏う鬼を挑発する。

「随分慕われているんだな」

「どん底を経験した人間は、少しの優しさで最大限の恩義を感じるものさ」

「人心掌握を心得ているわけか」

「人望は、時に現実をねじ曲げる都合の良い絵画だな」

「鬼のアンタが人望とはねえ」

「人間は、見たくないものは無かったことに、良いものは誇張する。人ではない私よりも、人である君の方が人望が欠乏しているようにみえるな」

鬼はクルイを観察しながら、自身の見立てが的を射ていることを確信し、頷いた。

クルイは先程戦った人達を思い浮かべた。

結局人は認識で動くものであって、真実なんて後回しだ。そいつを盲目的に祭り上げた時には、真実は仮面をかぶって現実に胡座をかいている。

ならば、

「その人望が絶望に変わる前に消滅しろ」

「そういう訳にはいかないさ。彼らもまた、信望ある私を襲撃者から助けたいと所望している。幸薄い味気の無い人生に、最後に花を添えてあげて何が悪いのさ。彼らの死後に花を添えてくれる人はいないのだから」

「最期は鮮やかに散らせてあげたいと、私は切望している」鬼は穏やかな表情から唇を舐め、鋭利な牙を見せた。

掌から粉末を出現させ、それを空気中に撒いた。

粉末の血鬼術か。それとも能力の一部か。

粒子は鬼のオーラを纏っていた。

クルイは入り口へ後退し、粉末を見つめる。

粉は倒れている人間に降りかかり、体内へと吸収された。粉を吸った者は、呻き声と共に姿形が変わっていく。

クルイは、個々人の生命エネルギーと血鬼術が混ざり合い、眷属へと変わる様を視ていた。

研究者が結果から得られたデータを考察するように、クルイは結果から鬼の能力を考察する。

毒と同類の能力。恐らく眷属化のみならず他にも作用がある。

鬼は眷属を見て、鼻で笑った。

「体は常に全力を出し続け、脳は疲労を感じない。彼らの頭の中は常にお花畑になっている。たとえ彼らが死んだとしても、彼らは鬼血術によりこのまま私に吸収される。君は彼らを助けることはできない。君たち鬼殺隊は、鬼を殺し、人を助けることが役目のようだが、こいつらはもう助からない。目の前の人間がみすみす殺されてしまうようでは木偶の棒もいところだ」

「勘違いしている様だが、鬼殺隊の役目は人を助けることじゃない。鬼を殺すことだ。経験上、人を操作する奴は総じて執着心が歪んでんだよ」

クルイの淡々とした返しに、鬼は「確かに」と手を鳴らした。

「だが残念ながら、私は彼らを操作していない。私のために戦うのが彼らの意志なんだ」
鬼の言葉に呼応するように、倒れていた眷属達がゆっくりと起き上がる。眷属達は身体が動くことに満足し、再び闘志を宿らせた。

操られていない、まっすぐな目でクルイを睨みながら彼らは言った。

「院長！ ここは自分達がやります。今の内に逃げてください！」

「感謝するよ。君たちは私の恩人だ」

鬼は彼らを鼓舞し、用はないと背を向けて歩き始めた。

何処からか、イルミの声が頭に鳴り響く。

——何やってんの。クルイは任務完了が第一。命は第二。クルイも含めて周りの命

は任務よりも下だ。例外はキルだけだ。ほら、早く邪魔なものを排除しないと、ターゲツトが逃げるよ——？

音の呼吸——壱ノ型 轟

クルイはその場から消えた。双刀を交差して前を塞ぐ集団を斬った。

『轟』という名前とは対照的に、クルイの放った技には音が無かった。ただ、斬りつけられた眷属達の轟くような叫び声が建物に響き渡り、血が派手に飛び散った。

技自体が轟音を鳴り響かせる宇髄の壱ノ型とは異なる、技を受けた者が轟音を発する壱ノ型へと変化した。

痾癩が玄関を爆破する——。爆発音は森の中まで響き、建物は扉だけでなく壁も砕け散った。

痾癩に巻き込まれた男達は、そのままピクリとも動かなくなった。

隠の一人が望遠鏡を覗き、その光景に息をのんだ。「嘘だろ……」体が次第にガタガタと震え、思わず呟く。人が死ぬ瞬間を初めて見て戦慄した。

自分たちは今まで、戦いが終わった後しか知らなかった。亡骸はいつも剣士の方々が埋葬した後だった。悲惨な光景を緩和してくださっていた優しさを、深く理解していな

かった。

脳内に焼き付いた光景が、再び映し出され体が小刻みに震える。森の奥へ駆け込み、胃の中身を吐き出した。

大きな病院が見える森の中に、カナエの隊は待機していた。カナエを含む剣士二名に数名の隠という構成だ。

クルイが派手に正面から突入することで、敵の戦力をクルイ一点に集中させる。その間に、カナエ達と同様に、建物内の人を救出する隊が裏口から突入する。

クルイは再三、隊に釘を刺していた。「患者を救助するためにオマエ達を呼んだ。それ以外は求めていない」柱の命令に、カナエ達は100%の力を救出に向けていた。

誰も意見する者はいなかった。彼の存在感は圧倒的だった。温度を感じさせない、無機質な表情がより不気味な力を際立たせていた。

爆発から暫くした時、カナエはクルイの事が気になった。ここに来る前に、屋敷でしのぶを説得してくれたことを未だ気にしている。

——直接役に立つことはできないだろうか。

微力ながらも補助できないかと思いい悩むが、邪魔だと釘を刺されたばかりである。確実に足手まといになると断言できる。だが、それでも役に立ちたいという気持ちがあ

る。

望遠鏡を覗いていた隠が森の奥へ駆けた。それに気がついたカナエは後を追った。

「大丈夫ですか」

「おえ、……ありがとう、ごさいます」

カナエは背中をさすりながら声をかける。

「体調が悪いのでしたら、帰った方がよろしいのでは」

体調が悪い人間を連れて突入することはできない。突入後は、守るべきものが増える。鬼殺隊の隊士が守られる側になることは望ましくない。

「いえ、大丈夫です」

「ですが……」

「さつき、爆発で、人が死ぬ瞬間を初めて見ました。自分たちは、剣士の皆様が闘った後その地へ向かいます。そこで亡くなった方々の亡骸は、自分の場合はいつも、剣士の方が埋葬された後でした。戦いの痕跡を見て、すごい戦闘だったんだろうとか、亡くなられた方や隊士の遺品を見てやるせない気持ちになりましたが、でもそれは、ただその結果を見ているだけでした。数字を見ているようなものです。自分たちは、直接その瞬間は見ていません。その感触も知りません。人が死ぬ、あの心を抉り取られるような感覚を自分は知りませんでした」

隠は泣いていた。目の前で涙を流す彼と同じく、カナエの瞳も涙に濡れていた。

「あなたは、お優しいんですね」

隠は、カナエの涙と柔らかい声音に、黒く燻っていた感情が浄化されていった。本当に優しい人間というものを初めて見た気がした。

「違うんです。自分はただ、人が死ぬということを実感していなかったただけなんです」

「実感して、自分に嫌悪感を抱いて、抗って、涙し心に刻むあなたは、十分優しい人ですよ」

隠が大丈夫であることを確認すると、カナエは背中をさすのをやめて立ち上がった。「救護場所で私たちの帰りを待っていてください」その言葉を残し、仲間の元へ歩き出した。

カナエは隊に正面玄関の様子を見に行くことを告げ、他の隊員達とは離れてクルイの元へ向かった。

隠は先程『爆発で人が死ぬ瞬間を見た』と言った。クルイの作戦は『敵』を爆破するはずだった。

カナエの中で悪い想像が膨らんでいく。クルイが爆破に巻き込まれたのか、もしくは『敵』は鬼を指していなかったのか。

焦る気持ちが足を前へ前へと突き動かす。

正面玄関は爆発により火薬臭く、他の生臭い匂いと混ざり合い、死臭を充満させていた。熱い風に乗って、匂いを辺り一面にまき散らしており吐き気を催す。

カナエは玄関の入り口に立ち、愕然とした。建物の中に、多くの人が倒れていた。声をかけながら近づくと、その人たちは血にまみれていた。

風に乗って流れてきた生臭い匂いの理由をカナエは理解した。

血だらけで倒れている一人の男性に近づいたが、呼吸はなく動いている様子もない。声をかけても反応は見られない。男性の頸動脈に触れるが、やはり脈は感じられなかった。

周りを見渡してもクルイの姿が見当たらない。だが死体からは刀傷が見られる。

これはどういうことなの……。どうして、こんなにも多くの人々が亡くなっているの。これは——誰がやったの。

耳元で、自分の鼓動が早鐘を打つ。頭では、回答は導き出されている。

先陣をきって乗り込んだクルイの顔が浮かんでいるが、カナエはその考えを拒否した。

彼であってほしくない、そう願いながら一人で生存者がいないか探し始めた。

惨状を見るにつれ、カナエの心が悲鳴を上げていった。

おとぎ話から生まれた殺人は、おれに戒めを教え、現実には起きた殺人は、おれに覚悟を教えた。

鬼が背を向けて歩き出した後、クルイが鬼に追いつくのに約5秒かかった。その間にクルイは鬼の眷属を倒し、能力を分析した。

鬼の能力における分析――。

薬を出現し使用する能力。一例、身体および脳の機能を向上または低下させる。

長距離における攻撃。薬の散布。出現させた薬を散布し、能力を摂取した生物を眷属にする。眷属になると鬼に吸収される。眷属および戦闘訓練を積んだ人間も戦力の一部。

近距離における攻撃は未知数。

結論――薬が自然界および人工的に創られたものであればオレに効果は無いが、鬼独自による創造されたものであれば、効果は未知数となる。薬は粉体、固体のみならず液体、気体の出現も推測される。

葉以外の物質の出現、手以外からの能力の発現も考えられる。

クルイは死角から鬼の頸を狙い、脇差を振りかざす。刀身が肉を裂き、頸椎を断つ瞬間、骨から六角柱の結晶が散弾し、刀を弾き返した。結晶の圧倒的な生成速度、硬度、威力に刀身が震える。

クルイはすかさずもう一方の刀で追撃を図るが、鬼は再度頸から結晶を出現させ、加圧した鋭利な水流を追撃として放つ。

クルイは空中で体を捻り水流を回避した。避けた水流は後方で瓦礫を切断し、瓦礫は切断面から煙を立てて溶解した。

弾丸の如く放たれる結晶により、クルイは鬼から距離をとる。その際、襲いかかる水流を角度をつけた刀身に反射させて躲す。

——能力の発現は全身から。結晶、液体は鬼の独創物か否か。

鬼は頸の骨から生成した結晶をもぎ取り、頸を繋げて構えた。クルイも双刀を構えなおし、能力の情報修正する。

ミルキが情報の波に乗りネットサーフィンをするように、クルイは知識の海に潜り自らの記憶と語り合った。

無色透明の結晶。刀と競り合っても欠けない様子から硬度は刀以上。形状から鉋物

と推察。

刀を見た。

少量の液体を弾いただけだが、刀が若干溶解している。液体からは薄く煙が立ちあがり、特有の刺激臭もする。液体の特徴、純度の高い鉄を溶解させる性質から王水と推測する。

刀はまだ使える。だが刀で受け流し続ければ、溶解して使い物にならなくなる。

鬼は間髪入れずに小刻みに王水を飛ばす。

クルイが飛んで避ける度に、床は溶解され足場が消えていく。鬼はその間も、もう一方の手からきらきらとした銀白色の粉末を放出する。

——クルイは遠い記憶を思い出していた。あの世界に転生するよりも前の記憶だ。

テレビを見ていた。金属加工工場から爆発事故が起きたというニュースだった。不思議なことに、火事が起きているのに消防は水を撒いていなかった。アナウンサーは原稿を読み上げた。大気中の窒素と反応したマグネシウムは、水と反応すると高熱を生み出す。燃焼中のマグネシウムに水をかけると、水は分解され、水素と酸素が発生して爆発を起こし、マグネシウムの燃焼を加速させる。その後画面が切り替わり、粉末のマグネシウムが映し出された。それは、きらきらとした銀白色の粉末だった——。

クルイはこれまでの戦闘から確信した。血鬼術は下界に存在する物質であることを。

鬼独自による想像した創造物ではないことを。

近接攻撃のクルイと遠隔攻撃の鬼、双方にとつての最善の攻撃距離の相性は最悪だった。

クルイは跳躍した。轟然と降り上げた右脚にオーラを80%移動させ鬼の胴体を砕く。

クルイは刀を使用しなかった。鬼が防御に金属を生成した場合、刀であれば火花が発生し爆発を起こす可能性があるからだ。打撃であれば金属、結晶のどの物質でも砕くことができる。そんな思惑があった。

だがその選択は誤りだった。

鬼は能力を身体強化に使った。凄まじい衝撃に鬼は胴体が破壊されるも、地に足を生やし受け止めた。鬼はにやりと口角を上げた。身体が後退し、滑り続ける靴裏から摩擦熱により発火した。

瞬間、凄まじい炎と強く白い光が発生し大爆発を起こした。

鴉を追って走り続けた紫緒は、病院の中を走っていた――。

暫く前に、ドンツ——と音が鳴り響き、建物の揺れと共に煙があふれた。その後、叫び声と慌ただしく走り回る足音を耳にし、再び地を這う音と揺れを感じた。それが、非現実的すぎてどこか遠くの出来事のように思えた。

——あの人が戦つてゐる。

紫緒は直感的に、この非常事態の原因はクルイだと結びつけた。紫緒の中でクルイは、非現実的な人間だ。通常の間人では実行しないようなことを表情一つ変えずにやり遂げるイメージがある。

鴉は紫緒をつつき、混乱に乗じて窓から病院の中へと侵入した。混乱と恐怖に鼓動が増す中、紫緒もまた気を引き締めて鴉と同じく窓から入った。

鴉は破壊音から遠ざかるように廊下を飛んだ。鴉と紫緒が廊下を走っていても、混乱の中では一人として気に留める者はいなかった。

走り続け、次第にすれ違う人もいなくなり、不気味な雰囲気が出てくる。鬱々とした空気が紫緒に伝染し、紫緒の思考も暗くなつていく。

横から突然何かが出ていたらどうしよう。武器も何も持っていない。夜の病院が怖い。でもそれ以上に、姉ちゃんが死んでたらどうしよう。

先程の院内の混乱が脳裏に映し出される。鬼殺隊が乗り込んだことにより、姉の死期

が早まる可能性を想像し恐怖した。そんな自分勝手な思いに自己嫌悪が募る。

前を飛ぶ鴉がある一室に入る。続いて病室へ入ると、ベッドが一つ、月の光に照らされていた。

近づくのと涙が溢れた。会いたかった姉がそこに寝ていた。

「姉ちゃん……う？　姉ちゃん、姉ちゃん!!」

紫緒は堪らず駆け出し、姉に抱き着いた。姉は温かかった。それがさらに嬉しく、涙が溢れた。

生きていてくれてありがとう。一人で寂しかった。そんな様々な感情がごちゃ混ぜになり、涙と共にとめどなく流れる。

紫緒は歓喜に打ち震え姉を抱きしめ続けていたが、時間が経つにつれて違和感が募り始める。

なぜ姉は起きないのか。なぜ抱き返してくれないのか。

「姉ちゃん、姉ちゃん！　姉ちゃん！　ねえ……起きて」呼びかけと共に姉の体を揺さぶるが、姉は反応を示さない。

先程とは違い、今度は不安に涙が溜まる。何度も必死に呼びかけ続けるが、姉は目を開けることすらしなかった。

死体のように、ずっと眠り続けていた。

「お願いだ……姉ちゃん、起きてくれ……」

涙と共に零れた願いを姉は叶えてくれない。

「起きないわよ」

姉とは違う女性の声に、紫緒は顔を上げた。

白衣を着た女が入口に立っている。

紫緒は町医者の中から、白衣に対し嫌悪感を抱いている。自分から姉を奪ったこの病院で、白衣を着る人物というだけで猫のように毛が逆立つ。

「なんだよ、どういふことなんだよ」

紫緒は姉から離れ、背に姉を隠した。

「この子はね、貴重な子なの。稀血と言って、すごく特別な血を造りだしてくれる子なのよ。私もそういう血がよかつたんだけど、違うのよね」

女医は拗ねたように言い、ゆつくりと部屋の中に這入ってきた。鴉が威嚇の声を上げるが、煩わしそうに一瞥するだけでじわじわと紫緒との距離を詰める。

「正直言うと、ちよつとその子に嫉妬した時があつたの。だつてこの子、その血のおかげで鬼あの人に気に入られてるのよ。ずるいじゃない。でも稀血だから殺すことはできないのよ。だからね、殺さずに眠り続けてもらったの。今、この子、昏睡状態なの。血鬼術彼のカで眠り続けてもらつてるのよ」

女医の純粋なほほ笑みに、紫緒は喉元が熱くなる。瞳孔が開き、声にならない叫びを上げ、心から血が流れ出る。

——そんなことのために、姉は町医者に売られたのか。それでも姉は、ずっとこいつらと戦い続けていた。

姉の性格を知っている。両親が死んでも、姉は紫緒の前ではひたむきに歩き続けた。その背中を見て、紫緒も姉に倣い必死に生きてきた。姉はどんな状況でも諦めず活路を見出す。そんな姉だからこそ、紫緒はわかる。姉は、ずっと助けを待ちながら一人で戦っていた。

紫緒は震える声で言った。だがそれは恐怖からの震えではなく、怒りを凝縮して抑えつけた声だった。

「お前も、鬼の味方なのか？」

「も？ きみ、誰かに会ってきたの？」

女医は思考を巡らせた。「ああ、なるほど」と掌に拳を乗せて少女がここに来た経緯を思い出した。

「町医者あの人の裏の顔を見てきたのね。ええ、そうよ。私達は鬼をずっと支えているの。これからも、ずっとね。だから」

「早くその子を返して」物を返せというように手を伸ばす女医の手に、紫緒は腹の底がず

んと重たくなった。口から無理やり重りを吞まされたように、ここまで来てはまだ、受け入れたくはなかった真実を吞み込まされ涙が落ちる。これまで生きてきた中で、経験したことのない怒りと不条理に心が追いつかない。

——おれはただ、姉ちゃんと二人で暮らしたいだけなのに。
涙に濡れた瞳で呟いた。

「……ただ、一緒にいたいって言うそれだけの願いが、どうして叶えられないんだよつ」
喉が熱く、鼻がひくつき、雫となって涙が落ちる。

何でこいつらの勝手に、そんな小さな願いが奪われるんだ！ これ以上おれたちの邪魔をするな！！

濃縮された憎しみが目に籠り、涙を流す瞳で女医を睨みつける。

「おれはお前を絶対許さない。父さん達だけじゃなく、姉ちゃんにもこんなことしやがって！ 絶対に殺してやる！」

鴉が飛び立った。同時に紫緒は拳を握りしめて女医に殴りかかった。だが女医に左脇腹を蹴られ壁に叩きつけられる。成人女性と、第二次性徴にも差し掛かっていない子供では、手足の長さの違いから紫緒は圧倒的に不利だった。

紫緒は何度も女医に突っ込んだが、その度に蹴り飛ばされた。骨が軋み、鼻が出血し、体が悲鳴を上げる。それでも紫緒は姉を守るために立ち上がり、女医にとびかかった。

何度目かわからない。だがそれまでとは違い、女医の足が腹に重く入った。紫緒の体は蹴り飛ばされ、窓ガラスを割り、ガラスの雨が襲い掛かる。

割れたガラスの破片が着物を裂き、血が腕を伝って模様を描く。紫緒は腕に刺さっていた大きな破片を抜き、強く握りしめた。流血がひどいにもかかわらず、紫緒は姿勢を低くして女医に向かって走り出した。

「何度やっても同じよ」

女医は声を上げて言い放ったが、紫緒には届いていなかった。

紫緒の中で、全ての音が遮断されていた。周りの音、女医の声、自分の呼吸、足音、ありとあらゆる音が消え、無音の中に紫緒はいた。無意識に、五感の一つである聴覚を捨て、集中力を高めていた。

紫緒は女医の癖を思い出していた。目の前の女は、一発目は必ず右足で蹴り上げてくると。

歩を踏み出していた紫緒は、女医の右足が上がると同時に体を下げ、床を這った。床についた手と足で強く踏み込み、握りしめたガラスと共に目の前の障害物に突進した。

何かを刺した。紫緒に音が戻った。突然の音に、視線が彷徨う。目の前が赤かった。手元を見ると、ガラスを握りしめた手は、何かを突き刺していた。目線を上げると、女の人と目が合った。

紫緒は、自分のやったことを受け止めきれなかった。人を刺したこと、本気で殺そうと思ったこと、殺すために冷静に分析したことを。紫緒自身、そんなことができる人間だとは思わなかった。

もう一度自分の手を見た。手は赤く染まっていた。自分の血であるが、それが酷く汚く見えた。

女医は蹲り呪いの形相を浮かべ、聞き取れない言葉をブツブツと吐き続けている。

呆然と、力の入らない足で紫緒は女医と対峙した。先程まで感じていなかった疲労と打撲と傷の痛みが全身を襲う。

未だ自分を受け入れられない虚ろな目で、腕から滴り落ちる血を見た。——瞬間、視界の端が白く光り、耳が裂けるほどの爆発音がした。

え、と思いい顔を上げると、何かが壁を突き破って部屋に飛んできた。土埃が晴れて、それを認識すると、絶望から全身の力が抜けた。

人間を模した、圧倒的な存在がそこにいた。

「稀血を出せ。喰うぞ」

答えてくれるはずがないのに、思わず姉の名前を呼んだ。

爆発の瞬間に、クルイはオーラの90%を両脚に分散し、その場を脱した。脚で壁をぶち抜き、一瞬でできるだけ遠くへ移動し病室に辿り着いた。それでも爆発の中心地にしたことから、外套はところどころ焼け焦げている。

クルイでいなければ、間違いなく死んでいた。

クルイは部屋を見渡した。部屋の中にはベッドがいくつも置いてあり、人はいなかった。救助部隊が機能を果たしているのか、眷属にされた後か。どちらにしても、現時点では詳細は判明しない。

今は、鬼を斬ることが第一だ。

感覚を研ぎ澄ましてオーラを探り、居場所を特定する。

刀を構え、息を吸う。

音の呼吸——肆ノ型 きょうぜんむげん 響斬無間・改 かい

目の前の壁を無数の斬撃と衝撃波で吹き飛ばし、鬼の居場所まで最短距離の道を作る。

クルイは脚に力を籠め、離れている鬼との距離を一瞬で詰めた。

音の呼吸——壹ノ型 轟

瞬足で迫るクルイの間合いに鬼が入った瞬間、クルイは二閃の斬撃を放った。

気づいた鬼は鉋物を生成し、威力を相殺する。

「何でオマエがここにいる。帰れ」

クルイは静かな狂気を纏い、紫緒を見下ろした。動けば首が飛ぶほどの緊張感が場を支配する。

紫緒は眠る姉を背に、震えながら鬼と対峙している。

クルイは紫緒の足元を見た。黒い羽毛が落ちていている。すかさず周辺の気配を探るが、鏖鴉の気配はない。

——増援を呼びに行つたか、もしくは逃げたか。とりあえず、こいつが邪魔で仕方がない。

状況を把握しながらクルイは紫緒に背を向けた。再び双刀を構え、鬼と間合いの駆け引きをする。

鬼の後ろにいる人間を見た。白衣を着た女は、血に濡れた手で目と腹部を抑えて蹲っている。状況から見て鬼の協力者と判断する。

「死にたいなら一人で死ぬ」クルイは紫緒を見ずに吐き捨てた。

紫緒はクルイの背をまっすぐ見つめながら、震える声で言った。

「契約を、しに来た」

声は震えていたが、数時間前に聴いたものより確実に重みが違う。

「おれに……こいつらを殺す方法を教えてくれ」

「自殺に金を払うのか」

「違うっ!!」紫緒はありつたけの大声を出して叫び、鬼と女医を指差す。

「おれは生きる。死なないように生き延びる! だけど、こいつらを殺したい! そのためにおれは、あんたのようになりたいんだっ!!」

覚悟を胸に刻み、紫緒は懇願した。

今ある自分の総て、死ぬまでの時間全てをクルイに差し出す。

「一生、貴方の手足になります。だからおれに、こいつらを殺す方法を教えてください」
クルイは鎧兔を思い出した。最終選別の藤襲山で、似たようなことを言われた記憶が呼び起こされる。鎧兔のまつすぐすぎる意志が、今の紫緒と重なる。

しかし——甘い。

「現実味の無い話は乗らない。オレに得が無い」

クルイは冷静に、冷徹に紫緒を切り捨てた。

クルイと紫緒が話している最中も、鬼はかまわず血鬼術で金属を生成し、弾丸のように飛ばす。

音の呼吸——肆ノ型 響斬無間・改

クルイは至近距離で飛んでくる金属の嵐を撃ち落とし、衝撃波で残りの軌道を逸らす。

紫緒はガラスをきつく握りしめ、血を流しながら哀訴嘆願する。

「お願いします……。何でもします……。おれの命と時間で取引してください。おれは、もう——前に進むしかないんです」

偶然にも、紫緒が言つた言葉は、以前錆兎が言つていたものだった。

クルイは自嘲気味にため息を吐いた。

他人を巻き込み変えていく人間に、我が家はキルアだけでなくオレも弱いらしい。

「……3つだ。オレがお前に要求することは3つ。全て飲めたら取引してやる。1つ目、胡蝶姉妹に弟子入りしろ。胡蝶姉の花と、妹の持つ技法、蟲の呼吸を習得しろ。最悪、剣の才能が無くとも毒で生き延びる確率は上がる。2つ目、鬼殺隊と胡蝶を裏切れ。鬼殺隊の情報、特に胡蝶しのぶが創る薬の情報をオレに渡し続ける。胡蝶の元で得た鬼殺隊の情報をオレに渡し、指示通り動け。3つ目、前2つが果たせなくなる場合は鬼になれ。鬼になって奴らの動向を探って情報を流せ。オマエが死にそうになったらオレがオマエを鬼にしてやる。鬼の血液を全部オマエにぶち込めば鬼になるだろ。自我をなくしたらオマエを殺す。裏切ったら姉も殺す。この3つだ」

クルイは着ていた外套と詰襟を脱ぎ、紫緒に投げた。紫緒は服から顔を出し、覚悟を宣言する。

「全部のみます！ おれは一生貴方の手足になる。貴方の利益のために、最大限、生き残

る努力をする！ だから、だからお願いだ！ 姉ちゃんにこんなことをしたやつら全員を、殺してくれ!!」

クルイは返事をするように、瞼を閉じて、開いた。

「着てろ。雑魚鬼の爪とぎぐらいにはなる」

紫緒は頷き、ベッドに寝ている姉を抱きしめた。姉と共に詰襟と外套にくるまり、隅で身を潜める。

クルイはベッドを蹴り飛ばし、向きを変えて2人のバリケードにした。

クルイと鬼の距離は接近戦には遠く、遠隔戦には近すぎた。今のクルイに念の発が使えない以上、間合いを詰めて鬼の頸を切り落とすしか方法はない。

純粹なる、相手を上回る速さと力の勝負となる。対峙している以上、暗殺者お得意の奇襲は使えない。

緊張の糸が張る中、先に仕掛けたのは鬼だった。

目を虚ろにした、刃物を持った男達が部屋に飛び込み、後ろに隠れている姉弟を狙う。男達からは、先程殺した眷属と同じオーラが視える。

——目的は少年の姉か。

クルイはすかさず眷属の首を斬った。血飛沫をあげ、血に触れた物が溶解する。直後、宙がきらりと光った。空間を埋め尽くす程の金属の嵐がクルイへ向けて砲火した。

クルイは眷属の体を次々と盾にし、弾丸の嵐を避ける。嵐の威力は、肉体を肉塊へと変えた。眷属の肉体は分断される度に溶解液を飛散し、クルイに浴びせる。

嵐は途切れることなく、クルイを襲い続けた。

クルイは人の体を保つ、最後の死体を宙に投げた。刀を構え、来る嵐を見据える。後ろには紫緒がいる。弾丸を避けることも後退することも許されない。契約は履行されている。

音の呼吸——伍ノ型 鳴弦奏々・改

紫緒は見ていた。一瞬、余りの輝きに目が眩み、カンツ——と音が鳴る。

臉をあげると、嵐が晴れていた。

紫緒には、クルイが一振りで鬼の技を払ったように見えた。

クルイは、超高速、縦横無尽に二振りを閃めかせ、血鬼術を全て打ち落とした。刀身に反射するいくつもの煌めきが、目に映らぬ速さにより一つの輝きに見え、打ち落とされる金属音は集約され一つの音となった。

鳴弦奏々。名前の通り、弓の弦を鳴らし邪気を祓うように、鬼が展開する全ての血鬼術を払った。

クルイはすかさず追撃の一閃を放ち、胴を断つ。

鬼はクルイの動きが見えなかった。予備動作なしに間合いを詰められていた。鬼は

瞬時にクルイの攻撃圏内から離脱し体を再生させるが、クルイはオーラを込めた脇差を投げてその行為を許さない。

クルイは未だ念が封じられている状態であるが、徐々に流、周といった発以外の応用技が使えはじめている。それでも前の世界にいた時と比較し、カス程のオーラ量しか戻っていない。本領を取り戻すには道は遠い。

決着は利那だった。

投げた脇差は、鬼をかばい間に割り込んだ女医ともども鬼を突き刺した。

クルイは音もなく間合いを詰め、短刀を一閃した。鬼が能力を発動する前に、女医の目の前で頸を斬り落とす。

刀が体を貫通しているにもかかわらず、女は灰になっていく鬼を見ながら堰せきを切ったように涙を流した。

「お願い、逝かないで!! 私が死ぬときはあなたが食べてくれる時なんだから! あなたが先に逝つたら私はあなたと一緒になれないじゃない!! 逝かないで、一緒に居させて……」

皮肉にも床に落ちた首は、目の前にいる女ではなく遠くを見ていた。

「患者人を助けられなくて、村八分にされたが……最後に、あの方に、皆に求められて、うれしかった……」

クルイは、灰を踏み女から刀を引き抜いた。じわりと女の腹が赤く染まる。クルイは再度女の腹に刀を突き刺し、じりじりと刀を動かして胃を切断した。女は灰となった鬼を握りしめながら絶叫し、出血多量と胃液に焼かれて力尽きた。

全てが終わった。部屋に残ったのは、死体と生きてる3人だけだ。

紫緒は、自分が臨んだ光景のはずなのに、なぜか涙がこぼれ落ちていた。不幸の根源が消えたはずなのに、心が晴れない。

何でこんなにも、後味が悪いんだ。

「姉ちゃん、起きて。姉ちゃんに、酷いことした、あいつらを殺ったんだよ。姉ちゃん、目を開けて。起きて……、姉ちゃん……」

紫緒の瞳は涙で濡れていた。喉が熱く、声がかすれる。

紫緒は姉を見た。鬼を殺しても姉は目を覚ますことはなかった。鬼を殺せば、姉が目を覚ますのではないかと心のどこかで期待していた。

これから一生、姉の目が覚めなくても、姉には生きていてほしい。だがそれは姉の意思が確認できない以上、紫緒の独りよがりとなる。

——姉ちゃんにとっては、殺してあげた方が優しさなんだろうか。

紫緒は呟いた。クルイに聞かせるのではなく、自問自答の音が音となって外に漏れて

いた。

「姉ちゃん、あの鬼の術で昏睡状態らしいんだ。いつ目覚めるかわからない。殺してあげた方が、楽なのかな？」

言葉ではそう言っているのに、その声は殺したくないという切なる思いが溢れている。

自分の意志と、姉の意志が同じか分からない。姉が望むようにしたいのに、姉の望みが分からないことを良いことに、自分の願いを押しつけてしまう。

——例え、これから一生目を開けなくても、生きてほしい。

足音が近づいてくる。目を上げるとあの人がいた。

「質問になる以上、答えがある。答えがある以上、応えられる者はゼロじゃない。オマエが選択しろ。姉を殺すなら自分で殺せ」

クルイは鬼の頸を斬った短刀を少年に向けた。

「これで殺せ」

クルイは紫緒に短刀を握らせた。

紫緒は涙が止まらなかつた。

鬼の首を斬った刀で、姉を斬ることはできない。この人は、それをわかっているように思えて、涙が流れ続けた。

「……ありがとうございます」

心を拷問し、焼いた喉で酒を浴びろ

——遠くから琵琶の音が聞こえる。

上下左右が狂った不思議な木造建築の中に、眉目秀麗な青年が立っていた。彼は持っていた試験管を砕き、適当な雑魚鬼を呼びよせた。

青年は激怒していた。たった今、彼のお気に入りの鬼が鬼殺隊に殺されたのだ。

業火に油を注がれ、より一層大火となった炎が腸はらわたを煮る。

青年は、呼び寄せた鬼達に苛立ちをぶちまけ蹂躪した。彼等の叫び声など届いていないように、冷徹に、気が済むまで殺戮の限りを続けた。

あれは役に立っていた。日光を克服する薬を共に研究し、後数十年もすれば試作段階に辿り着くところまで来ていた。

それがまた——産屋敷鬼殺隊によつて悲願が断られた。

青年は鬼の頭を掴み、潰す。横目で琵琶を構える女の鬼、鳴女なきめを睨み付け合図を送る。

鬼はビィンと琵琶を奏で一体の鬼をこの無限城に招き入れた。

「おっー！」

鶴の様に、頭頂部のみ血をかぶったような胡散臭い笑みをした男が現れる。

男は数秒前まで自分の部屋に居た。だが、どこからか琵琶の音が聞こえたと思つた時にはここに居た。

「胆礬たんぼんが死んだ」

突如、青年の声が突然降つてきたが男は動じなかつた。

「それはそれは、誠にございますか！ 我ら上弦は胆礬下弦の肆から能力毒を取り込んだ縁がございます故、お力になれず申し訳なく思います！」

につこり。という言葉が当てはまる笑顔を浮かべているが、その感情はどこか作り物めいている。感情を持たない生物が、遠くから人間を観察し、擬態して溶け込んでいる様子に近い。

にここにこと笑みを浮かべたまま、童磨どうまは始まりの鬼である青年、鬼舞辻無惨きぶつじむざんに平伏した。

「して、俺はその鬼殺隊を殺せばよろしいのでしょうか」

「貴様はそれしか思い浮かばんのかっ！」

はて？ と、首をかしげた途端、頭が飛んだ。自分の体がどんどん遠ざかつていく様子が目に映る。

視界がどんどん変わる中、一瞬だけ見えた無惨は、米神に血管が浮き上がっていた。「やつの研究は常に私と共有している。研究が損なわれることはない。だが奴は死んだ。私が欲しているのは、完成せいした秘薬ひやくだ」

童磨は頭を悩ませ、無惨が納得する提案を探す。首が体と繋がっていれば、指で脳をかき混ぜて無惨が気に入りそうなことを汲み上げるのだが、あいにく首は体に繋がっていない。無惨が見ている前で、歩いて首を取りに行くことは許されない。

童磨は無知恵を絞り、ひらめいた言葉を口に出す。

「んー、では彼に近い人間を鬼に変えるのはどうでしょう。同じような思考回路、体質の人間を鬼にしましたら彼の代役に成るのではないのでしょうか」

童磨は無惨に申し出ながら、人間が多く集まる自分の宗教を思い出した。

ああ、なるほど。だから無惨様は俺を呼んだのか。俺信のところ者からそういう人間を選べばいいのか。

無惨は目を細めて童磨を見下ろした。

「ついでのためとその人選に向かえ。ただし、お前の信者以外からだ」

無惨は、襖に足を踏み入れ姿を消した。

童磨は立ち上がり首を回収する。首を体にくっつけ、困った笑みを浮かべながらも面白いことになったなどと心の中で嗤う。

少しでもこの気持ちと共有したく「ねえ」と鳴女に声をかけるが、童磨は琵琶の音と共に下界に返された。

大きなクツションに体を預け、天井を見上げる。別に天とあの空間が繋がっていると
は思っていない。だが童磨は上を見ながら呟いた。

「今日は虫の居所が悪かったなあ。さてと、ちよつと鬼殺隊と遊んでくるか。女の子が
いたらいいなあ」

屈託なく無邪気に笑う笑顔を浮かべながら童磨は拠点を後にした。

——「オマエは居るだけで場を狂わせる。オマエの味方は家族だけだ」イルミに何度
も言われた言葉が頭から離れない。

鳥づてにクルイの鎧鴉に呼ばれた宇髄は、クルイの元へ向かった。現地に近づくとつ
れ、風に乗る焼けた匂いに嫌な予感がする。宇髄は足の回転を速め、より一層速く駆け
た。

現地に辿り着くと、建物が火を纏っていた。建物から離れたところに、蝶の髪飾りを
した剣士と5人の隠、数名の一般人が横たわっている。

「おい！ 何があった!」

「祭りの柱だ……」「派手柱だ……」「音柱が二人そろった」「……て、ことはもしかしてやばい鬼だったのか」

「……音柱が乗り込んだ後、鬼と遭遇し戦闘した模様。この火災は血鬼術によるものと思われます。現在音柱と鬼は場所を変えて戦闘中です」

蝶の髪飾りをした隊士は、簡潔に述べたが全ての状況を把握していないと理解した。

「お前、名は」

「胡蝶カナエ みずのと 癸です」

胡蝶のそばで倒れている一般人の体には、人体の構造を熟知した無駄の無い軌跡が見られる。この剣筋を俺は知っている。

——クルイツ！

表情にも体にも感情を出さずに宇髄は腹の中で怒りを燃やした。

「建物が!! 見て!! 火が消えていく!!」

隠の一人が建物に指を指す。建物の炎が消滅したことに、宇髄はクルイが鬼を滅したことを確信した。他の隊士が安心するように、宇髄は後始末の指示を出しながら目の前の死んでいる人達を眺め、思いをはせる。

どういう状況でクルイがこの手段をとったのか分からねえ。こいつらが良い人間か悪い人間かも分からねえ。だが、他にもやり方があったことだけはわかる。

鬼殺隊は鬼を滅することが目的ではあるが、それだけではないことをまだ教えられないなかった。

宇髄は拳を握り締め、クルイを探しに向かった。

鬼の残り香を頼りに駆け続けた宇髄は、半壊している建物を見つけた。その最も損傷の激しい場所で、クルイは少年に刀を向けていた。

居た!! つておいおいおいおい、あいつはなにをやったんだ!

へたり込んでいる少年は鬼ではない。状況からも断定して鬼は消滅した後だ。それなのにクルイは、少年に刀身を突きつけている。

距離が離れているためクルイの声が聞こえない。唇の動きと動作から推察するしかない。

少年の腕の中には少女が眠っている。クルイは少年に刀を握らせ、刀身を少女に向けてた。少年は俯き、涙を流した。クルイは黙ってそれを見ている。

宇髄は焦った。自分の弟子が、過去の姿に戻りつつあるのではないかと。

あいつにこれ以上人を殺させてたまるかっ!

宇髄は踏み込む足に力を入れ、離れている距離を一瞬で詰める。

「クルイ!!」クナイを投げ、少年からクルイを離れさせる。宇髄の叫び声で振り返ったク

ルイは感情を欠いた顔をしていた。その表情が、実の弟を彷彿とさせた。

少年とクルイの間に入り、宇髄はクルイを睨みつけた。

「お前、今何をやろうとしたっ。……何やってんだって訊いてんだよ!!」

めんどろくさそうに溜息を吐くクルイに、宇髄の熱量が上がっていく。クルイの真っ黒な瞳は宇髄を向いているのに、今の宇髄にはクルイが何を考えているのか分からなかった。今回の任務で何がクルイをそうさせたのか、鴉と現在の情報だけでは推し量れない。

「やるべきことをやった」

「それが人を殺すことか!」

宇髄は近くに倒れている血まみれの死体と肉塊を顎で指す。死体の方は刀傷が見取れる。後ろにいる少年が何か言おうと意味をなさない言葉を発しているが、宇髄は気に留めずにクルイを問い詰めた。

沼の様に視たものに囚われて沈んでいく。一向に何も答えないクルイに、苛立ちが募っていく。

「殺す以外に選択肢はなかったのか」

「死んで役に立った人間だ」

「お前っ!!」

——「信じろ」

宇髄を追いかけてきた隠達が足音を立てて部屋に入ってきたことでクルイの声がかき消されたが、宇髄はクルイの声をしかと聴いた。

隠は、半壊した建物、血に塗れた部屋、肉塊、死体とクルイを何度も目で往復する。「狂ってる……」

一人の隠が呟いた。その一言が波紋の様に広がり、響き渡る。

クルイは肯定するように口角を上げてほほ笑んだか、その瞳はより一層暗く人形じみていた。

「狂ってる」その一言が、クルイの弁明という選択肢を消したと知るのは、後になってからだった。

——「クルイは居るだけで場を狂わせる。ジャポンの諺にもあるように名は体を表す。クルイは狂いだよ。生まれもそう、オレの次に生まれる弟は一人のはずだった。だが実際母さんは双子を生んだ。ミルキと共に、ミルキよりも明らかに小さなオマエは付属品の様に出てきた。事前の検査ではオマエは見られなかったようだけど。本来、3番目の子供に『キルア』という名前を付けるためには、縛りを変更せざるをえなくなった」

「なあ、それってオレのせい？ 違うくね？」

「わかりやすい一例。クルイ、オレはオマエを見てきた。オマエは居るだけで間接的に

も直接的にも周りを狂わせてきた。キルはなぜハンター試験に興味を持ったのか。アルカはどうしてナニカが憑依なのか。お前はそうなるように狙って動いている。人の無意識行動を操っている」

「……そんなわけないだろ」

「あるね。オマエは狂った存在だ。オマエが居るだけで周りが狂う。予定調和は存在しない」

「……違う」

「違わない。そんなオマエでも、家族だけは味方だ。他はみんなオマエに狂わされてオマエの前から消える。もう一度言う。オマエは居るだけで全てを狂わせる」——

月が雲で隠れ、光が消えた一瞬の隙にクルイは姿を消した。宇髄は後を追ったが既にクルイの姿は無く、気配も消えていた。

「戻って来い!! クルイ!! てめえの居場所はここだ!!」

悔しさから声を張り上げ、クルイに届くことを願う。だが、いくら名前を叫び続けても彼が宇髄の元へ戻ることはなかった。

鬼殺隊は鬼を殺しても人は殺さない。人を巻き込まないように最大限の努力をする。クルイに教えられなかったことを悔やみ、宇髄は痛みとして心に戒めを突き刺した。

それ以降、宇髄はクルイの姿を見ていない。

——まだ、死にたくない。まだ完成していない。

どうしたどうした死にかけて。……生きたいかい？　そう、命は尊いものだ。お前に血をやるよ——。

「青い彼岸花をつくれ、日光を克服しろ」——どこからともなく声が何度も何度も頭に響き渡り、それが使命だと認識する。

同時に、誰も遂げることのできなかつた領域に足を踏み入れたい。そんな欲求が自信を埋め尽くし、身体がその塊へと変わっていく。

そして、——急激な空腹に目が覚めた。

腹が減った。絶望的な空腹と喉の渇きと共に充滿している血の香りに頭が狂う。人間の血が近くにある。だがこの空間に匂いが充滿しすぎてどこにあるのかわからない。手について、上半身を起き上がらせて濡れた感触がした。手を見ると血がついていた。

助かった。

床に這いつくばって血を舐めとる。視線を上げると幸運なことに、目の前に人間の死体があった。本能的に、喰いものだと認識した。

喰ってみると好みの味ではなかったが、不味くもなかった。腹はまだ減っているが、先程までの絶望的な喉の渴きと空腹よりはましになる。それでもまだ空腹が襲ってくる。近くにまだ喰い物はないかと探していると声が降ってきた。

「落ち着いたかい？」

いつの間にか、垂れ下がった眉をした長髪の男が窓に腰をかけていた。

男の声は優しげだがどこか嗤っている。差し伸ばすされる手が紛い物に見える。振り払いたい、そう思うが本能がこいつに逆らうなと警告する。

「だんなは誰でここはどこなんだ」

「俺は童磨、お前を鬼にした鬼だ。ここは俺も良く知らないからなあ。お前が喰った人間の家じゃないのかな」

そう言われて周りを見ると、初めて見たはずなのに物の配置に覚えがある気がする。だが俺は何も覚えていない。知らないはずの事を知っている様はなんだか気持ち悪い。

「おいおい、眉間にしわを寄せて随分刺々しい顔してるじゃないか」

「当たり前だろ。知らないことを知っているのは気持ち悪いし、分からないことを分からないまましておくことは自己の発展につながるからねえ」

「自己の発展って君、猗窩座あかさみたいなことを言うんだねっ！」

童磨はひとしきり笑い転げた後、俺を見て仮の名前を与えた。

「そうだなあ、お前のことは『助手君』と呼ぼう」

初めて呼ばれたはずなのに、なぜだかしつくりときた。胡散臭い笑顔の童磨に正々堂々言い返してやる。

「おう、よろしくしてくれや」

「君、まだ立つちゃうの？ えー……勝ち目無いのに戦うの？」

童磨は蝶の羽織と髪飾りをした嬢ちゃんとかれこれ1時間以上戯れている。

「可哀そうに、女の子なのにどうして剣を握っているんだい？ 何かつらいことがあったんだね。俺が救ってあげるよ」

花の呼吸——伍ノ型 徒あだの芍しやくやく薬

「もー、女の子が刀を振り回すのは危ないんだって。君の可哀そうな話を俺が聞いてあげるから。ほら、話してごらん」

童磨は少女の連撃を二対の扇子で受け止めながら話しかけ続ける。その近くで助手は鬼殺隊隊員をボリボリと貪りながら戦いを観戦していた。

——なるほど、鬼殺隊というのはああいう技を使ってくる奴がいるのか。俺が知って

る人間よりも進歩してんな。大したもんだ。

「俺は教祖だから、なんでも相談にのつてあげられるよ。君みたいな可哀そうな子を幸せに導くのが俺の役目なんだ」

——どの口が言つてんだかなあ。

共にいる時間は短い、その短時間だけでも童磨は他人に関心がないと言い切れる。相手の話を聴いている様で聴いていない。最後は自分の欲求を押し通す。名前の通り童に磨きがかかっている。

童磨と助手は下限の肆を滅した鬼殺隊を殲滅するために、彼の縄張りであるこの森の病院へ来た。そこで運良く退散し始めている鬼殺隊を見つけ、襲撃し今に至る。

助手は早々に武装していない隊員を殺し、離れたところで人をつまみながらスポーツ観戦の様に童磨の戦闘を眺めている。

上弦に出会うこと、そして戦闘を目撃することは鬼にとつても貴重である。助手は童磨を目で追いながら戦い方を学び、自分の糧に記憶していく。

——蝶の嬢ちゃんは元気にぴよんぴよん動いて悪かないんだが、いかんせん経験値の劣りが見て取れる。もつと経験を積んで速さも上がれば、童磨のお遊び程度の遠隔攻撃は躲すようになるだろう。言い換えると、俺達は能力に依存していれば殺される。身体能力、血鬼術、それら能力は人間を凌駕しているが今の俺の様に使いこなせていない。

この秘めた身体能力を十分に引き出す武術を身につけ、能力を追求するのが理想の形だ。当面の俺の目標は、自分の能力の理解と武術による体の使い方だな。能力に頼り切るのは良くねえ。

助手が自身の考えをまとめ終えた頃、童磨の動きが変わった。お花畑で戯れている様な空気が一変し、冷たい殺気が肌を刺す。

——そろそろ夜明けが近い。喰う為に動きだしたか。

童磨は瞬時に距離を詰め、二対の扇子を振りかざす。

血鬼術——枯園かれそのしづ垂り

氷を纏う扇子を剣撃の様に連続して放ち、凍撃がカナエを襲う。

——砕かれること前提の目くらましだ。

花の呼吸——式ノ型 御影梅みかげうめ

カナエは自身を中心に、連撃で梅の花を描くように童磨の凍撃を打ち砕く。視界が晴れた時には、カナエの目前には霧が迫っていた。

血鬼術——粉凍こなしおり

「その霧を吸うと肺胞が壊死しちゃうよ」

——次は猫だましか。狙いは恐らくこの次の攻撃。

血鬼術——冬ざれ氷柱ふゆつらら

カナエの上空には、いくつもの巨大な氷柱が形成されていた。

——これが上弦の力。強大な能力を余裕で間髪入れずに打ち出す存在。

相殺させることを前提に、近接攻撃で目の前の連撃に集中させ、消滅と共に広範囲の攻撃で注意力の散漫と動揺を誘う。そして最後に死角からの連弾撃。ひよつこのお嬢が気づく時間は無えだろうな。

童磨が扇子を降ろすと共に、氷柱は重力に従いカナエを目掛けて落下する。

傷だらけの体を引きずりながらもカナエは紙一重で躲し続ける。先程までの俊敏さはない。わずかながらも霧を吸い肺が汚染し始めていた。呼吸がうまくできない。すなわち体が動かない。羽が引き裂かれて飛べなくなつた蝶のように、羽織と体はぼろぼろになっている。カナエは、目の前で両親が殺された時に感じた死の恐怖を再び感じた。

童磨はにつこりとほほ笑みかけた。

「体が動かないだろ？ 毒も効いてるみたいで何よりだ。上を見てご覧」

カナエは真上を見た。一本の氷柱の着地点は自分だった。何度避けても氷柱の雨は途切れることなく降り続ける。だからといって足を止めることは許されない。諦めるなんてことは許さない。しのぶを一人残して死ぬなんてことは絶対にしない。

「私は！ 死ねないっ!!」

心に闘志を、刀に力を、足に未来を込めて自分を鼓舞し叫ぶ。もはや上空の氷柱を砕く術は残る術はない。

花の呼吸——……技を繰り出そうと体勢を変えてカナエは気がついた。氷柱の後ろにもう一本の氷柱があった。これでは何とか一本目の氷柱を撃破したとしても二本目の氷柱に貫かれてしまう。

カナエの視界に入る童磨は嘲笑っているように見えた。

「もう頑張るのは諦めて、俺と幸せになろう」

音の呼吸——肆ノ型 響斬無間

「させるかバカヤロオオ!!」

カナエに迫っていた霧と巨大な氷柱は、爆発と巨大な双刀の斬撃によって蹴散らされ霧散した。爆炎が晴れ、氷が光を反射しきらめく中、男はカナエの前に立った。

「俺は今最っ高に機嫌が悪い。この宇髄天元様がてめえをど派手に倒してやらあ」

相性が悪そうな奴と童磨はどうやって戦うのか、助手は先が読めない展開に思わず口端を吊り上げた。

夜の暗闇の中にようやく太陽が少し顔を出し、暗闇で染まっていた庭を太陽の光が浄

化して洗い流していく。産屋敷耀哉は廊下に座り夜明け前の庭を眺めていた。

クルイが下弦の肆を倒し、天元とカナエが上弦の弐と戦闘した。カナエは毒を摂取し肺も負傷したが、天元の迅速な処置により命に別状はない。上弦ともう一体の鬼は朝日を迎える前に逃亡。

こんなことは原作にはなかったはずだ。

無惨はなぜ倒された鬼の元へ上位の鬼を送ったのか。クルイが倒した下弦は無惨にとつて重要だったということなのか。鬼はなぜ2体で行動していたのか。カナエからは従属関係のように見えたと情報が上がっている。

一体何が起こっているのか。

耀哉と一緒に魂が出ていく程の重く長いため息を吐いた。それはいつも凜とした美しさを持つ鬼殺隊当主、産屋敷耀哉としてではなく、ただの一人の人間、産屋敷耀哉の弱さを垣間見せていた。

前世で熱心に原作を読んでいなかった自分を呪うしかない。いや、もう既に呪われた一族なんだけれども。はあ……、頑張ろ。

耀哉は再度溜息を吐き、当主としての自分に切り替わる。

私は鬼殺隊当主、産屋敷耀哉。弱音を吐くこと、見せることは絶対にしない。私の代で無惨を打ち取りこの戦争を終わらせる。頑張れ耀哉！ 頑張れ当主！ 妥当無惨だ

！ 打ち破れ血の呪い！！

「アンタでもため息を吐くんだな」

おっと脈を狂わせんじやない。

何処からともなく一人の少年が現れる。死んだ目をした人形のような少年だ。接触した時間はほんのわずかだが、時折垣間見せるやんちゃな一面を耀哉は気に入っている。だがそれを帳消しにする程予測不能な小憎らしい行動もする。

出たな問題児め。

耀哉は苦笑交じりの柔らかい笑顔を浮かべ、クルイを迎え入れる。

「おかえり、クルイ」

「……」

「隣においで」

耀哉は隣をポンポンと手でたたき、クルイを座らせた。生まれて初めて妻のあまねよりも年の近い人目と視線を同じにして座り、内心嬉しく思う。耀哉は目を合わせ、ゆっくりとクルイに語りかけて心の棘を溶かしていく。

「お疲れ様。下弦の肆を滅したと聴いているよ。これで一つ鬼舞辻の戦力を削ぐことができた。ありがとう」

「指示したのはアンタだろ」

「そうだね。それでもクルイはやり遂げてくれた。ありがとう」

任務を遂行してくれてありがとう。生きて帰ってきてくれてありがとう。様々な感謝の気持ちが溢れ出て止まらない。だからこそ、一つ一つの言葉にその思いを詰め込む。

「クルイ、鬼殺隊はね、鬼を滅することが目的ではあるけれども、人を守ることも存在理由の一つなんだよ。よく知ってると思うけれど、人は簡単に死ぬ。死んでいく人の尊厳や繋がれる意志、生きている人の居場所と未来、それらが突然断ち切られてしまう。人はどんな理由でいつ死んでしまうのかわからない。だからこそ、その死の一つが鬼舞辻によって招かれるものではないと思っっている」

耀哉は微笑んだ。クルイが欲している言葉を紡いでいく。

「クルイ、君を柱から降格する。日本中を見て鬼を倒しておいで。だけどこれだけは忘れてはいけないよ」

「君の居場所は鬼殺隊だよ。帰る場所も鬼殺隊なんだ。それだけは覚えておいてね」
クルイはゆつくりと目を閉じて開けた。

こうして柱に任命されてから19時間でその任を解かれるという最短記録が生まれた。

執念が生まれる

——肌を刺すほど寒い日の夜、不死川実弥しなずがわさねみは外から小屋の中の音を聞いていた。随分前から叫び声が消えた。実弥は中の状況を想像し嘆息する。いくら鬼が憎くとも鬼の絶叫を聴いて狂喜するほど趣味は悪くない。

小屋の中は薄暗かった。部屋の真ん中で鬼が逆さに吊るされている。目の前に座る男の質問に、鬼は途切れ途切れ正直に話す。始めの内は口を割らなかつた。だが、何時間にも渡り手足を切り落とされ、皮を剥がれ、内臓を抉り出され続けると、肉体と違つて精神が先に朽ちてしまった。

男は表情一つ変えずに問う。

「もう一度聞く。青い彼岸花は植物か」

「しら、な……い。わか……な、い」

「知らないとわからない、どっちだ」

「しら、ない」

闇に呑み込まれたような真つ黒な目を向けて、男は問い続ける。

「無惨とはどうやって情報を交換している」

鬼はがくがくと震えだす。脳内に鬼舞辻の声がこだまする。「私の事は何も言つてはいけないよ」ひどく優しい声音なのに、底冷えする恐ろしさが体を襲う。

「し、知らな、いっ！」

「ダウト。信じねえよ」

クルイは立ち上り、鬼の足を切断した。

片足首に体重がかかり鬼は声なく叫ぶ。涙は出ない。既に枯れている。

クルイは鬼を上から下へスキャンするように感情のない目でじつくりと観察し思索した。

「呪いか」

自分に置き換えて考える。信頼のない奴からの定期連絡など意味はない。ならば嘘偽りのない情報を常に手に入れればいい。感覚器官を乗っ取るように。その中でも一瞬で膨大な情報を入力できるのは何か。

鬼を見て、目が合う。

鬼はクルイの視線から逃れるように目が泳ぐ。

「……目。見た物が無惨に共有されている」

視覚は、目を持つ生物にとって最も多い情報量をもつ。

鬼は浅い息を繰り返し、暗く定まらない瞳を向けている。この状況も無惨に自動送信されている。

やはり目を隠すべきだった。

「これで最後だ。質問に答えたら解放する」

死んでいた鬼の目に涙が浮かぶ。解放、という言葉が希望に満ち溢れる。

「対象を移動させる、もしくは空間や次元を歪められる能力の鬼はどこだ」

「聞いた……ことは、ある。が、しら……ない」

収穫は得た。目的の能力を持つ鬼がいることにクルイは満足した。

縄を切り、吊り上げられていた鬼がべしやりと床に落ちる。鬼は再生力が限界を越え、足だけでなく至る箇所が満足していない。

そんな鬼を見下ろし、クルイは自身の血を数滴落とした。

鬼は血を飲み、瞬く間に力がみなぎる。目が開き、体が熱くなり、酷く甘美な味わいで力が湧く。他の血など、もう飲めない程に。

念を修得しているクルイの体は、一般人とは違い生命エネルギーが拡散せず、皮を一枚纏うように体の周囲に留まっている。オーラは体を活性化し、体内を巡る血液は一般

人よりもエネルギー^{生命}が凝縮されている。

鬼は目の前の男の肉を喰いたいと心底思った。だがすぐにそれは愚行だと理解する。今まで鬼である自分が男に圧倒され、手も足も出なかつた。沸き立つ食欲が恐怖に負ける。鬼の矜持は既に折られている。

「もう用はない」

男が「行け」と言つたと同時に鬼は走り出した。求める男の血肉の欲を振り切り、戸を指す。

戸を突き破り、夜空を見る。これからは山でひっそりと暮らそう。そう未来を描いた時には首が地面に落ちて目に土が付着していた。

なぜだ。

眼球を動かして周りを見渡す。先ほどの男とは違う、傷だらけの男と目が合った。そいつは殺意をむき出しにして頭を突き刺した。

「とつとつとくたばりやがれ」

——そいつの目が苦手だった。

クルイはキメラⅡアントを思い浮かべた。人間を襲い、食した特性を次世代へ反映す

る摂食交配生物。より栄養価の高い念能力者を襲い、念さえも自在に操るようになった
グルミアント美食の蟻を。

クルイは鬼と蟻の共通する生態に嘆息した。栄養価の高い生物、人間を食すこと。生命エネルギーが一定値を超えると異能力が発現すること。

何も成せなかった過去の記憶を掘り起こす。蟻達が念能力を身につけた経緯を思い返し、二の舞を踏まないように警戒するしか対策はない。

クルイは、オーラ自を纏身のう血を飲んで先程の鬼を見て理解した。自分が鬼に喰われた場合、鬼は念能力を有し最終的に無惨が念能力を吸収することになる。

捕縛されても同じである。ポツクルの様情報に抜かれ、鬼は蟻の道を進む。

一方で実現すれば終焉が始まる。この世界にはクルイ以外の念能力者はいない。クルイはめんどくさそうにため息をはき、鬼が壊した戸口へ歩き出した。

実弥は小屋から出てきたクルイに問いかけた。

「テメエ、あの鬼に何をしたア」

クルイは実弥に目もくれず周りを見渡し、歩みを進める。何も話すことはないという態度に、実弥は舌打ちと共に苛立ちが募る。

タコ殴りしても飽き足らないくらいムカついてはいても、決して実弥はクルイを軽ん

じているわけではない。何かあるというのであれば端倪たんげいすべき展開である。

それでも、こつちを向けと荒々しく肩を掴むくらいはする。

「捕えた時よりも随分と皮膚が硬化してやがった。テメエ、鬼あれに何をした」

「話す必要はない」

実弥に肩を強く掴まれ、無理やり視線を合わせられる。凝キョウをしたままの目で視たことから、実弥の苛立ちがオーラから見て取れる。

クルイはため息と共に視線を外し、村一帯を視た。

もうここには鬼の痕跡はない。少しなら無駄話してもいいのかもしれない。言つたところで不死川がどこまで信じるのかわからないが、全てを信じない程そこまで理解力が乏しい奴ではなかったはずだ。

「力を与えた。鬼は人間を喰つてるんじゃない、人間の生命生エネルギー命を喰っている。それを与えてみた」

「テンメエ!!」

実弥は怒りで顔の至る所に筋が浮かび上がりながらも、刀にかける手をなんとか理性で押し止める。

クルイが与える量を見誤れば、鬼は狂暴化し実弥は無事では済まなかつただろう。

クルイは実弥の様子を横目にし、拳を鳴らし出す前に話を続けた。

「鬼が男よりも女を好んで喰うのは、女の方が生命力が高いからだ。子孫を一定期間腹の中で育てて産むしな」

実弥を置いてクルイは歩き始めた。話は終わったという態度が実弥の癩に障り、不快感が積み重なる。

「チツ。反吐が出る」

「吐くなら見えないところでやってくれ」

「アアン?! んだとテメエー!」

常識を持った隊士であれば、苛ついている実弥は恐怖の対象であり、クルイもまた実弥とは違った種類の恐怖の対象である。真つ暗な目と濃い隈、過去の事件が要因となっている。そんな二人が行動を共にするようになり、より強大となった恐怖に一般の隊士は震えあがった。

クルイは感情が読めない目で実弥をじっと見た。

「オマエいつもイライラしてるけどさ、高血圧なんじゃねえの」

「テンメエ!!」

クルイの鋭鴉が猛スピードで二人の間に割って入り、ぜいぜいと息をきらせながら叫ぶ。

「応援要請イイ!! 胡蝶カナエ、上弦の弑と戦闘中!! 至急応援セヨオオ!!」

クルイは実弥を置いて姿を消した。実弥は舌打ちを残してクルイの後を追った。

——「やあ、久しぶりだね」

突如上空から降ってきた巨大な氷柱に、花柱、胡蝶カナエは5年前の光景がフラッシュバックした。

隊士の多くは氷柱に貫かれ絶命している。鬼の姿は見当たらない。姿を隠しているか、視認できない程遠距離にいるか。

カナエは即座に指示を出した。

「口元に布を覆いなさい！ 火薬を持っている者は投げなさい。煙幕で一度退きます」
血鬼術、粉凍を忌避しての考えだ。毒ガスの様に、空气中に散布された童磨の血を吸引すると肺胞が壊死する。

体勢を立て直す必要がある。生存者が何人いて、そのうち何人が動けるのか。氷柱に潰された隊士は全員絶命しているのか。

だが無情にも、爆風と共にそいつは上からやってきた。

「久しぶり。ちょうどいい具合に成長したね。月のもはもう来たかい？」

「君はこの5年間よく頑張ったよ。ただ、努力が実るとは限らない」

童磨は殺した隊士の目玉を食し、口福にひたる。喰った人間が美味いからか、目の前のカナエを挑発しているかはわからないが満面の笑みを浮かべている。

挑発に乗ってはならないとカナエは自制するが、ギチギチと刀を握る手に力が籠る。数時間にも及ぶ戦闘と負傷は、カナエの体力と精神力を極限まで削っていた。

カナエは5年前にも十二鬼月、上弦の式に位置する童磨と戦っている。当時入隊して2ヶ月ということもあり、カナエは童磨の圧倒的な力と己の弱さを痛感した。音柱、宇髄天元がいなければカナエは間違いなく死んでいた。

カナエは守らなければならない者を守ることができない己に涙し、その後悔を胸に血の滲む努力を続け、鬼殺の剣士の最高位の称号を得るまでに実力をつけた。

それでも戦って思う。その差は縮まっていないと。

遠距離拡散型の童磨の間合いに入らないように、カナエ達は代わる代わる間髪入れずに斬りつけた。腕を落とし、身体に斬撃を入れ、肉を削ぐ。刺突し、肉を抉り、頸を斬ろうとして皮を掠る。

童磨はその間も二対の扇で斬りつけ、隊士を地に眠らせていく。

最後まで残ったのはカナエだけだった。

童磨は空虚な笑顔を浮かべ、カナエとの殺し合いを楽しんでいる。幼子の成長を喜ぶ

ように、カナエ達にわざと体を斬らせてその成果をねぎらった。

「うんうん、練習したことがちゃんとできてるよ。よくできました。でも残念、俺は再生できるんだ」

「よいしょ」と斬られた箇所を修復し、じやーんと両手を広げて全身を見せる。斬られた身体は傷跡一つ見当たらない。

童磨は垂れた眉をよりひそめてカナエを哀れんだ。

「かわいそうに、5年も修行して爪痕すら残せないとはね」

カナエと死んでいる隊士を見て、童磨は馬鹿だなあと思う。信者は皆『辛い、苦しい』と解放を求めてくるのに対し、鬼殺隊は自ら苦行を歩む。どんなに鍛錬し己を磨いたところで人間は非力から抜け出せないというののだ。

どうして彼等はわからないのだろうか。雑魚の鬼を倒せたところでより強い鬼がいる。上には上がいる。自ら喰われようと身を差し出しているようにさえ感じる。

そこで思う。

「ああ、もしかして、君達は復讐するという行為で生活を充実させているのかな。頑張つて頑張つてできなかつたことができるようになった。鬼を一匹倒せた。達成感を得た。それは分かりやすく努力を評価できる。だからいつまでも俺達を追いかけている。そういうことかい？ 君は、復讐で、今、充実してるかい？」

カナエは一瞬理解できなかつた。

こいつは何を言った？

そして叫び出す程の怒りが込み上げてくる。童磨を睨み、刀を握りしめ、何度も大きく息を吐いて吸う。胸を駆け上る怒りを抑えつけ理性を保つ。

感情を、乱しては、駄目だ。

死に行く親と仲間達を見てきた。助けられなかつた人達を見てきた。それを悲しむ人達も見えてきた。首を跳ねた鬼が人の心を取り戻し、泣きながら崩れ行く姿も見えてきた。

この不幸の連鎖を断ち切ろうと心に誓った。

「私が可哀そう？ いいえ。違います。可哀そうなのはあなたの方です。そんな風にし
か考えられないあなたは、愛を知りません」

鬼に殺された両親からは、死ぬ瞬間まで愛をもらった。仲間達は、故人への愛を原動力に駆け抜けた。人は愛する人を失い涙する。その痛みに耐え、立ち上がり、前に進む。同じ思いを味わえと――。

「復讐という言葉の意味は広い。愛する人を奪われた感情を敵相手に返すこと。そして、同じ思いをする人を増やさないこと。あなたは、死ぬ前に愛を知って死ぬ」

「へえ」――こいつの頭は大丈夫か。

愛や正義が葉の様に働いて理性を溶かす。それを大義名分にすれば耳ざわりはよく幸せなまま攻撃的になれる。昔から周りの人間は馬鹿ばかりだった。そして目の前の女も同様に思う。

童磨はにつこりと笑った。自分の主張ばかり信じてやまない小娘に、少しばかりの意地悪を言う。

「ねえ、俺が善意だけで君達に体を斬られてあげたと思う？ 冬だから気づかないのかな？ ここら辺は俺の血が至る所に付着してるね」

その言葉に、カナエは周辺の気温が低下していることによく気がついた。真冬の未明に、外で何時間も死闘を繰り返して感覚が麻痺していた。急いでその場から離れるが、空気中に舞う童磨の血を吸い、体内はゆっくりと冷やされ既に蝕まれている。

童磨は口端を上げ、八重歯を見せた。時間をかけて熟成させた肉をやつと食べる事ができる欲にまみれた笑みだった。

「5年越しになつたけど、やつとこの苦行に満ちた世界から君を救えるよ。もうつまらない復讐なんてしなくていいんだよ。俺は、今度こそ君を幸せにしてみせ——」

突如背後から頸に刃が入る。童磨はとっさに自身で頸を断つた。落ちる自身の首が監視カメラのように空を映し、後ろの正面を映す。だがそこには何も映っていないかった。

何が起こった。

胴体はすぐに落ちた首を掴み、後ろに飛んで距離を取る。

クルイは宙に浮いたその瞬間を狙い、技を放つ。

音の呼吸——壺ノ型 轟

滞空している胴体と首を目掛けて交差した斬撃を放つ。

威力が大きい。直撃すれば再生に多少時間がかかる。その時間が明暗を分けると直感が訴える。

血鬼術——枯園かれそのしつ垂り

首は胴体に指令し、胴体は二対の扇子をあおぎ凍の刃で相殺する。着地した胴体は首を頸に置き、扇で頸を隠してくつつける。

危なかった。思わず死ぬところだった。心臓からヒヤリとした焦りを取り払う。

クルイは着地した瞬間に距離を詰めた。足にオーラを40%集結し、童磨の胸を蹴り胸骨から胸椎をへし折る。ぐしやりと童磨の胸が陥没し、足が体内に沈み込むのを厭わず頸にベンスナイフを入れる。

童磨は咄嗟にクルイの腕を掴んだ。胸に沈んでいる足を肉で固定し扇子で鳩尾を刺突する。

転瞬、クルイは流リユウで鳩尾にオーラを集中させダメージを軽減した。上に突かれた力を

利用して童磨の体から足を取り出し、体をひねって背後から羽交い絞めする。

風の呼吸——式ノ型 爪々そうそう・科戸風しなとかぜ

上空から4つの爪状の斬撃が童磨の肉体を刻む。背後で童磨を羽交い絞めするクルイごと躊躇なく斬撃は放たれた。

——こいつら！

目の前には人間の形をした獣が第二撃を浴びせようと刀を構え迫っている。背後には男が体を固定して動くことができない。このままでは首が飛ぶ。ならば飛ぶ前に相手を不能にすればいい。

コマ送りのフィルムの様に、時間が引き延ばされてゆっくりと見える。

実弥が距離を詰め、童磨の間合いに入る。

童磨の口がニヤリと弧を描く。

童磨が鬼血術を念じる前に実弥の後方から刀が飛んでくる。

後方でカナエが指文字で離れると二人に指示をだす。

血鬼術——粉凍

童磨が念じた時、既に二人は距離を取っていた。

「もー、君は余計なこととして！」

苦しそうにゼエゼエ……と呼吸をするカナエに童磨は頬を膨らませる。それでも三

人への警戒は怠らない。童磨は対峙する二人を特に注視した。今まで戦ってきた鬼殺隊の中でも上位の強さに相当する。

「胡蝶、それ飲んで口をゆすげ。本部に帰ったら肺の洗浄だ」

実弥はカナエに止血薬と藤の花の蜜を溶かした水を投げた。外傷と共に内臓の負傷もあるのだろう。花柱、胡蝶カナエはもはや鬼と戦うことはできない。生命活動を長く続ける己との闘いに変わる。

実弥は上弦の弐に視線をひたと据え、その奥にいるクルイに目を合わせる。剣術よりも体術が飛びぬけている奇人である。超近距離型のあいつには上弦の弐の能力とは相性が悪い。

だが、それを凌駕する程あいつは強い。

実弥の瞬きを合図に二人は両側から童磨に飛び掛かった。

血鬼術——冬ざれ氷柱

童磨が思念すると、任意の上空に二人を狙った巨大な氷柱が出現する。ドリルの様に回転しながら自由落下し地面を穿つ。

風の呼吸——参ノ型 晴嵐風樹せいらんふうじゆ

実弥は無数の横なぎの斬撃で落下してくる氷柱を相殺する。視界が晴れた時には、氷柱をもったクルイが童磨の頭に槍投げの如く刺突していた。首を差し出すように頭を

貫かれた童磨は実弥の間合いに入る。

「やれ」

無機質で傲慢な声に反抗するように、実弥は雄叫びを上げて一閃した。

血鬼術——枯園垂り

童磨は氷の斬撃を飛ばし、氷柱に突き刺さった頭をより深く突き刺して首の皮を斬られるに留まる。同時に、氷柱を掴んでいた死んだ目の男には氷柱を集中的に落とし遠ざける。

この男は厄介だ。

「あー、危なかつたなあ」

言葉とは裏腹に眉が弧を描く。酔いそうになる程、何処からかもの凄く良い匂いがするのだ。

童磨は自分を挟む二人を見た。一人ずつ顔を向け、空気中に漂う血の匂いを嗅ぐ。匂いの元は傷だらけの男からだった。

先程の斬撃で傷を負ったのだろう。男の傷口からは血が流れている。稀血の中でも稀少性の高い稀血なのだろう。流れ出る少量の血からでも濃い匂いが漂ってくる。

意図せず高級な餌に出会い、唇を舐める。

その血が欲しい。

童磨は心の中のドロリとした欲望を隠し、明るくカラカラと笑った。

「君さあ、稀血だろ。それも稀少種の。俺は女しか喰わない主義なんだけどなあ、君だけは特別に喰べてあげるよ」

「違エだろ。喰べてあげるじゃなくて喰わせてくださいだろうがアツ！　どんなに頼まれても喰わせねエけどなあ!!」

実弥は目の前の鬼を睨み付けた。腕に刀を当てて引き、自ら血を流した。その匂いを嗅ぐだけで鬼が酩酊するほどの稀血の中の稀血を。位が高い鬼ほど酔う、最高のご馳走を。

この血で前後不覚になれ。

血が流れる度に、先程とは比べようにならない程の血の香りが広がり、口角が上がる。よりうまいものを食べたいという欲求が頭を揺らし理性を追いやる。

日の出も近い。一気に片を着けなければ喰えなくなる。だが二人を相手する時間はない。ならば俺じゃないやつがもう一人の男の相手をすればいい。

童磨はニタリと笑い、血鬼術——結晶けっしょうのみこノ御子を発現した。童磨を模した小さい氷像が四体出現し、扇子でクルイを指し命令する。

「君達があつちをやつて」

クルイを取り囲むように、常に三体の御子が遠距離拡散型の三種の攻撃を仕掛けてくる。粉凍で呼吸を止めさせ、斬撃を飛ばし、氷柱を落とす。四体目の御子は常にクルイに接近して斬撃を飛ばす。それぞれの御子に決められた技のみを指示し、必要以上に手の内を見せない攻撃にクルイは悪態をついた。

クルイは早々に一度、接近してくる御子を足で砕いている。片足を硬コウの状態にし、サッカーボールの如く蹴り上げ粉砕した。砕かれた御子は直ぐに元の形に戻り、再びクルイを追尾して扇をあおぎ始めた。

クルイは息を止めたまま動き続けることに限界を向かえていた。発ハッが使えたらどんなに楽だろうか、そんな甘い考えが頭に浮かび嘲笑する。

まだ酸素が足りている今できることを考える。氷像を砕いても斬つても意味はない。ならば一時的にもその存在がいなくなればいい。

クルイは追尾してくる御子を掴み、奥で実弥と戦っている童磨に向けて投げつけた。オマエうざいんだよ、と。それは何年経つても発ハッが使えない自身への苛立ちも含んでいた。

残り三体が展開する攻撃を躲し、最短距離で三体の御子を掴み鬼に投げつける。鬼は四体の氷像が飛んでくる様子に瞠目した後、顔から表情を消した。

鬼の視線を無視してクルイは高くジャンプし、新鮮な空気を肺に取り入れる。体が最

高到達点に辿り着いた時、クルイは遠くの空が微かに白み始めている様子を確認した。

日が昇る。安堵よりも任務を完遂できていないざわめきが胸に広がる。

——何やってんの。クルイは任務完了が第一。

突如、幼い頃に刷り込まれたイルミの言葉が頭に響く。

そうなるとなぜか、視野が広がり身体が自然と最適解の動きをする。

クルイは着地と同時に鬼との距離を一瞬で詰めた。刀にオーラを纏わせ周の状態にし、鬼の身代わりとなり立ち塞ぐ氷像の首を落として童磨の頸を狙う。

童磨と戦っていた実弥は、クルイの刀が頸に入ると確信した。

だが、刀は空を斬った。鬼はその場から消えていた。

「あー、また朝が来ちゃうか」

少し離れたところに童磨は居た。

垂れた眉を更に垂らしてカナエを見ている。手を振りながらひどく軽い口調で勝手に約束を交わす。

「またね、コチヨウちゃん。君が死ぬ前に俺が迎えに行くからね」

君の最期は俺に喰われるんだ。

血鬼術——冬ざれ氷柱を発動し童磨は姿を消した。

墜落する巨大な氷柱を二人が全て砕いた時には夜が明け始めており、鬼の追跡は望め

なかった。

クルイは壁を殴り、苛立ちを発散させた。今まで念の発が使えなくとも四体行と応用、家仕込みの技術で鬼を倒すことができていた。知らないうちにそれに慢心していた。

発が使えないことがひどくもどかしい。発さえ使えれば早々に片が付いたのといふ三下みたいなことを考え、自分に嫌気がさす。

何かを得るためには何かを捨てなければならぬ。自分を捨てても、発が使用できるようにしなければ捕獲など実現しない。それは鬼よりも圧倒的に戦力が高くなければならない。今の状態で、目的の能力をもつ鬼を捕獲するという過去の楽観的な思考に嘲笑する。

上弦の鬼の力量を知り、今の自分の力量に愕然とし、こぶしを強く握った。

胡蝶カナエは鬼殺隊を辞め、療養に専念している。剣を振るい駆けまわるところか、日常的に歩く事すら困難な身となった。肺を主に、日に日に童磨の血鬼術に蝕まれていき、そう遠くない日にはベッドから起き上がることもすらできなくなるだろう。

死が、一步一步カナエに近づいていた。

夢の途中でカナエは目を覚ました。夜風が入り心地よい。だが寝る前に確かしのぶが窓を閉めたことを思い出す。

窓を見ると、見知った後姿が窓に腰かけ夜空を眺めていた。真つ暗な目と隈は死神を連想させると言われているが、それとは似ても似つかないほど彼が優しいことをカナエは知っている。

「起きたか」

カナエの変化を察知し、クルイは振り向かずと言った。

「ええ。こんな夜中にどうしたんですか」

「会いに来た。オマエは……生きたいか。死ぬのを待つか」

クルイは自身の手を見ながらカナエに問う。ゴンとキルアがやったみたいに、生命エネルギーをカナエへ送れば助かるのではないか。

だが同時に懸念する。オーラを送りコイツが回復した後、鬼に喰われたらどうなるのか。最悪の事態を予測しながらもここまで来て、未だ迷っている。

そんなクルイにカナエは優しく笑った。背中を向け続け、『何か』と葛藤するクルイにカナエは5年前の事を思い出す。

「あなたは、本当に優しい人ですね。……何もしなくていいんですよ」

口下手なクルイの代わりに今度はカナエが話し出す。

優しい彼なら、今なら否定してくれるかもしれない。昔から抱く、理解されない理想を。そんなずるい考えと共に、カナエは言葉を紡いだ。

「人と鬼は、共に生きることとはできると思えますか」

「それは共生か」

「ええ、そうです。私の夢です」

カナエはにつこりと笑顔を繕った。

クルイはカナエに胡散臭いものを見る目を向けた。クルイのような人間からは、平和主義者というのは得体の知れないものだ。魔獣に好かれるゴンでさえも、親類同然のカイトを殺された時は蟻を殺す対象としたのに、ゴンでもないカナエにオマエは何を言っているんだと心の中で毒づく。

だが、互いが何も奪わないのであれば、その夢は実現する可能性はあるとも思った。

「共にあることはできる。だがお互い不可侵領域に踏み込むことは許されない」

「具体的には？」

「鬼が積極的に人を喰わないこと。人も積極的に鬼を狩らないこと。そして人間の倫理

に則るハント」

「難しいことを言いますね」

「難しい議題だからな。だが倫理はもつと難しい。倫理的に正しい人間は、自らの置か

れている環境を支配するルール……規則に従順であるだけで、その実何も考えていないことが多い」

それはクルイ自身も当てはまる。

裏の世界のルールに従って生きてきた。何も考えずに決められたルールに従うのは楽だった。何度もそうやって答えを出してきたはずなのに、自分はいつのまにか迷子になっていた。

「つまりは、人間が考えた規則に鬼を従わせるということですか」

「随分乱暴にまとめたな」

「それは私の描く共生ではありません」

「だろうな。まあ、日本的な考えだ」

「日本的？」

「人と自然。自然に関しては人ならざる者、異形と捉えて構わない。共にあろうとするがどこか違うと一線を引き共生することはない。こと西洋においては、自然は人が完全に支配するものと考えられ、東洋のある地域では人と自然は一心同体のもと考えられている。つまり、オマエの理想は文化的思想の形成であり、自身で導き出したものかは疑問だ」

カナエは全く新しい世界を見た気がした。今まで考えていたこと、言われてきたこと

とは考え方の次元が違った。

クルイは淡々と畳みかけた。

「鬼を、信じるなら裏切られても信じろよ。それができないなら自分の理想を押し付けてるだけだ」

カナエは頷き、笑って涙した。

男は音もなく塀を飛び越え、蝶屋敷から出てきた。

「テメエ、今度は胡蝶に何をしようとしたア」

実弥は壁にもたれかかり、クルイを待ち伏せていた。つり上がった鋭い目がクルイを睨みつける。

実弥の問いかけにクルイは答えようとしない。暗い目をしたまま淡々と前を見据えて歩き始めている。

「テメエは今何を考えてやがる」

質問を変え、苛立ちを隠さず問いかけるが、クルイは更に目を暗くするだけだった。またも話す必要は無いという態度に実弥は怒りが込み上がる。

お目付け役という立場はあれ、クルイとは何度も組んできた。少なくとも実弥はクル

イの実力を認めており、必要最低限の信頼関係も築いている。

上弦の弐との戦いからクルイの態度が変わった。今まで以上に人嫌いとなり、一人で何かをしている。

「おい」と文句を言おうとしたが、言葉が出てこなかった。

クルイの黒い気配が実弥の心臓をがしりと握る。思わず息が止まり、汗が伝う。

ぞつとするほど凍てつく目を向けてクルイは言った。

「関係ない」

この世界の人と関わり、下手に色々と感じてしまったせいで自分でも気づかぬうちに仮面がはがれかけていた。

——音柱、宇髄天元は鏖鴉からの手紙を読み、本部へ駆けだした。

産屋敷耀哉は上弦の弐との戦闘について速報を聞いた後、報告に来た隠を一旦下がらせた。

直ぐに手紙を書き上げ鏖鴉に括りつける。事の詳細は後で聴く。今は一刻も早く確認しなければならぬ。

耀哉は鴉に話しかけた。

「天元を呼んできてくれるかい。クルイのことを全て教えくれと」
鴉は主の言葉に頷き飛び立った。

兩人

11

私という存在に、意味を求めていた

産屋敷耀哉として生を受けてから、自我が芽生えるまで、五感で得たもの全てを記憶していた。

一度呑み込んだものを再び口に戻して咀嚼する反芻動物の様に、私は時間を掛けて何度も情報を噛み砕いては呑み込み、状況を整理した。

生前の記憶を持ち、脳が発達するにつれ、私は背負った重責を理解する。

父は、鬼殺隊の当主であり立派に隊を率いていた。

だが、その命は短かった。産屋敷一族では、20代前半まで生きれば長生きし、誰も30年と生きられない。それが、始まりの鬼である鬼舞辻無惨を血筋から出した呪いである。次期当主である私は、父が死んだ後もすぐに隊を率いる人間となるよう幼い頃から厳しくも愛情のある教育を受けた。

立場が私を変えた。当主となり、遅くとも私はやつと今の私を受け入れた。私は鬼殺

隊当主、産屋敷耀哉であるということ。そしてここは、鬼滅の刃の世界であるということをと。

鬼が増えると犠牲者も増える。市井の死傷、隊士の死傷、鬼の報告を聞くにつれ、生きることを絶たれた暗い恨みの声が耳の傍で聞こえる。

——お前の血筋が鬼を出したから、私たちは死ぬ羽目になったんだ。

——お前の血筋が鬼を出したから、俺は鬼になつてしまつたんだ。

その度に想いが強くなる。犠牲者をこれ以上出してはいけない。一族の呪いを次代へ継がせない。どんな手を使つても私の代で鬼舞辻無惨を殺さなければならぬ。

だが、いくら強い想いを持つていても私は原作の知識は乏しく、また体も脆弱であつた。

想いを原動力に体を突き動かすことはできず、呪いが私の体を蝕む。刀を振れば10回もたずに脈が狂い、感情の起伏も体に障る。呪いが体を侵蝕し腐らせるまで、植物の様にじつと静かに生き耐えなければならない。

転生という力を与えられて生まれてきたはずなのに、私には力がなかつた。こみ上げてくる狂気を何重にも包んで肚の奥底にしまい、静寂に隊の指揮を執り続けた。

その狂気は、今か今かと肚の底から出てくる機会をずっと窺っている。

——あいつは、優しすぎる奴です。

音柱、宇髓天元は鬼殺隊当主、産屋敷耀哉の前で言った。

元忍びである彼は、鬼殺の剣士、甲に位置するクルイ隊士の『元』師範である。

5年前、音柱となったクルイは下弦討伐作戦の指揮をとり、討伐と共に人質の患者を全て救出した。だが、その代償に、一般人の死傷者が過去最多に上った。その内約8割の死因は鬼ではなく、彼に殺されている。

市井を守る鬼殺隊が、意図的に人を殺めることは隊の存在意義に反する。

クルイはその処分として、鬼殺隊最高位である柱の剥奪及び宇髓の門を追放された。——と、周囲は認識しているが、事實は、クルイ自ら宇髓の門から籍を抜き、姿を消した。

宇髓は承諾していないが、師弟関係は事実上解消されている。

耀哉は一度、宇髓に尋ねたことがある。「クルイに会わないのかい」会う手立てをしようとして提案したが、宇髓は頭を振った。「自分で見つけたら託びを入れます」

心の片隅で悔やみ続ける宇髓を思つての提案だったが、彼自身のその言葉に心打たれ、和解の席を設けることをやめた。

今でも度々、疑念が過る。クルイは、降格されるために市井に手をかけたのではない

かと。

彼は柱への就任を拒否していた。聡明な彼であれば、降格されることも計算の上でとつた行動ではないかと疑いの目が向くが、すぐにその考えを消す。

情報を得る前から先入観をもつては見えるものも歪んで見えなくなる。クルイの経歴、人柄をまだ把握しきれていない。それらを知るために、本日、クルイの師範である宇髄天元を呼びつけたのだから。

突然の招集にもかかわらず、天元は迷惑なそぶりを見せることなく頭を下げ、口上を述べた。

天元はクルイとの出会いから絶縁となつている現在までを詳細に語つた。クルイの経歴、能力、性格、思考などを淡々とした口調で語っていたが、時折思い出を懐かしむように表情が柔らかくなる。兄が手のかかる弟を気にかけているようにも見え、その想いに笑みがこぼれた。

だからこそ胸が痛む。天元は5年経つた今でも、あの時クルイを信じられなかった自身を責めている。

「――以上が私の知りうるクルイの情報です」力強い眼差しを向けて、嘘偽りなく天元は話した。

ありがとう、と目を伏せて頷く。入隊後の話は、凡そ鴉の報告を基に作られた報告書の通りであり、入隊前のクルイの話は興味深い点がいくつか見られた。

その一つが、天元と同業であったという経歴である。暗部の業界に身を置いていたからか、彼の性格、発言及び行動はこの時代においては珍しく合理的な要素が多い。

原作を詳しくは知らないが、クルイという登場人物は存在していないはずである。そんな原作に名前すら登場していない彼が、どうして予定されていた未来を変えることができたのか。変わった内容は、未来から見て許容される範囲の改変だったということなのか。

答えの出ない疑問が次々と湧き出て頭の中を占領する。それらを一つ一つ丁寧に整理して紐解くと、最後はクルイに繋がっている。

正体を掴む糸口は、蜘蛛の糸のように細く透明で一見見えないが、しっかりと繋がりが形跡を残している。

耀哉はその先を辿り、宇髄を見つめた。

「クルイは、どうして目に呼吸を集中させたんだい」

それは以前から抱いていた疑問だった。

「きっかけはわかりません。ただ、鬼の気配を読むよりもオーラを視た方が早いと言っていました」

「オーラ……。それは、彼が言った言葉なのかい」久しく聞いていない言葉を発し、音の頭に刻み込む。

はい、と宇髄は頷き、オーラを気やエネルギーと言っていたという追加情報を差し出す。

「気、エネルギー……」

「気とは、気配とはまた違ったものの様です。水が沸き湯となつて蒸気が発生するように、人や動物、生きとし生けるもの全てに湯気のような気が放出されていると言っています。俺はそれを『生命力』と解釈しています」

「オーラ、気、エネルギー、生命力……」

耀哉は背中にヒヤリとした汗が伝う。前世でその言葉が頻繁に出てくる二次元を耀哉はいくつか知っている。

「クルイは呼吸を使えた時、何か言つてなかったかい。気やエネルギーとは違う別の言葉で、何か称していないかったかい」

宇髄は、クルイと出会った日を起点に記憶を高速に再生させた。継子にした日、呼吸の基礎知識を教えた時、音の呼吸を教えた日々、鬼の気配について話した時のクルイの反応を一つずつ汲み上げては次々と是非の判定を下す。その中で、一度だけ聞きなれない言葉を掬い上げ脳が是と判定した。

記憶の中のクルイが呟いたように、宇髄は言った。

「——なんだ、ネンじゃないのか」宇髄は顔を上げ、耀哉の目を見る。「……そう呟いたのを聞きました」

「ネン……」

宇髄の記憶に頼った証言は、客観的に聴くと心もとないが、耀哉にとっては確たる証言となった。

氣、エネルギー、ネンと聞けば『念』と勝手に文字を変換した。それならば、クルイが擬のように目に呼吸を集めて人や鬼のエネルギーを視しようとしたのも頷ける。

あの世界の人間が、この世界にやってきたということか——。

早鐘を討つ鼓動を落ち着かせる余裕もなく、耀哉は思考に没頭した。それだけで決めつけるのは早計であると、飛びつきそうになる答えにブレーキをかける。他にも何か決定打がなければ確信してはならない。

他に、クルイに何か手掛かりはないのか——。そう考えた時、ふと名前が引つかかった。

——クルイ。

あの世界のある一家の兄弟達の名前は、3文字で構成され、2番目に『ル』が入って来たことを思い出す。

耀哉は暫し思案した後、宇髄に問いかけた。いつものように柔らかく、だがどこか緊張感のある声だった。

「天元、クルイは同業者だと言ったね。彼は、それを彼の言葉で何と言っていたのか覚えてるかい」

「暗殺者です」

ネン、クルイ、暗殺者。

耀哉は諦めたように瞳を閉じる。息を吐き出し、心を落ち着ける。意を決し、瞳を開けて答えが予測される質問をする。

「彼の苗字は、わかるかな」

「一度だけ、聞いたことがあります。確か……『ゾルディック』」

その言葉に耀哉は頷いた。

違う漫画の世界から来た人間がこんなにも身近にいたことに驚く。

耀哉の心の中を覗き見る者がいるのなら、新たな宇宙を創造するほどの大爆発を起こしているのだが、耀哉がとった行動は、ただ瞳を閉じて開いただけだった。

「天元、話してくれてありがとう。クルイの事が分かったよ」

——私は、世界の存在に驚く。

驚きや不思議とは、他でもない世界が私たちの周りに開かれ、事象として起きている。それは、何かあるものがあり、何も無いのではないということである。ものが在り、そのものの最中に私たちが存在している。

不安の無い夜において、初めてあるものが『ある』と根源的に開示される。在るものはあくまで在るものであり、無ではない。

在るものの不思議、つまり在るものがあるということ。

逆に、存在の無根拠性とは、森羅万象があることに必然的な理由も起源も目標も無いということ。つまり万物は、ある必然性などないのに在るという存在の非必然性及び原始偶然を意味する。

存在が非必然だということは、万物は無くても当たり前であり、むしろないことこそがオリジナルとなる。在ることが異様となるのに、それなのになぜか在るという状態になる。

だが、もし仮に必然的な理由や目的があつて何かがこの世に登場したのならば、それがあるのはごく当然なことになるだろう。存在しないことの方が理屈としてはおかしい。

在るなんてことは、論理的には異様なことであり、無い方が理屈としてはむしろ無理

がない。存在していることこそ自明で当然と思っているが、無根拠ということを前提に考えれば、自明なのは非在や無の方であつて、存在することはとても奇異であり、稀なことである。

つまり、私わたしとクルイちは、必然的な理由や目的があつてこの世界に登場した。

天元を下がらせ、息を吐き出す。

天元の話を聴いて理解した。クルイは外国人でもなく、この世界の人間でもなく、違う次元からきた人間である。彼の居た世界を知っている。前の世界にいた時、熱中して読んだ漫画だ。

だが、あの一家にクルイルイゾルディックという人物がいた記憶はない。

だからこそ新たな疑問が生まれる。彼は『何者』なのか。どうしてこの世界に『存在』しているのか。なぜ今もお鬼殺隊に『所属し続けている』のか。それは天元の話を聴く前後では解釈の違いが生まれる。

頭の中で大小様々な疑問が湧き、一人で疑問百出の刑に陥る。

彼の正体には大きく分けて3つの解釈が上げられる。

第一は、原作には描かれていない存在であるということ。過去または未来に存在するゾルディック家の人間であるか、もしくは原作時間に存在しているか。

一説によると、世界は一つではない。樹木のように、一つの基となる世界にいくつも
の分岐点が枝葉となって存在し、それらが基の世界と並走するように同じ時間が流れて
新たな世界を更に創りだし分岐する。

その場合、彼の居た世界は原作の世界から分岐した平行世界となる。故にその世界は
私が知っている原作の世界とは異なる世界といえる。

第二は、彼は自分の居た世界が $HUNTER \times HUNTER$ の世界だと認識してい
ること。何かの因果である世界にトリップし、クルイールゾルディックとして生きるとい
う選択をしたという解釈。

第三は、一と二を合わせた存在という解釈。ゾルディック家で生まれた人間、あるいは
はその体に憑依した者であり前世の知識を持つ者。

いずれの解釈にせよ、彼がなぜこの世界に来たのかという疑問が生まれる。

この世界に自ら来たのであれば、目的を達した後は自らの力でこの世界を発つのだろ
う。目的を達していなくとも鬼に関する知識も十分に得ており、彼にとって窮屈な組織
に居続ける必要は無い。

ならば、彼は受動的にこの世界に来たと考える方が自然である。

敵または力の暴発などによって己の意志とは無関係にこの世界に飛ばされてきたの
であれば、元の世界に帰る方法を模索し続けているのかもしれない。

数多にある世界の中で、原作に登場していない人物（クレイ）がこの世界に存在していることは、この世界の万物にとつてはクレイの存在が必然であり呼び寄せたという解釈にならないだろうか。もしそうであれば、彼の周りで未来が変わることに納得はできる。

息を吐き、お茶を口に含み最期の疑問に思考を巡らせる。彼は、なぜ鬼殺隊に所属続けているのか。

——自らを餌に鬼を釣る。

クレイに初めて会った日、彼が言った言葉が頭に浮かぶ。

当時は、言葉の通り鬼を倒すと言う意味で受け取ったが、裏に違う意味が含まれていたのではないかと今更ながら思案する。

自身を餌にして鬼をおびきだす。鬼を積極的に狩る理由がないはずの彼が、なぜ誰よりも鬼を狩ろうとしているのか。

鬼を狩ることで彼にとってメリットがあるのか、もしくは狩るのではなく鬼の何かを必要としているのか。どちらにしろ、鬼には個体差があるために数を稼がなければならぬ。

——個体差。

バチツと、頭に電流が走ったように脳が一瞬にして活性化する。

鬼には個体差がある。鬼の共通項である不老、再生力、元は人間といったことを取り

除くと、人としての過去、鬼として生きている時間、人を喰った数そして血鬼術が残る。
——血鬼術。

念能力に近い異能。仮に、念能力を使っても元の世界に帰れなかったのであれば、最初に頼るのはそれに近い能力を持つ異能ではないだろうか。

つまり、彼は目的の異能を持つ鬼を探し出そうとしている。

鬼を使って元の世界に帰るために、鬼の情報が最も多く集まる鬼殺隊に所属し続けている。そう考えると辻褄が合う。

私は世界の存在に驚く。私が産屋敷耀哉として在ることに驚き、この世界に驚き、彼という存在に驚く。

私が想像しえない世界や事柄はまだたくさんあり、この世界はさらに変わることができるとは思えない。

未来は変えられる。

それができるのであれば私はそれを選択する。原作から分岐した平行世界、もう一つあったかもしれない話に変えてみせる。

物語を終焉に導くのは炭治郎であり、定まっている未来を変えられるのはこの世界の人間ではない。異世界の人間私たちだ。

未来の私が、過去となる現在の私を見て断罪するのもかもしれない。悲しい話だと言わ

れたこの世界を改悪する選択になるのかもしれない。

それでも、膠着状態の続いた戦いに無策で子供たちの屍を積み上げ続けるわけにはいかない。罵られてもいい。この体が呪いで朽ち果てた後も、未来永劫魂が呪われ続けてもいい。

全てが私の代で終わるのならば、その呪いを受け入れよう。

息を吐き、熱くなりかけた心を落ち着ける。

耀哉は鎧鴉に文を結び付け、不死川にクルイを本部に連れてくる旨を伝えた。

——私に念能力を教えてくださいませんか。

瞬間、目の前に座る男の首を掴み、折る。

それは想像に終わった。

念能力——。身体に宿る生命エネルギーをコントロールして身体の強化、老化の遅延、異能を操る力。HUNTER^あ×HUNTER^世では一般の人間に知られていない力。そしてこの世界では、クルイ以外誰も知るはずのない力。

耀哉がそれを知っていることに、クルイは思考を回転させ言葉を推し量らなければならなかった。

誰にも言った覚えはない。だが、誰に言うでもなく一人言を聞かれていた可能性はある。その場合の報告者は宇髄、不死川、鴉の2人と1羽に絞られる。

そのいずれも『念能力』の意味は知らない。言葉だけが先行し、意味を持たない音の羅列を報告したに過ぎない。

クルイはコテンと白々しく首をかしげ、耀哉に訊き返した。

「ネンノウリヨク、とは？」

「——念能力。肉体に存在する精孔しやうこうと呼ばれる穴から放出される生命エネルギーを操る能力。生命エネルギーは別名オーラともいう。念を使う者を念能力者という」

耀哉にしか見えない透明な辞書の中身を読み上げるように、淀みなく連ねた言葉にクルイは警戒の色を強めた。

「初めは天元の継子として見守っていた。藤の花を切つて選別に臨んだのも、通過後の『刀』の要望も天元と共に行動したからこそその知恵と知識だと思っていた。その見解が変わったのは、君の魔眼の報告を受けた時——」

微笑んでいた耀哉の眼の奥が刀の様に鋭く伶俐に変化する。

「クルイ、目に呼吸を集中させたのは、君の習慣がそうさせたのではないのかい。全集中・常中を体得した者は体の一部に呼吸を集中させ、止血や瞬間的な身体強化を図る事はある。でもね、それを常にしようと考える者はいないんだよ。天元から聞いたことは

あるだろう。人体に負荷をかけ続ければ表面または内部の欠陥を起点に徐々に負荷が進行し疲労破壊が起きる」

耀哉はクルイを見据えた。クルイの瞳に自分の姿は映っても心には映っていないように感じた。

肚の奥底に何重にも包んでしまい込んだ狂気が、久しぶりと這い出そうとするのを平静を装い抑え込む。

「クルイは何をしようと、何を見ようと目に呼吸を集中させたんだい。人よりも気配に敏い君が、何のために」

じわじわと秘密に近づいてくる耀哉に、クルイはため息を吐いた。ここまで推理シヨールを展開されれば、目の前の男が原点の世界もしくは HUNTER^あ×HUNTER^世からトリップしてきた人間だとわかる。

「そんなの、オーラを視るためしかないだろ」
吐き捨てた言葉には嘲笑が混じっていた。

「それだけじゃない。君はこの世界の間人ではない。別の世界、HUNTER×HUNTERの世界から来た。違うかい？」

「耀哉は勝負に出た。彼のいた世界の漫画のタイトルを言えば、反応次第で彼の正体が判明すると踏んだ。」

確信を持つ答えを事実と照らし合わせながら、確実にクルイの精神を刺突する耀哉に、クルイは狂気を感じた。

クルイは鋭刃な爪を伸ばした。この得体の知れない奴からどう情報を吐かすか拷問の準備をする。

「私を拷問しようか計算しているね。だがそれは徒労となるよ。私は、今クルイが知ろうとしているその話をするために、君をここに呼んだんだ。君は私に危害を加えたところで何のメリットもない。むしろデメリットしかない。今後一切鬼の情報を得られず、私を慕ってくれている子供たちからも追いかけられる」

「地獄の果てまで追いかけられそうだな」

「追いついた処が、地獄の果てとなるだろうね」

「地獄の使者は鬼ではないようだ」

まあ、どうせみんな返り討ちになるんだらうけど。

耀哉の言葉にクルイは伸ばしていた爪をひっこめた。

刀は入室前に預けている。武器がなくとも圧倒的な力でクルイは本部にいる人間を蹂躪できる。

それでもクルイは、大樹の様に悠然と座り続ける耀哉を拷問することはしなかった。傷つけても得はない、その通りだと自身の中で答えが導き出されていた。

「単刀直入に言う。オマエは何だ」

その言葉に出した時には答えは絞り込まれていた。先程までの会話に耀哉の真実は含まれており、クルイも態度で耀哉に答えを開示していた。

——念の知識、漫画のタイトル、さらりと使った外国語。

お互い、心のどこかで気づいてほしいという願望があつたのかもしれない。

「——転生者」

二人の声が奇しくも重なり合った。

空間が切り取られたかのように、景色は音を消し、ふわりと清浄な空気に生まれ変わる。

耀哉は生き別れの友に出会えたように深く頷き、クルイはあるかないか程度の笑みを顔に漂わせた。

こんな日が来るとは思つてもみなかった。隠していた真実が共有されるなんて。

瞼を閉じ、目を開く。目の前に座る男を目に映す。何度も見てきたはずなのに、今初めてそこに居る人間を目にした気がした。

「やつと、私を見てくれたね。……クルイ」

耀哉は笑った。どこか泣いているような優しい笑みだった。

「……それで、目的はなんだ。この先をノープランで呼んだわけじゃないだろ」

もちろん、と耀哉はゆっくりと頷き芯のある声を発した。

「2年後に、鬼舞辻無惨を殺す」

「へえ、頑張れば」

気のない言葉とは裏腹に、やはりそう来たかとの後の展開を予測する。未来を知る者の多くは、無駄だと受け入れるまで未来を変えようと奔走する。

組織のトップである耀哉はそれとは別に、組織の存続と利益を最優先に考え行動しなければならぬ。クルイの強大な力を利用して常に最善手を打ち、原作を改編するとう思考は想像に容易い。

味方の利用価値を最大限に引き出して利用する。組織最高位者としての戦い方であり、前線で戦えない体だからこそその戦い方でもある。

クルイは耀哉の立場をそこまで理解しながらも、その願望を叶える気はなかった。組織に従ったふりをして必要な情報が揃い次第離脱する。

仕事のようにビジネスライクの関係でありたいが、ここではそれは期待できそうにもない。己の思想を胸に掲げ、命が尽きるまで突っ走る、なんてことはしない。利用しても利用されるのはごめんだ。

「クルイ、察しの悪いふりをしないでいいんだよ——協力してくれないか。裏の言葉が聞こえてくる。」

微笑みを浮かべたる耀哉とは反対に、冷たい視線を向けながらクルイは心底嫌そうにため息を吐いた。

「原作は変えられない。重要なイベントの結末は決して変わらない。悪天候で交通の便が麻痺していたとしても、社畜が翌日の仕事に間に合うように全ての手段を使つて必ず目的地に辿り着くのだと同じだ。行き着くまでの過程は変わるが、結果は変えられない。労力の無駄だ。オレは原作の改変には手を貸さない。念能力も教えない。秘密を共有したところでだから何だという話だ」

「——胡蝶カナエは生きている」

突如、一定の音程で紡がれた一太刀がクルイの頬を掠める。

濃霧の中にいる姿の見えない敵を見定めるように、今までの話の流れとは一見関係のない話にクルイの視線が訝しくなる。

「——原作では、胡蝶カナエは先日の任務で殉職するはずだった。君は、原作を変えた」クルイの瞳が僅かに見開く。身体が情報を発しないようにトレーニングを積んでいくクルイをもつてしても、動揺を顕にするほどの衝撃を与えた。

原作を、変えた？　どんなにもがいても変えられなかった原作を？

クルイの中の幼い自分が問いかける。

……違うだろ。本当は本気で改変する気はなかったんだ。だってあの時まで未来を
変える念を創らなかつたじゃないか。

ソイツはそう指摘する。

分かつているからこそ、自分のリスクが最小限になる合理的な選択をしてきた。正しい
選択はその逆だと知ってるくせに。

ソイツはいつの間にか成長して、目線が同じ高さになっていた。

オレには力がある。だから今ココにいる。

「クルイには力がある」

張りのある声に、潜っていた意識がハッと浮上した。

——やめてくれ。

「君を災厄ではなく、神からの贈り物にしたい」

「頭でも湧いたか」

「鬼殺隊が壊滅する程の犠牲を払えば、私か次の代で無惨と相打ちできるかもしれない。
だが、そこにクルイが加われば、私の代で勝てるだけでなく被害も最小限に止まる」

——もう諦めたんだ。

「原作は、変えられる。クルイ、未来は未定なんだよ」

「そんなこと——」できるさ。クルイが言い切る前に、耀哉が否定の言葉を打ち消した。

「できるよ。カナエが生きているのだから。死ぬはずだった者が生きた。それは大きな変化だ。この変革の積み重ねが連鎖を起こし革命となる、と私は思うよ。意味は違うけれどバタフライエフェクトと名付けるかい？」

心地よい耀哉の声音に畳み掛けられ、心が溶かされていく。喉を掻きむしりたくなる程の望まないその感覚に、苛立ちが募る。

なんで……オレは、この世界の話を変えてるんだ。

いつしか本音が喉元までせり上がり、自己嫌悪に拍車がかかる。

暗闇と虚無の世界で光を求めて彷徨い続けた。何も見つからず、何も聞こえず、己で光を生み出そうと試みるがそれも適わず、何も見えない静謐せいひつな闇の中でただ一人立ち尽くすことしかできなくなっていた。それは力尽きて死んでも永遠に続くと思っていた。それでいいとも諦めていた。

それなのに、耀哉はクルイを見つけたし手を差しのばした。

手を掴みたいと思った。同時にこれは罨だと自分の声が囁く。

差し伸ばされた手の掴み方をクルイは知らない。掴んだ後に離されるぐらいなら始めから掴んだりはない。

家族以外は信用するな。イルミの声が頭に響く。

——オマエの味方は家族だけだ。他は望むな。

瞬間、体温がスツと下がり刃の上を歩くように揺れていた心がぴたりと止まる。

クルイは伸ばしかけた手を下ろし、拒絶を口にした。

「それは、ただの妄想だ。オマエの言っていることは、都合のいい情報だけを選択して話を作り上げたに過ぎない。本能的に浮かんだ最初の妥当な説明に飛びつき、それを支持するような信頼性を確かめてもないエビデンスだけを収集して根拠として張り付けているだけだ」

「原作ではカナエは死んだ。その鬼の能力もわからずに。だが、カナエは助かった。その鬼の特徴と能力の情報も得た。カナエの命を繋ぎ止めたのはクルイだよ。上弦の弐の情報を引き出したのはクルイと実弥だ。これだけでもクルイは運命を変えた人間だとはいえないかい」

クルイは俯きながら耀哉に言った。目にかかる前髪によってクルイの表情は読めない。

『今』、胡蝶カナエは『まだ』生きている。死ぬ運命ならば直に死ぬ。原作を改変したとは言えない」

原作を知らないが故に何がイベントだったのかが分からない。上弦と戦うことがイ

ベントだったのか、胡蝶が死ぬことがイベントだったのか。

「さつき言っていた『重要なイベントの結末は決して変わらない』ということかい」耀哉の問いかけにクルイは「ああ」と返す。

「人の生死はイベントではないよ」

耀哉は、瞳の奥に刃を構えてクルイを見据えた。

クルイもまた、暗く感情の無い目で耀哉を捉えた。

寂しい目だと思う。彼の言葉からして、前の世界では何度も原作を改変しようとしたのだろう。だができなかつた。その度に打ちひしがれて、傷を負って、自己嫌悪して……今の彼がある。

耀哉には、死神と呼ばれている男が暗闇の中で動けずに蹲る小さな子供に見えた。そして、彼にこんな体験をさせた残酷な神を恨んだ。

「クルイ、神はいると思うかい？」

「——神はいるさ……ただ、ひどく暇を持て余している」

クルイの皮肉に耀哉はふつと笑った。確かにその通りだと心の底から共感した。

「前の世界で、君は原作と大いに戦った。たった一人で立ち向かった」耀哉は立ち上がり、クルイの傍に膝を就く。「もう一度だけ力を貸してくれないかい。共犯となって、原作を壊してくれないかい。暇を持て余して人を娯楽に見ている神を、共に殴りに行かな

「いかい?」

優しい口調に反し、粗暴な言葉と獰猛な目の光にクルイは耀哉の本心を見た。その本心をもって、裏切られても信じてみたいと思えた。

「共犯か……悪くない……」

嗤いながらクルイは耀哉の手を握った。初めてできた共犯者に毒を吐く。

「呪いで死ぬると思うなよ。無惨を殺して、オレがオマエを殺す」

「それは楽しみだね」

春の日差しのように柔らかくも冷たく耀哉は微笑んだ。

12

——「生死に興味はない。だが喰われるな」

感情を映さないガラス玉の様な目に実弥は苛ついた。

事の発端は先日の柱合会議だった。

半年に一度、柱の位に就く者が本部に集まり、鬼の勢力など多岐にわたり議論する。

実弥は畳に座り、瞳を動かした。部屋の中にいる同僚の顔ぶれを見て舌打ちをする。鏖鴉からの便りの通り、前回までいた同僚は姿を消し、新たな顔が座っていた。

今回の柱合会議では柱の席が4席も空いた。9席中5席消え、1席埋まった形だ。現在、柱の位に就く者は実弥を入れて5人しかいない。

会議の度に人が変わる。同じ面子が揃うことはない。一人また一人と死に逝く仲間
に感情が揺れる。慣れることはない。その度に死なせてしまった兄弟子のくにか匡近の顔が
浮かび、自分の不甲斐なさと力不足に腹が立つ。

絶対に殺してやる。一匹でも多く鬼を殺してやる。優あしい奴つららが死んでいいはずが
ない。鬼さえいなければ今も幸せに生きていた。あいつらの過去だけでなく、幸せな未

来も奪った鬼が憎くてたまらない。

仲間を想い、目が血走り拳を強く握りしめる。

殺しても止むことのない鬼への怒りが溢れ出る。体の中を薙ぎ倒し、暴れまわるそれを
 実弥は腹の奥底へと叩きつけた。

——お館様が入られます。

涼しい声により、実弥は一度瞳を閉じて黙想した。

不死川玄弥（譯りたい者）の未来を守る。そのために生きて、一匹でも多くの鬼を殺す。

それが、迷わず一直線に進み続ける不死川実弥の鬼を狩る理由だ。

全ての報告を終えると、お館様は静かに微笑んだ。

「やはり、人口過密と鬼の能力には相関がみられる。人の多さに比例して鬼の力も強くなっている。それは、基礎体力や血鬼術だけでなく考える力、思考力も挙げられる。これは我々の衣食住、特に食生活の変化が大きく挙げられるのだろう。5年、10年どころか、文明開化により西洋の文化を取り入れてから人は外見も食べるものも変わった。人間の質が変われば人間を食す鬼も変わる。……悪い方向にね」

実弥は、目を伏せた耀哉の心情から思考を巡らせた。

過度な心配をさせまいとお館様は苦悶を表には出さないが、先程の見解から最悪な予測を立てていることは容易に想像できる。

つまり、今まで通りの鬼殺では近い将来限界を迎える。もしかすると自分達が気づいていないだけで、現状の拮抗状態はすでに崩れ始めているのかもしれない。

心臓に水滴を落とされたように実弥はぞつとした。部屋に居る同僚の数を思い出し、己の想像は思い過ごしではないと身を引き締める。

柱が5席しか埋まらないという現状がその縮図だ。

実弥は、周りに気づかれないようにゆっくりと息を吐き呼吸を整えた。

お館様は、柱も含め全隊士の更なる質の向上を考えられている。それを実現するには、まずは柱が隊士を鍛え直し、実力の底上げをする必要がある。それだけでも剣士達の平均武力は上方修正されるだろう。

だが、それでは柱の質はどうなる。柱には飛躍的な実力の向上方法が確立されていない。暗中模索し地道に刃を研磨し続けるしか方法はないのか。それとも鬼の殺し方を戦略や戦術を重視した方法に舵を切るのか。

実弥はそこまでの展開を予測し、耀哉の言葉を待った。

「だからこそ、皆にはこれより呼吸よりも上位の力——念能力を覚えてもらいたい」
呼吸よりも上位の力——。

瞳孔が開き戸惑いが顔を出す。

ネン……とは、何ですか。呼吸よりも上位の力とは何ですか。なぜ、そんな力があるんです。なぜもつと早く教えてくださらなかつたのですか。なぜ……今になって……そんなことを仰せられるんですか。

そんな力があれば、死んだ仲間は今も生きていたかもしれないのに。

爪の背でゆつくりと心臓を撫でられたように、胸がざわめき不快感が込み上がる。

死んでいった仲間や家族、助けられなかつた人達の死体が実弥の周りに横たわり、縋るように腕を伸ばしてじつと見つめている。

「——クルイ」

涼しくも強い耀哉の声に、実弥は夢から目を覚ました。

耀哉が部屋に居ない人物の名前を呼んだ瞬間、実弥の隣から気配が湧く。

実弥は反射的に距離を取り隣を見た。隣には冷淡な顔をしたいけ好かないクルイが座っていた。

思わず驚きで目が見開く。

初めからそこに座っていたように、クルイは髪一つ乱れていなかった。名前を呼ばれてから姿を現したようには、どうにも見えない。

隣には誰もいなかったと記憶を辿る。

クルイの気配の消し方がいくら病的に上手くとも、隣に居て察知できない程気配に疎くはない。

だが、得体の知れないこいつならば、呼ばれた瞬間に姿を現すか、気配を完全に絶つことも可能ではないかと頭の片隅で考える自分もいる。

——テメエは一体何者なんだ。

煙のように掴めないクルイに、分からないが故の苛立ちが蓄積する。

また実弥のみならず、他の柱もクルイの存在に驚愕の声を上げ、宇髄についてはその名を叫んでいる。

そんな異様な空気の中でも、クルイは何も感じていないように、淡々とお館様の言葉を淀みなく引き継いだ。

『念能力』とは、オーラとよばれる生命エネルギーを用いて戦闘などを有利にする独自の特殊能力のことを指す」

「アア?」

あまりにも簡素な説明にお館様の前でも苛立ちが零れる。説明する気があんのかとクルイを睨みつけるが、想定範囲内というように能面のような顔が冷笑するだけで、苛立ちを更に煽られる結果に終わった。

「体感した方が早い」言い終わると同時に、クルイから目に見えないどろりとした何か

伝わる。

不快な何かが波のように押し寄せ、以前にも体感した心臓を握られるような息苦しきを感じだす。

「動けば殺す」

ぴしりと、脳に直接命令を下されたかのように全身が固まり動くことができない。クルイの動作に、体が過剰に反応し汗が噴き出る。ただ座っているだけの奴に、今、恐怖している。迂闊に動けば死ぬ。震えそうになる手を握りしめ、叫び出したい気持ちを耐えるが、緊張から喉がひりひりと痛み、声が出せたとしても叫ぶことはできない。

鼓動が乱れ、命の主導権が握られる。

俺はまた、力が足りない。

次第に顔や頭が熱くなる。こいつは敵だと体が反応する。退け、と警告の鐘を全力で鳴らす。体が動かない。

己の弱さを痛感し、怯むことなく睨みつけるしか選択肢は残されていない。

「今、オーラを当てている」

クルイは髪を数本抜き、それを目線の高さまで持ち上げた。クルイが動く度に不快な波の動きが肌を絞めつける。

クルイが摘まんだ髪は、垂れていた状態から毛先へ向かって針の様に直立した。

クルイは微笑んだ。ほほ笑む、という言葉に似合わない程冷たい表情でお館様を見据えた。それは睨んでいるとしか思えない鋭い視線だった。

瞬間、ぞわりと嫌な予感がする。

絶対にこいつは何かやらかすと実弥の直感が働く。止めろッ!! と音のない声で叫ぶが、それは声となつて発せられることはなかった。

ゆつくりと、奴は腕を動かした。

予想通り、最悪なことにあいつは、髪針の毛を、お館様に、投げた。

ギンツ!! ——と硬い音が部屋に響きわたる。

「——クルイ」

清廉な声が背後から聞こえ、実弥の緊張の糸が切れた。

ハツと気づいた時には、実弥はクルイと対峙していた。右手には馴染み深い感触がある。いつの間にか刀を抜いていた。そこで先程の金属音は、刀が髪を弾いた音なのだと知った。

無意識だった。

気づいて、心が荒れる。

じとりと、全身から大量の汗が噴き出る。ドクドクと、耳元から鼓動が聞こえ肩で息をする。

「オーラを纏った髪を投げた。これを概ね念能力という」

何とも思っていないその声に、怒りで瞳孔が開き柄を強く握りしめる。

「理解した?」

小馬鹿にしたように薄ら嗤うクルイに、実弥の理性はぶち切れた。

「ブツ殺す!!」

地を這う声と共に眼光鋭くクルイを睨みつける。

こいつをブツ殺す。お館様を危険にさらしやがって。どんな理由があろうと絶対に殺す!!

湧き上がる怒りが蒸気となつて喉を焼きながらかけ昇る。

目の前に存在する生物クルイの考えが分からない。分かりたくもない。例えば、こいつの頭をかち割つて中を覗いたとしても、それを理解することはない。こいつがやった行動ことは、こいつを何回殺したとしても許されることではない。

「実現できない目標を立てても意味ねえよ。時間の無駄だ」

気だるげな視線をクルイは実弥から耀哉に移す。

「当てる気もねえし」その一言に、実弥の怒りが限界を超えた。

「ア、ア？」

お館様を傷つけるつもりは無くても危険にさらした事実が変わらない。しでかした事の重大さを理解していないクルイに、実弥は湧き上がる憎悪の渦を巻く。

自分を中心に台風が発生し、周りに怒りを撒き散らしているのに頭の中はひどく冷静だった。冷静に、目の前の人物をどうやって斬り殺すか算段していた。

「テメエ……自分が何言ってるのかわかってんのか」

「オマエも、何言ってるのか分かってるわけ。一時的な個人の感情で全体の利益を潰してどうすんの」

「実弥、クルイ。止めなさい。皆も座りなさい」

「お館様アツ!!」

「落ち着きなさい」

強く、これまで聞いたことのない有無を言わさない耀哉の声に部屋が静まりかえる。

クルイから発せられていた不安を煽る波はいつの間にか消え、呼吸がしやすくなっていた。

視界が開け、実弥はクルイを見据える。実弥以外の柱はクルイを囲み殺気を向けている。

「実弥、身を挺してくれたこと感謝する」

「……ありがたきお言葉を頂戴し、恐縮至極に存じます」

クルイへの怒り、お館様からの言葉に感情が乱れ声が震える。

「クルイ、憎まれ役を演じる必要は無い。念能力が危険な力であることを皆に理解してもらうために私を選んだことは理解している。念能力を使えば、ただの髪でさえ十分な凶器となることを証明してくれたのだろう。だが、軽率な行動であり言葉足らずであったのは事実だ。猛省しなさい」

「スミマセンデシタ」

口先だけの心のこもらない投げやりな言葉に、実弥の苛立ちが増大する。今すぐ斬りたい衝動を抑え、視線でクルイを刺し殺す。

耀哉は全員に再度着席を促し、話を念能力に戻した。

「皆にはこの『念能力』を身につけてもらう。そして今後、柱になる条件にこの念の習得も追加する」

「失礼ながらお館様、それではクルイも柱になるということでしょうか」

宇髓の言葉に、実弥は血走った眼を宇髓に向けた。

ふざけたこと言っつてんじゃねえぞこの野郎。

「天元、残念ながらクルイには今後でも甲位に就いてもらう。それはクルイの希望でもある。そのかわり、クルイの一族に伝わる秘術、念能力の指導をクルイに一任する。今後、

柱に就任した者も念に關してはクルイを師範とする」

「それは甲位までは念能力の存在を秘匿するということでしょうか」

「秘術だからな」

「テメエには聞いてねえよ能面野郎」

「それが、クルイが鬼殺隊我々にこの力を伝授する条件なんだ」

憂いに沈んだ耀哉の目に、実弥は耀哉がクルイと交渉した様子を想像し胸が締めつけられた。

「主人公、竈門炭治郎かまとたんじろうは、鬼舞辻無惨に家族を惨殺され、唯一生き残った妹も鬼となる。

兄妹は旅をしながら妹を人間に戻す方法を探す、というストーリーなんだ」

「原作の概要じゃなく知ってる内容を話せ」

「胡蝶カナエが上弦ノ弍に殺される。先にも述べた通り、竈門炭治郎は鬼舞辻無惨に家族を殺され、妹は鬼となる。炭治郎は妹が人を喰わないように見張りながら、人間に戻す方法を探すために鬼殺隊に入隊する。入隊後、彼はすぐに鬼舞辻とエンカウトする。場所は確か、浅草だったかな。後は、十二鬼月を最も殺すのは鬼殺隊ではなく鬼舞辻ということ。私が知っているのはこれくらいだよ」

「……」

「私はこの漫画を熱心に読んでいなくてね。原作知識はあまりないんだ」

「それは『無い』って言うんだよ」

「だけど無知ではない」

「ああいえばこう言いやがって」

十分な情報だよ、耀哉の爽やかすぎる笑顔にクルイのテンションは降下した。付き合いが浅くともこれから耀哉が碌でもない計画を言い出す気配を察知する。にこにこと笑顔を振りまきながら主張を押し通す姿を想像し辟易した。

「竈門炭治郎は入隊して間もなく鬼舞辻に遭遇する。つまり——」

「竈門炭治郎を尾行して鬼舞辻無惨を殺す」

その通り、口元だけ笑みを浮かべて耀哉は頷いた。

物語の過程を吹っ飛ばし、鬼舞辻無惨を殺す。主人公の成長を見守りながら物語の順を追って終盤で殺すのではなく、遭遇する時期を知っている序盤に照準を絞る。登場人物の成長など鑑みない物語を奪う計画。

正確には、原作知識が無いからこそ好き嫌いの感情に左右されない合理的な判断。

耀哉の計画は『重要なイベントの結末は決して変わらない』の極地なのかもしれないと、クルイは考えた。未来の一場面ごとを改変するのではなく、主人公が踏み出した一

歩目から先の道を切り取り、いきなり終盤に繋げる暴挙。

それが、産屋敷耀哉が導き出した伶俐な戦略。

真つ黒い目でクルイは耀哉を見据えた。何を考えているのかわからない眼は、前の世界で仕事をする時の顔つきだった。

「それが2年後」

「アサクサ作戦と称している。だからこそ、取引をしよう——」

目の前に座るエゴイストに主導権を握られないよう、クルイは思考を働かせた。

話しを進めるにつれ、クルイは用意周到すぎる耀哉の執念に呆れと既視感を感じた。

産屋敷耀哉は、恐らく当主となる前からこの計画を立てており、何年にも渡って笑顔の下で餌を撒いてきた。そうやって時間をかけて周囲の人間の心を掴み味方にしてきた。

だが、いくら味方を増やし組織を改革しても計画の決め手に欠けていた。期限が迫る中、耀哉はとうとうクルイを見つけた。

不利な戦況をひっくり返す念能力カを引っ提げた都合のいい存在が、目の前に現れた。

「これからよろしく」耀哉が手を差し出し、握手を交わす。条件を出し合い駆け引きをしながらも契約は締結した。

ふいにクルイは耀哉の手を引つ張り、前に倒れかける耀哉の目を猫の様にじつと覗き込んだ。

——その涼しい顔がどう変わっていくのか見てみたい。

頭がイカれている産屋敷耀哉にクルイは執着し始めていた。

「どうかしたのかい？」

「別に」

視線を外し、部屋を後にする。久しぶりに湧くどろりとした感情に、クルイは口端が上がった。

——体のいい駒になってやるから上手く使ってみろよ。

使えるものを使ってどんな戦局を生み出すのか、産屋敷耀哉がどうなるのか、クルイは人知れず想像し高揚した。

空気を求めて海面から顔を出すように、クルイは記憶の海から浮上した。

瞳を開けて5人の柱を目に映す。身体や表情から情報を読み取るまでもなく『念を習得する』という個々の強い思いが伝わってくる。

そんな5人の気概を目にし、クルイはため息を吐いた。

何でこいつらはそんなに力を求めているんだっけ。

そう思い始め、一度瞳を閉じる。視界を閉じることでその存在を拒絶し、思考の中にまで入り始めた存在を消す。

手に入れようとしている奴らは、手に入れてない奴らなんだから無いものを求めて当たり前だろ。

そう勝手に結論付け、クルイは念について考え始めた。それは芽生え始めた個々人の興味を摘み取っている様だった。

クルイが念能力の修業に携わったのは、ゴンとキルアの発^{ハッ}の修業が最後である。

あの時の様に、クルイは原点の世界と前の世界で得た念の知識を全て教えるつもりはない。そもそも念能力自体が脳のように全てを解明されていない。テストの様に知識量を点数化して測ることができない現状をクルイは逆手に取り、誰もが知っている浅い情報のみを口にした。

念は未開拓の地だ。故に、常に研究し新しい情報を活かす者が優位となる。そんな開拓の知恵と知識を手放しに教える程クルイは優しくない。身内でもない人間に、正しい情報を全て教える気など初めから無い。

産屋敷耀哉との契約の一つに『念能力を教えること』が交わされている。細かい規約の無いその契約の穴をクルイは鋭利に突く。

念能力において想像力は鍵だ。特に発においてはその力は絶大となる。思考する生物の力は、感情と能力が一体となった時に全開して発揮される。念において感情と能力の元となる思いと想いは底が知れない。

これまでに対峙した念能力者の能力を思い返し、クルイはため息を吐いた。柱達に突飛な能力を生み出されると不都合だ。呼吸とかけ離れた能力を生み出されて他の者に見られた場合、念を秘匿することは不可能となる。

念に関する情報は全て手中に収め管理する。それ故に虚言を混じえて力を制限し監視する。自分以外、正しい念能力の知識なんて持たなくていい。例えば鬼に喰われたとしても、蟻のように鬼が念能力を手に入れたとしても、発の威力を最大限発揮でない程、嘘の情報で力を制限する。

鬼との勝敗よりも、クルイにとっては念能力の方が価値が高い。

——常に最悪な状況を予測して動け。
過去のイルミが忠告する。

——もしかすると、なんて希望を抱くな。

分かってる。期待は捨てた。両手は絶望で埋まっている。産屋敷耀哉にも期待はない。世界に期待するほど無知ではなくなつた。前の世界で血反吐吐くほどそれを学習した。

念能力ではない限り、人の行動は変えられない。変えられるのは、自分の期待値だけだ。

これから教えるのは、心源流でもゾルディック流でもなく、エゴで制限した念能力擬きだ。

クルイは再度5人を見渡した。すつと息を吸い、この世界に来て初めて声を張った。

「生死に興味はない、だが喰われるな。喰われた養分は鬼を成長させる。最悪、鬼が念能力を身につける」

「ア、ア？」

「よもやー！」

「それでも死ぬ時は死ぬ。よって念を習得した後、一人ずつ死体回収の隠を常につける。

『お館様』の了承も得た」

「よもやー！」

「テメエ!!」

鳥の目の様な目をした奴を皮切りに柱が各々の反応をする。

クルイはそれらを一瞥しながら紙芝居を取り出した。それは口下手なクルイのために耀哉が作成した手書きのものだった。

「念能力の基本は纏テン、絶ゼツ、練レン、発ハツの四大行からなる。纏で体の周りにオーラを留め、絶で

自身のオーラを絶つ。練でオーラを練って生み出し、発でオーラを自在に操る」

「おい、ちよつと待て」宇髓が口をはさみ、聞きなれない言葉を消化する時間をつくる。「それじゃあクルイ、お前が柱合会議にいても誰にも気づかれなかったのは」「絶だ」

チツ、と実弥が舌打ちと共に鋭利な眼でクルイを睨みつける。

呼吸の他に念能力という強大な力持っていないながら今まで秘匿にしていたクルイに、実弥は怒りの一歩手前、どうしようもない苛立ちの解放を求めて出口をさ迷っていた。

苛立ちは怒りの前段階だ。そして怒りは期待の裏切りから生まれる。自分で勝手に期待して、それに応じなかった相手に勝手に怒りはじめる。

実弥は、隊の中ではクルイと多くの時間を共にし、クルイを知っているつもりであった。だからこそ、クルイが呼吸以外の特殊な力を持つていたことに胸を突かれた。

実力のあるやつだと知っていた。ただ純粹に、あの強さは呼吸だけのものだと勝手に思っていた。自己研鑽し続ければクルイの強さ領域に到達すると信じていた。それが、根底から間違っていたことに実弥は裏切られたように感じた。

冷めた心境で実弥の殺気を受け流しながらクルイは紙芝居を読み続けた。

——本当、オレに何を期待してたんだか。

紙芝居をめくると耀哉に似た絵が纏をしている。クルイは柱5人を横一列に並べて

手を突き出した。

「最終的には呼吸と発を融合させ、各呼吸の型の威力を劇的に向上させる。そのために、まずは纏を習得してもらう。常中と似たようなもんだから」

「できんだろツ」邪念をもつて全員の精孔しょうこうを無理やり抉じ開ける。

ドンツという風圧と共に5人のオーラが蒸気のように勢いよく放出され、戸惑いや威圧的な声上がる。

いったい何人が生き残るのだろうか、クルイは機械的に観察しながら紙芝居に書かれている文章を読み上げた。

閑話

9. 5 入隊から2年後の鍔兎と義勇 前編

夢ならばどれほどよかつただろう

——出てきてくれよ？

助手鬼は蠱毒こどくの笑みを浮かべた。道端に落ちている壺の中に人間を放り込み、
じゅうにぎづき
十二鬼月・上弦の伍、玉壺ぎよつこを呼び出した。

玉壺の旦那と土産の人間を喰いながら鬼の能力について話す。旦那を見つけ出すのは随分と苦勞した。何せ同じ鬼なのに気配がわからない。気配の消し方が童磨以上にうまい。

「なあ、旦那は壺から壺へ一瞬で移動できねえのか？」

「口を慎めたわけめ。そのようなこと、この玉壺には造作もないわ」

「本当か!?! すごいな、漬け物みてえに夢が詰まつてるじゃねえか」

「例える言葉が漬け物とは気品の欠片もない。美しい私にふさわしい言葉をお前は持ち

合わせておらぬのか」

上から目線で物を言う高飛車な旦那にニツと笑う。いつか黴の生えた糠床を詰めてやると心の中で決意する。

「ま、実際に詰まつてるのは玉壺の旦那だけだな」

「魚や蛸もいるがな」

「それも旦那じゃねえか。糞よりはましだがな」

「きざいまー」

旦那が凄むと同時に濃い瘴気が辺り一面に充満する。体がガタガタと震え冷や汗が止まらない。上弦の伍の瘴気だ。鬼になったばかりの体では耐えられない。

瘴気が濃すぎて息ができず、次第に視界が霞だす。くそつ、と悪態をつき、瘴気一つとってもあまりの実力差に悔しさが込み上がる。格の違いを見せつけられるというよりは、違いを見せつけられる以前の問題だった。

旦那は格を見せつけようとすらしていない。

それでも怯んでいるだけではいられない。弱さゆえの反骨精神を表に出して余裕を見せる。

「すまん、冗談だ。でも壺から壺へ移動できるつてのは、旦那はやっぱり強いな」

旦那を称賛し持ち上げる。気分良くした旦那は瘴気を解き、緊張から体が解放され

る。

旦那は承認欲求が高いのだろう。利用するには持ち上げて掌の上で転がす方法が適している。

長い年月をかけて馬鹿みたいにただ人間を喰ってきただけの旦那を嗤う。

長く生きていてだけで新しいものを取り入れようともしない思考が止まった老害を引きずり下ろしてやる。

助手鬼は指を折り曲げ、玉壺の良いところを挙げていった。

「近距離攻撃は旦那自身が戦えるだろ、化け物や魚を呼び出す蛸壺攻撃で中距離もいけるだろ、よく知らんが遠距離だろ、後は毒だろ、雅なことは知らんが壺も高く売れそうだ」

「美しく気品にあふれ優雅に満ちていると言えぬのか。まあ、貴様程度には私は過ぎたものよのう。今夜は共にいることを誇るがよい」

旦那は胸を張り、もつと褒めろと待ち構えている。

「ああ、すごいことだ。さすが無惨あのお方様の特別だ。ちなみに聞くが、旦那は分裂することもできんのか？」

「……どういう意味だ？」

「旦那が自分を何等分かに分けて存在するんだよ。例えば、今旦那は上弦の伍の力を

持つてるだろ。これからもっと人間を喰ってさらに強くなる。その強くなった分を切り離してもう一人の旦那を作る。その旦那ももっと人間を喰って強くなつて今の旦那と同程度の力になるように力をつける。その旦那がさらに分裂してもう一人の旦那を作つてこれを繰り返す。旦那が能力で化け物を生み出すのと同じように能力で旦那が旦那を作れたら強いんじゃないかねえかつて思つてな。単細胞生物が分裂していくやつだな。旦那を殺そうと思つたら分裂した回数旦那を探して殺さなきゃならねえつてやつだ」

「旦那しかできねえと思うんだ」——その一言に旦那は喜色を満面にした。

「それは面白い」

「そうだろ。そしたら旦那最強じゃねえか。あのお方もより一層旦那を重宝するはずだぜ」

その後もとりとめのない話をし、それぞれ暗闇の中へ姿を消した。

十二鬼月・上弦の伍、玉壺の感触は上々である。

あれならうまく転がせられる。

まあ、本当に聞きたいことはまだ聞かない方が良いだろう。体が朽ちても魂だけで生きられるかなんて思いつきもしねえだろうな。魂を分裂させて物に残留思念を封じ込める。年月はかかるが人間の生気を吸い取るもしくは乗っ取ることができれば生きながらえるはずだ。だがそれは無惨様の目的じゃない。踏み込むのはまだ先になる。

頸を斬られても生き残つてみせる。
鬼の限界はどこまでなんだろうな。

——旅人が美しい壺を拾った。旅人はその壺を骨董屋へ持つて行き金に換えた。

「こんにちは」

「はい、おおきに」

骨董屋に一人の青年が顔を出す。身なりは整つており、それなりに裕福な家の人間であることがわかる。

青年は店の中へ入り、辺りを見渡した。

「あのー、なんか良い壺ありますか？ 今度客が家に来るので飾り物として新調したいのですが」

「そんなら坊ちゃん、ちょうどええところに来はったわ。ちょうど今朝、上等な壺を入れたところなんやわ」

青年に旅人から買った壺を見せる。

壺の見た目は美しく、大きさも丁度良い。銘がないことで価格は高くはないが、古くからの技法が取り入れられており、嗜好品としては充分である。

青年は壺と価格を見比べながら頷いた。

「じゃあ、この壺をお願いします」

「まいど、ありがとうございます」

店主は頭を下げ、店先まで青年を見送った。

青年は骨董屋を後にし、壺を抱えて歩き出した。

名は櫻 物の見事に 散る事よ

町の入り口で二人の少年は再会した。一人は口元に傷痕があり、オレンジがかつたピンク色の髪をしている。意思の強い目と凛々しい佇まいは、彼の厳格さをより一層表していた。

もう一人の少年は、人形の様なきれいな顔立ちをしており、少々硬そうな黒髪を後ろで一つに縛っている。先程の少年よりも幼く見えるのは、丸く大きな目のせいなのだろう。

う。

「義勇^{ぎゆう}、2年ぶりだな。怪我はないか」

「錆兎^{さびと}！ ああ、大丈夫だ。錆兎も怪我はないか」

「変わり無い。最終選別を突破した後はすぐに隊に別れたからな。今日組めるのが楽しみだった」

「俺もだ」

錆兎の変わらない態度に義勇は口元が緩む。錆兎とは鬼殺隊に入る前に同じ師の元、共に修行に励んだ。

入隊してからは会っておらず、今回の任務で初めて組む。

会えなかった分の成長を錆兎に見せる良い機会であり、錆兎の成長もまた間近で見ることができたため、義勇もこの日が待ち遠しくてならなかった。

97代目鬼殺隊当主、産屋敷耀哉の功績の一つに、鬼殺の剣士の長生が挙げられる。

鬼殺の剣士は短命だ。入隊直後の剣士を筆頭に、柱以外の剣士の命は鬼との戦いによつて瞬く間に散っていく。故に剣士は常に人員不足であった。

最終選別を通過した者を入れたとしても、新規入隊者における1年間の生存率は10%以下であった。10人入隊したとしても1年間生き延びる者は1人である。その1

人でさえ、次の年まで生き残るかは不明である。

その原因は主に知識、技術、経験不足が挙げられる。新入隊員の鬼に対する知識、剣技は修行時の師匠、育てにより差が生じる。更に、最終選別を通過した後は、一人前の剣士として誰からのサポートもなく一人で鬼を滅する。

耀哉はこの事実には涙した。よって耀哉は新米剣士の長命に尽力した。

鬼殺隊の勢力は、改革しなければ衰えることは明白であった。質の良い組織を維持するためには、まず新人を育て戦力を底上げしなければならぬ。

だが、時間、戦力、心に余裕がない中で人を育てることは困難である。それ故に耀哉は前世も含めあらゆる知識を総力して改革に臨んだ。

耀哉は入隊直後の隊員を対象に2年間の小隊制を導入した。ひのえ丙きのえから甲までの上位二位の剣士が新人剣士を最低一人、最大三人まで受け持つ教育制度である。

これにより、新人剣士の1年間における生存率は飛躍的に向上し、鬼の情報や戦術も共有されるようになった。また、知力、体力、精神力も向上し、呼吸が合っていない者は他の呼吸を紹介され実力を上げていった。

高位の剣士には後輩の命を預かる責務、チームとしての戦術の見直しが要求されスキルアップへと繋がった。表向きは新人剣士の教育だが、裏では高位の剣士の実力の向上も兼ねている。

甲に位置する剣士であっても、鬼を50匹もしくは十二鬼月を倒せず昇格していない、昇格する気のない剣士は存在する。そんな彼らに耀哉は機会を与えた。条件を満たさずとも研修が終わった後、継子もしくは柱となる可能性があるということ。

この制度により、各階級に属する隊士の層、柱の継子受け持ち率は上昇し、戦術の幅も広がった。故に現在、鬼殺の剣士の数は過去最高に達している。

これが、戦うことのできない産屋敷耀哉の一つの闘いだ。

義勇、と名前を呼ばれて隣を見ると、鎗兎は真剣な表情で言った。

「俺は柱になる。柱になってより多くの人を助ける」

鎗兎の決意に義勇も頷き、同意を示す。

「俺と義勇で、最強の水柱になろう。俺たちの命は、色んな人が命を懸けて繋いでくれた。託された未来をこれからは俺たちが繋いでいこう」

差し出された手と言葉に、昔を思い出した。

修業時代に鎗兎と喧嘩した時だ。原因は忘れた。だが、いつのまにか心の奥底に燻っていた昏い過去を鎗兎にぶちまけていた。

姉は、鬼に喰われた。祝言を挙げる前日に鬼に喰われた。俺を庇って死んだ。両親が死んでから自分を犠牲にして育ててくれたのに、幸せな生活が待ってたはずなのに、俺

は姉を犠牲にして生きてしまった。だから「姉さんの代わりに死ねばよかった」と錆兎に吐き出した。

その直後だ。錆兎に頬を叩かれ、諭されたのは。

目が覚めた瞬間だった。

生を肯定され、少しだけ自分を許すことができた。

錆兎は、過去を見続けていた昏い目を現在に戻してくれた。姉の想いとこれからの生き方について説き、俺を救ってくれた。あの時からずっと、錆兎は眩しい。

「だから、お前も絶対死ぬんじゃない」

差し出された手を強く握った。目頭が熱くなりツンとしてくる。潤んだ目を見せたくなくて、隠すように茶化した。

「……錆兎、柱は9人だ。その内2人が水の呼吸になるが、良いのだろうか？」

「9人で駄目だったら10人目の柱になればいい。多くの人を救い、誰も文句を言えない程強くなればいい」

「わかった」

発した声は湿り気を帯びている。握りしめた互いの手には涙が落ちた。

俺は錆兎を見て何度も頷き、夢ではなく目標を口にした。

「二人で最強の」

「柱になる」

声に出すことで明瞭な目標となる。言い終わると、お互い同時に笑った。

「ところで義勇、俺はこの任務の後水柱の継子になる。研修の時に先輩が継子に推薦してくれたんだ。この間水柱にも認めてもらった」

錆兎の一言に目が開く。さすが錆兎だと思っ自分と、意味が分からないと思いを停止する自分がいた。

錆兎が畳み掛けて何か言っているが、一つも頭に入っていない。

共通の目標に向けて一斉に走り出したはずなのに、錆兎は最短の道を走っていた。俺はその道を選ぶことはできない。

錆兎は苦笑しながらも視線をひたと据えてきた。

「義勇、俺は一步先に柱へ近づいた。だからお前も早くこい」

「……必ず、追いついてみせる」

徐々に悔しいという思いが込み上げてくる。

絶対に追いつき、追い抜いてみせる。互いに背中を守り合う存在になってみせる。

義勇は静かに闘志を燃やし、錆兎と共に歩き出した。

鎧鴉が案内した町は、商人たちの声が響き渡る活気に満ちた町だった。

鎧兎と義勇は町を歩き回るが、鬼の痕跡どころか手掛かりすら掴めずにいた。町の治安も非常に良く、滅多なことがない限り、争い事も起きないそうだ。

だが、それを伝えても鎧鴉はこの町だと躍起になる。烏の情報網を甘く見てはならないと重々承知しているが、鬼の痕跡どころか人が消えた噂すら無い。

ひねくれた考え方になるが、挙げるとすれば、この町の治安があまりにも良すぎることにしかない。

「鎧兎」

「わかっている。町がきれいすぎるな」

鎧兎の目も同じことを語っている。

この町に鬼は居る。それも痕跡を残さない程の強い鬼が。陽が昇っているうちに手掛かりを見つけないければ、犠牲者が増えるだろう。

鎧兎も同様のことを懸念しているのか、凜々しい顔を引き締めて鬼の気配を探っていた。

「義勇!!」

突如、ゾワリと背筋を撫でるような悪寒が走る。周りを見渡し気配の元を辿ると、壺を抱えた男が一本前の通りを歩いていった。

隣にいた錆兎は既に走り出し、俺は周囲を確認してから錆兎の後を追った。

先に走り出した錆兎は、男を地面に押さえつけていた。二人の周りには男の荷物が散乱し、道行く人が目を丸くしている。喚き暴れる男を錆兎は難なく拘束し、尋問していた。

「いきなり何すんだ!! くっそ! 離せよ!!」

「単刀直入に言う。お前は鬼の協力者か。鬼はどこに居る」

「はあ?! 何わけわかんねえこと言ってるんだよ!! 鬼とかなんだよそれ! 知らねえよ

! どけよクソガキ!!」

今の男からは、鬼の気配は感じられない。

俺と錆兎は目を合わせて一緒に首を傾げた。

錆兎、義勇と青年はお茶屋で団子を食べていた。いうまでもなく、手荒なことをした青年へのお詫びである。錆兎は青年の向かいに座り、机に額を擦り付けた。

「本当にすまなかつた」

「ああ、本当にな」

青年はぶつきらばうに返し、団子を次々と頬張っていく。見たところ、青年は二人よりも年上の様である。

義勇は青年を観察しながら、錆兎の行動を感心していた。

青年を鬼の協力者と間違えたが、自分の感覚を信じ、話を聞き出そうと詫びと称してお茶をご馳走している。

そんな転んでもただでは起き上がらない錆兎に、義勇は尊敬の眼差しを送った。

「この町は平和だな」

ぼつりと錆兎が青年に言った。言外に平和すぎると含みがあることを義勇は理解した。

鬼の協力者がどこに潜んでいるのかわからない状況で、お前は鬼の何なんだと直接聴くのは危険だからだ。

錆兎の言葉をわかりやすく青年に伝えるにはどうすれば良いのか義勇は考え、口にした。

「水清ければ魚住まず……」

「あ？ 急にどうした……」

鎗兎の意図を汲み取った脈絡のない義勇の一言に、青年の顔が引き攣る。

——こいつもヤバイ奴だったか。

「水があまりにも澄みきつてしていると魚が住みつかないように、人も高潔すぎると人が寄り付かず孤立してしまうという意味だ」

すかさず鎗兎が義勇のフォローにまわるが、青年が聴きたいことは故事の意味ではない。

二人の天然ぶりに青年は次第に苛立ちが募る。

「んなことわかってんだよ。何で急にそれを言い出したって言ってるんだよ！」

「おそらく義勇は、この町は澄みきる水のように治安が良く、後ろ暗い輩は一人もいないんじゃないかと言いたいんだ。見栄えが良すぎてよそ者には少々息苦しい。町を見て周ったが、現に争いごともない輩も浮浪者もない」

青年の眉がピクリと動く。そのまま遠慮なく団子を食べ続けながら青年は素っ気なく返した。

「意味を凝縮しすぎだろ。使い方もへたくそすぎるわ」

口の中にある団子を呑み込み、青年は話し出す。

「……でもまあ、あながち間違っちゃいないですけどね。この町は縁無様に守られてるから」

「エンム様とはなんだ？」

「この町の土地神様ですよ。この町は賑わつてる分、昔は荒くれ者も多くて危なかつたらしいんですよ。実際、大通りから一本細い道に入ると薄暗いですし。うちのばあさんがよく口にしていましたよ。『薄暗い場所には薄暗い人間が後ろ暗いことをしている』つてね。だからその分、昔は不条理にいろんなものを奪われる人が多かつたらしいです」

「その話、続けてくれないか」

錆兎の言葉に義勇も頷く。鏝鴉の言う噂はこの話かもしれない。

青年は暖かい茶を啜り、一息ついて話を続けた。

「縁無様の話は、祖父母が幼い頃から町に広まつたらしいのでそこまで古くないんですよ。」

権力のある人が、気に入らない者から全てを奪つたそうです。お金、家、婚約者、ありもしない噂を立てて人徳も命も奪つたそうです。

奪われた人は川に身投げし、その遺体を見た婚約者は、後を追つて夜中に井戸で自殺を凶ろうとした。そんな時『いい夢を見せてあげよう』つて声がしたらしんですよ。女は事のあらましを井戸に話し、『権力者の苦しむ姿が見たい』と言つたそうです。夜が明けると、権力者とその一族郎党死んでたそうです。

その死に方はあまりにも猟奇的で、獸に喰い殺されたように悲惨だつたらしいですよ。女はそれを見て狂つたように笑い、翌朝同じように悲惨な姿で死んでたそうです。

悪い縁は全て無に。そういう意味を込めてこの町では縁無様と呼び、治安の神様として祀つていられるとか鎮めていられるとか、そんな微妙な位置ですね」

青年は茶を再び口に含み、吐息と共に考えを吐き出した。

「さつき、この町は平和だつて言いましたよね。それつて、平和すぎて怪しいつてことですよ。何かあつても町全体で隠してゐるんじゃないかつて」

義勇は目を細めて青年を見た。彼は鋭く賢かつた。

鎗兎は思案し、義勇に視線を送つた。彼を協力者にする。視線からそう聞こえてきて義勇は頷いた。

その通りだ、と鎗兎は強い視線で青年を捉え、先程の言葉を肯定した。

青年は何か言いづらそうに視線を逸らす。

「僕、この町がちよつと気味悪いんですね」

「……………どういふことだ」

「家無し……………浮浪者を筆頭に人が消えていくんですねですよ」

青年は目を伏せ、自嘲気味に言葉を続ける。

「僕の家はちよつと大きな商売をしてるんでね、その勉強の一環で町の状態を常に観察

してんですよ。流行とか、何を売れば人は買うのかとかね。その中で少し前から気になってたんですよ。あー、人が消えてるなって。橋の下とか誰もいないでしょ。一週間町に滞在するって言っていた旅人が、次の日から姿が見えないこととか何回もあるんですよね」

「誰も何も言わないのか？」

義勇は思ったことをそのまま口に出したが、青年はより一層顔を歪めるだけだった。

「誰も困ることじゃないので言い出す人なんていないですよ。むしろいなくなることで治安は良くなる。浮浪者同士の抗争とかもなくなりますしね。よそ者のことは、もつとどうでもいい」

「その守られた治安が、お前達の言う土地神様のおかげなのか」

青年は苦笑した。

「おかしなことに、みんなそう言ってる」

義勇は、青年の横に置いてある壺を見たが何も感じなかった。錆兎に目を向けるが、錆兎は瞳を閉じて顔を左右に振るだけだった。錆兎も今は何も感じていないらしい。

錆兎は感覚が鋭い。ほんの僅かな殺気でも敏感に感じ取る。それは鬼の気配であっても同じだ。元より優れていた感覚が、最終選別を終えてより一層磨き上げられた。

俺と違って、正式にあの試験を突破したのだから当たり前なんだろうが。

だからこそ、義勇は青年を見て真つ先に走り出した錆兎の感覚を否定することはしなかった。

錆兎は未だ壺に視線を向けている。土地神様の話も気になるが、壺の方を優先したいようだ。

義勇は錆兎の気持ちを慮り提案した。

「錆兎、俺は土地神について調べる。壺は任せた」

「すまない、助かる」

錆兎は青年の目をひたと見た。目力のある錆兎に見つめられた青年は、たじろぎ視線を逸らす。

わかるよ、その気持ち。錆兎の眼力は強い。だが、目を逸らすのは平伏するのと同じだ。

義勇はお茶を啜り、青年の負けを確信した。

錆兎は机に身を乗り出し、青年の目を見据えて追撃した。

「今夜、その壺を見張らせてもらえないか」

「あー……、いいですよ……」

有無を言わせない錆兎の圧力に、青年は顔を歪めた。

——妖怪と神は本質としては等価だ。だが人々は別の意見をもつだろう。真実を知れば。

なにが寂しくて僕は錆兎少年と夜の河原で夜を明かさなければならぬのだろうか。字面だけ見れば、なにかいかがわしいことをしようとしているように見えるが、実際はそうではなく、ただ僕達は壺を前に腰を下ろし、壺を睨み続けているのだった。

いや、もつと正確に表すならば、僕の隣に座る錆兎少年は壺を睨み続け、僕は半目になつて壺を眺めている。そう、この時間は僕にとって実につまらない時間なのである。

「なあ、家で見張っていた方が良いんじゃないか」

口調もよそ向けの口調から雑になつていく。彼らに気を使うだけ無駄である。無駄なことをして疲れるのは馬鹿げていると僕は常々思っている。

言葉通り家に壺を持って帰つて二人で睨み続けるか、壺を置いて自分だけ家に帰るか。どちらにしても帰りたい旨を錆兎少年に伝える。

「家族が喰われるぞ。喰われてから後悔しても遅い」

ぞくり、と怖いものを見てしまったように肌が泡立った。彼の口調は厳しく、同様に

視線も鋭利だった。肌寒い夜風とは違う冷たさが、全身を走り胸に穴を空ける。

彼の視線と言葉で理解する。僕は未だ彼に疑われており、彼の中ではこの壺は鬼とやらの住処となっている。僕を鬼と思っているのか、会った時に言っていた鬼の協力者と思っているのかはわからないが、見当外れも甚だしい。

彼は壺だけでなく僕も見張っていた。優劣はあるが、壺と僕は彼らの中では疑わしいという群に分類されている。ならば手っ取り早く身の潔白を証明して、彼の役に立てばさっさと家に帰れて布団で眠れるのではないだろうか。

そう考えて僕は、後々思い知らされる愚かな質問をした。

「なあ、その鬼とやらは何が好物なんだ？ どうやったたらその壺から出てくるんだ？」

僕の突拍子もない質問に彼は怪訝な眼差しを向ける。きみ、目力あるから怖いんだって。

「人間だ」

「そう、なんかそんな感じしてたけど、実際訊くと君達の行動に納得がいったよ」

真剣すぎて行動が奇妙に映るんだ。

僕は立ち上がり、落ちている石を掴んで地面に叩きつけた。石は割れ、鋸の刃の様な面は粗い。それを使って僕は壺の前で手首を切った。

人間を喰うなら、血の匂いでも襲ってくると思っただからだ。

「馬鹿野郎!!」

彼の怒号を無視して壺の周りに血を落とす。何滴目か、手首から滴り落ちる赤い雫は壺の中へ吸い込まれていった。

いつの間にか、壺は動いていた。独りでに、血が滴り落ちる手首の真下まで動いていた。

瞬間、吐き気がするほどの悪寒が壺から放たれる。

気づくと僕は鍔兎君の後ろにいた。彼の背中越しにソレを目にし、震えのあまり呼吸が止まる。人の手足が生えた魚の様な巨大な化け物が、涎を垂らしてこつちを見ていた。それはまさしく、餌を見る眼だった。

頭の中で警告の鐘がガンガン鳴る。早く逃げろと鐘の音が速く強く鳴るが、体が固まり動くことができない。

僕達はコイツに喰われる。その事実を認識し、僕は恐怖に呑み込まれた。

「下がってろ!!」

彼は冷静だった。僕は歯をガタガタいわせて腰を抜かしているのに、彼は巨大な化け物に立ち向かっていた。

何で僕は、無条件に守られているんだ。

「これが、鬼……」

こんな恐怖の塊ときみは戦い続けているのか。

「違う。恐らく鬼の能力の一つだ」

彼は刀を抜いた。構える刃は月の光を反射し青く光っている。その輝きは、彼の高潔さを連想させた。

シイイイイイイ——と彼は息を吐き、一瞬にして姿を消した。突然巻き起こった風に目を瞑り開くと、彼は宙を舞っていた。

水の呼吸——陸ノ型 ねじれ渦

巨大な水龍が化け物を閉じ込め飛翔する。その光景はこの場に似合わず、とても美しく思えた。

彼が着地した後、化け物は肉塊となつてポトポトと落下した。地面には罅割れた壺も転がっている。

「やった……い！」

「まだだ。——本命のお出ましだ」

彼は罅の入った壺を射殺すように睨みつけた。

次第に壺から肌を刺す悪寒が漏れ始める。鳩尾を押されるような不快な感覚が胸に広がり、喉を絞めつけられるような息苦しさに涙が落ちる。

壺の中身は嗤った。死体を煮詰めて発酵した悪臭と共に、壺からゆっくりと這い出て

きた。

ムカデの様に、胴体には幼子の手がいくつもついている。顔には、目がある箇所にかが、額と口がある箇所には目玉がある。目玉にはそれぞれ『上弦』と『伍』の文字が刻まれていた。

目元にある口がニタリと釣り上がった。

僕は悪臭と嫌悪感に耐え切れず、胃液を吐き出した。

耳を裂く叫びに、義勇は屋根の上を駆けていた。

「ああああああ!!! 助けてくれ!! 誰か!! 助けてくれえええ!!」

男が血まみれの女を抱きしめ、喉が裂けるほどの声を上げている。地面には女の血が溜まり、助かる見込みはない。男は喪心のあまり膝をついて滂沱の涙を流した。

ほんつ、と肩をたたくように、男の背後からこの光景に合わないほどの飄々とした声がかかると。

「その子を殺したのは君なのに、随分なことを言うんだね」

若い優男が男の顔を覗き込み嗤う。

「おまえ!!」

血が上ったように、男は持っていた包丁を怒りに任せて振りまわした。

「そう、その包丁でその娘を刺したんだよ。君が」

「だまれええ!!!! おれは知らない!! 目の前に化け物がいたんだ!! 刺しただけなんだ!!」

「それがなぜか君の婚約者だった。でもほらこの娘の手元を見てごらん。この娘も君を殺したかったみたいだ」

優男が視線で男を誘導する。視線の先には、血だまりの中に包丁が転がっていた。それは悲しくも女の手元にあった。

「お互い、殺したかったんだね」

うっとりとして、極上の笑みでほほ笑みかける優男に男の目は血走る。

「嘘だ嘘だ嘘だ!!!! 嘘だ!!」

「本当だよ」

優男はパチンツと指を鳴らした。暗闇が男の周りを徐々に侵食する。いつの間にか優男は消えていた。男は一人、暗闇に取り残され泣き喚く。

事実、男の腕の中に娘はいない。

だが男の中では、息絶えた婚約者を抱きしめていた。

——夢から覚めるように、優男は瞳を開いた。

目の前には男と女が苦痛に顔を歪めて眠っている。目の周りは涙で濡れ、彼の嗜虐心を十分に煽った。

十二鬼月・下弦の壺、魘夢^{えんむ}は、熟れた餌に唇を舐め恍惚とした。

「——それでは、いただきます」

水の呼吸——壺ノ型 水面斬り^{みなもぎ}

——ゾクリツ、と本能が危機を察知し体に電撃が走る。瞬間、頭上からの一閃に、魘夢はその場から飛び退いた。

魘夢の速い動きに土煙が舞う。煙は次第に晴れ、一閃の正体が姿を現す。そこには、刀を持った黒髪の少年がいた。

魘夢は過去の経験からソレの正体を理解する。
憎くてたまらない。

「鬼狩りがッ！」

眠り死ね!!

「眠れえええ」魘夢が突き出した左手から口が現れ奇声を上げる。その声は目の前の鬼

狩りを深い眠りへと突き落すはずだった。

水の呼吸——参ノ型 りゅうりゆうま 流流舞い

それは濁流の如く蠢いていた。

流水が地面を扶るように、義勇は刀で地面を削り轟音で血鬼術を相殺する。

魔夢には自信があつた。下弦の壺である己の硬質な肉体は、こんな小僧には傷一つつけられないと。

暴れ狂う土石流が魔夢の目の前に迫る。

それはかつて戦つた鬼狩りの威力とは違つた。

とつさに魔夢は避けたが、腕を一本持つていかれる。刎ねられた腕は血飛沫と共に宙を舞い、ドサリと地面に落ちた。

魔夢は腕を生やし、憎々しげに義勇を睨みつける。

「よくもやつてくれたな……」

血鬼術——強制昏倒催眠きようせいこんとうさいみんの囁き・眼まなこ

魔夢の血を吸つた地面から巨大な肉塊が現れ義勇を襲う。肉塊を埋め尽くすほどの目と口が一齐に義勇を向き、暴力的な睡魔が襲いかかる。

「悪夢にもがいて苦しめ!!」

魔夢の呪詛により強化された肉の触手が、義勇目がけて矢となつて襲う。

義勇は矢を一閃し、追撃の触手も斬り落とした。

血鬼術は展開され続けているにもかかわらず、義勇は未だ刀を振り続けている。

魔夢は血鬼術の眼まなこを介して義勇を見た。義勇は目を瞑り、叫びながら触手を斬り続けている。

瞳を閉じれば視覚を遮断することはできる。だが刀を握る以上、手で耳を塞ぐことはできない。故に義勇は声を張り上げ、自身の声のみを聴くことによつて血鬼術を祓いつけていた。

魔夢は屈辱に塗れた。こんな下つ端の鬼狩りに術を防がれ、苛立ちのあまり額に青筋が立つ。

血鬼術だけでは足りない。自ら一撃を入れなければ気が済まない。

魔夢は走り出した。義勇の間合いに入る前に飛び上がり、遠心力を利用して回し蹴る。

義勇はすかさず身をかがめて躲し、宙に居る魔夢の鳩尾を貫いた。

魔夢はニヤリと笑った。胴を突く刃を握りしめ、義勇の右腕を膝蹴りで砕く。

義勇は瞬時に刀を左手に持ち替え、型を出した。

水の呼吸 式ノ型・改——横水車よこみずぐるま

体勢を地面と水平にし、全身を使つて魔夢を回し斬る。刀に突き刺さっていた魔夢

は、遠心力により鳩尾から半身を引き裂かれ、刀から抜けて飛ばされた。

静寂が訪れた空間で義勇は跪く。碎かれた右腕の激痛から尋常じやない量の脂汗が湧き出る。痛みに叫びたくとも声は枯れて出ない。内に籠り続ける激痛に呼吸が乱れ心が暴れ狂う。

「うああああああああ!!!」

突如、眠り続けていた男が叫びだした。男には、斬り落とした魘夢の手が男の頭を鷲掴んでいた。

義勇は男に駆け寄り手を取り払う。

瞬間、掌から目玉がギョロリと現れ、目玉と目が合った。

転瞬、暴力的な睡魔に義勇は襲われた。

義勇は鬼の手を刺突し、刀に縋り混濁する意識に抗う。

そんな義勇を嘲笑う様に、足音がゆっくりと近づく。

血鬼術——強制昏倒催眠の囁き

「やっと眠った」喜色の声の主を睨みつけながら義勇は意識を落とした。

突如、そいつは体を震わせて笑いだした。

「フフフフフ、ヒョヒョヒョヒョヒョッ！ ウツヒョヒョヒョヒョヒョヒョヒョ！！
この土地は他の鬼の気配がする！ この縄張りを奪えばさらに本体に近い力を得る！！」
聞くに堪えない暴君に錆兎は一閃を放つ。だが、それは無数にある鬼の手の一つを斬り落としたにすぎなかった。

玉壺は、ここに居る錆兎達など些細なことのように、町遠くの方を見て気持ち悪く笑った。
町には大量の餌がある。鬱陶しい蠅のように視界を横ぎる錆兎を相手にするよりも、
下位の鬼の縄張りを奪う方が得だと損得勘定が働く。

手軽に大量に人を喰う姿を想像し、玉壺は口福に浸った。最早、錆兎達のことなどどうでもいい。

玉壺は即座に壺に戻り、颯爽と姿を消した。

錆兎はすぐさま土手を駆けのぼり、玉壺が見ていた方角を確認した。錆兎の力強い目が動揺で揺れる。錆兎は、鬼が嗤っていた理由を即座に理解した。

町の方から義勇の技が見える。

義勇は今、鬼と戦っている。土地神は鬼だった。

「おい、どういふことなんだ?! なんであいつは消えた!?!」

後ろから青年の声がする。鎗兎は情報を整理するように、声に出して青年に答えた。「町には他の鬼がいる！ 義勇が戦っている!! さっきの鬼は町に向かった!!」
答え終わると同時に鎗兎は青年を置いて走り出した。青年もまた、既に姿が見えない鎗兎の背中を追いかけて走り出した。

——真つ暗な世界で義勇は目を覚ました。

自分以外何も見えない暗闇に、義勇は血鬼術を推測した。

暗闇の中から何かの気配を感じ取る。左手で刀を構え、義勇はその先を睨みつけた。

ソレは霧を通り抜けてきたかのように、闇から徐々に姿を現す。

握る剣先の焦点はずれ、瞳も見開き揺れる。脳がソレを認識した時、義勇の目頭に熱いものが込み上げてきた。

そんなはずない。分かってる。そんなことありえないんだ。けど、もう一度でいいから、会いたかった。

「義勇」

いつも呼んでくれていた、優しい声がそこにあつた。

「ねえ……さん……」

「会いたかったわ。大きくなつたわね」

「つた 蔦子……姉さん……」

「ずっと義勇を待つてたの。会えてうれしいわ」

蔦子の優しい笑みに、義勇の中で罪悪感が湧き上がる。

「姉さん、俺、あの時何もできなくて……助けられなくて……」

「ごめんなさい」そう言った時には姉さんの腕の中にいた。幼い頃、抱きしめてくれたように優しく暖かい姉に鼻先がツンとする。

今まで心に燻っていた懺悔の氷塊が義勇の涙と共にぼたぼたと溶け始めていく。

蔦子は義勇を愛おしく抱きしめた。それがより一層、義勇の心を幼くしていった。

「いいのよ、義勇。貴方が生きてくれているだけで、姉さん嬉しいの。だからあなたには、私の分まで生きてちょうだい」

蔦子は微笑みながら義勇の頬に手を添える。義勇と同じく、大きな目には水気が帯びている。

「——なんて、言うとも思つたの？」

一瞬にして蔦子の表情が消えた。全ての感情を吸い込んでしまうような、暗い目をしていた。

「義勇、どうして姉さんを助けてくれなかったの？ 姉さんには幸せになる権利はないの？ お願い。答えて。私の人生はあなたの踏み台だったの？」

耳元で切なく話す蔦子の声が義勇の脳を揺らす。

義勇の姿は、いつの間にか姉と死別した時の幼い姿になっていた。それがより一層、あの時の後悔を思い出させる。

「ごめんない。助けられなくてごめんなさい……。姉さん、ごめんなさい」

涙が止まらない。姉の言ったことが全て事実だからだ。

俺は、姉さんの人生を犠牲にして今生きている。俺がいなければ姉さんはもつといい暮らしができていた。山奥じゃなく、町に出て住み込みの働きもできていたはずだ。食うものにも困らず、きれいな着物を着て、美人で気前もいい姉さんはもつと早くに結婚もできていたはずだ。そうしたら、鬼に襲われることもなかった。

俺がいたから、姉さんの人生が不幸に傾いた。

フツ、と二人の目の前に小さな天秤が現れる。

天秤は、蔦子の人生を表していた。皿の上には、蔦子に似た人形が置いてあり、もう一方の皿には蔦子の幸せが詰まっていた。

両親が死に、幸せの皿からその分の幸福が落とされる。落ちた幸せは、天秤の下にいらる手が奪い合い引き裂いていった。いつの間にか、天秤の下には人間の手を模した不幸

の手が波のようになつていた。

蔦子の天秤に、義勇という重りが増える。幸せの皿に義勇が乗り、皿が低く傾き不幸に近づく。その皿の傾きを上げるために、蔦子は幸せの皿から義勇以外を落としていき、義勇を不幸から遠ざけ続けた。

次第に蔦子が乗る皿が地に落ちる。落ちた蔦子に不幸の手が群がり、蔦子を喰つていった。

義勇は蔦子の天秤を目にし、罪悪感に心臓をつかむ。姉さんは、俺を不自由させないように自分の幸せを捨てた。我慢して、努力して、耐えて、報われずに死んだ。それも俺を庇つて。

「いいのよ、義勇。これからは一緒にいてくれるんでしょ。向こうに準備してあるの。あなたと暮らすために用意してきたのよ。義勇、一緒に行きましょう」

義勇の心は呆然としていた。幼くなった義勇は抵抗することなく、蔦子と手をつなぎ、暗闇の方へ歩き始めた。

9. 5 入隊から2年後の錆兎と義勇 後編

錆兎は盾になっていた。守ると決めた人を鬼から守るために。

錆兎は十二鬼月・下弦の壺、魘夢と上弦の伍、玉壺の分身と戦っている。

幸いなことは、分身玉壺の実力が上弦の伍の力に達していないことと、鬼同士が縄張り争いに興じていることである。

それでも鬼は、互いに争いながらも餌を逃がすつもりはない。

錆兎は刀を構えて血鬼術を打ち消していた。背後に居る義勇は魘夢の血鬼術で眠り続けており、義勇と青年を庇いながらでは逃走の機を見いだすことができずにいる。逃げることもできず、積極的防衛に転じることもできず、その場で血鬼術の余波を受け流すしかなかった。

「義勇、起きてくれ!! 頼む! 目を覚ましてくれ!!」

切羽詰まった声で錆兎が義勇に呼びかけるが、義勇は涙を流すだけで眠りから起きる気配はない。

青年が義勇に藤の花の蜜を溶かした水を少しずつ飲ませているが、血鬼術がそれだけ

で解除できないことは百も承知している。この水が術を解くきっかけとなることを願うしかない。

「錆兎さん!! 俺が彼を背負う!! 逃げるぞ!!」

青年は義勇を背負い、逃げる算段を整える。

動けない彼を自分が背負えば、今なら3人とも助かるのではないか。そう考えての提案だった。

だが錆兎の言葉は否であった。

「無理だっ!!」

「何で!!」

玉壺の血鬼術、千本針魚殺せんほんはりぎよざつによつて呼び出された金魚が毒針を吹き飛ばす。その全ての針を叩き落として錆兎は言った。

「全員まとめて逃げるのは無理だ。奴らはその時だけ結託して俺たちを喰らうつもりだ。俺が足止めをする間に全力で逃げろ!!」

玉壺は魔夢と戦いながら、錆兎にも血鬼術を放っていた。

背後に居る義勇と青年を守るには、錆兎は一人残り盾となつて攻撃を相殺し続けるしかない。

青年は無慈悲な現実に心と体が衝突した。

バクバクと、青年の耳元で心音が鳴り響く。徐々に心臓の音が頭の中を侵食し、脳を揺さぶる。同時に胸へじわじわと不快感が広がっていき、過度な自分の呼吸音が嫌に聞こえる。

彼の言っていることは正しい。それが、生存率が最も高い選択だと理解している。だがその選択はしたくない。彼を死なせたくはない。

動かない青年に錆兎は怒声を浴びせた。それは彼の師が、かつて彼等によく言っていた言葉だった。

「判断が遅い!!」

一瞬だけ、錆兎は青年と義勇を見た。その顔は笑っていた。

「早く行け、俺は死なない。誰も死なせない」

ひどく泣きたなくなった。これが差なのだろうか。ぬるま湯で生きていた自分と、常日頃から命のやり取りをしている彼らとの。

玉壺の一撃が魘夢に入り、家屋ともども吹き飛ばす。

玉壺は錆兎達を見てにやりと唇をゆがめた。他人の飯をそいつの目の前で横取りすることに悦を覚えた、邪悪な笑みだった。

「走れ!!」

「……くそつたれえ!!」

鍔兎の言葉に青年は義勇を背負い全力で走り出した。

鍔兎は遠ざかる足音に口を吊り上げた。

そう、それでいい。どうか逃げ切れ。

肌を裂くほどの殺気が玉壺から流れ出る。玉壺は蠱毒の笑みを浮かべ鍔兎を嘲笑した。

「人間は意味のないことをする。あの二人は喰われる。お前なんぞではこの玉壺を足止めなどに出来ぬわ。ちんちくりんの脆い盾では時間など稼げぬ」

「上弦の伍を、嘗めるな——」肌を刺す殺気は強く、悪臭も濃い。常人の鬼殺隊隊員であればその殺気を浴びただけで泡を吹いて倒れているだろう。

だが鍔兎は地に足をつけ、怯むことなく玉壺を睨みつけた。これまで経験したこと、接した人との想いを全て思い返し、地の底を這う声をぶつける。

「俺の選択は誤ってなどいない。俺が助けられる全ての人を助けることが、俺の意志だ。その代償がたとえこの命であつたとしても、俺は迷わずそれを選択する」

家族が喰われた日——救いたいと、強く誓った。傷つく全ての人が悲しい思いをしなようにと。誰もが幸せであつてほしいと。幼い頃の自分の願いは、決して間違つてない。

「お前たち鬼にはわからないだろう。かつて人間だったにもかかわらず、人を喰い、人の心を亡くしたお前たちには。狂猛な力と能力で人の幸せを蹂躪し、嘲笑うお前たちに、人の繋ぐ想いの重さなど最早わからないだろう」

鎗兎は構えた。水の呼吸、最強の威力を誇る拾ノ型、せいせい生流転いてんの構えを――

「お前たちには喰った人の軀が重なり、無念の聲が巻き付いている。一人一人の声は微々たるものに違いない。だが、喰われた人の数が多くなるにつれてその声は大きく、想いは強く、代を重ねて強固になる。その強大な想いを乗せた刃でお前たちを滅する!!」

鎗兎の姿が消えた。

「お前こそ、人間を嘗めるな」

君がいなければ、家族は死んでいた

青年は走っていた。体が重く、息が切れ、足がもつれ、涙がこぼれ落ちる。それでも足は絶対に止めない。身を挺して盾となった鎗兎の事を思い、自分の命と背負う少年の命を守らなければならぬ使命感が生まれる。

全力で走る。苦しくて涙が出てくる。それが、心の痛みによるものなのか、それとも

体の悲鳴によるものなのかはわからない。生きることについて初めて必死になっている。

走っている最中も幻覚の様に、錆兎の後ろ姿が頭に焼き付いて離れない。

あんな勇敢な背中は見えたことなかった。そして、これからも彼を超える存在などいはいない。だからどうか願う。絶対に生きてくれと。

青年は走りながら自分に問う。今自分にできることは何だと。そして答える。背中にいる少年を目覚めさせることだと。

青年は義勇に叫び続けた。息が絶え絶えになりながらも、眠り続ける義勇に助けを懇願する。

「起きられくれ義勇さん!! 錆兎さんをつ!! 助けてくれ!! 鬼に負けないでくれ!!」

青年の流れ続ける涙が背後に居る義勇に流れる。

「彼を犠牲にしないでくれ!!」

一粒の涙が、義勇の頬に当たった。

「義勇さん、お願いだ!! ……錆兎さんが死んじゃうよ。彼を、助けてくれ!!」

青年は体力が続く限り走り続け、その声が枯れるまで懇願し続けた。

——今日の鮭大根は甘い

——けて!!

「え？」

義勇は食べていた鮭大根を置き、辺りを見回した。

「義勇、どうしたの？」

「どこからか、声が聞こえたんだ」

菫子は義勇と共に耳を澄ませますが、何も聞こえない。菫子は首をかしげ心配そうに義勇を見つめた。

「……何も聞こえないわよ？」

——助けてくれ!!

「!! また!! 助けてくれ!!」

再び聞こえた必死な声に、義勇は食事を一旦やめる。はつきりと聞こえた助けを求め、空耳ではないと確信するが、声の出所が分からない。

きよろきよろと鳥の様に辺りを見渡す義勇に、菫子は苦笑った。

「もう、義勇。何も聞こえないわよ。貴方疲れてるのよ。早く食べて、今日は早く寝ましよう」

「待ってくれ姉さん。今聞こえたんだ」

義勇の目の前を一滴の雫が落下した。それは置いていた椀の中に入り、波紋を作った。

義勇の胸の中にどうしようもないざわめきが波紋の様に広がる。ざわつく胸に言いようのない焦りが生まれてくる。

誰かが助けを求めている。

ポタリ——と水が椀の中に再び落ちる。

鳶子は首を傾げ続ける義勇に苦笑し、食事の続きを促した。

「義勇、具材だけでなく煮汁もちゃんと飲みなさい」

「……わかった」

置いていた椀を持ち上げ、義勇は煮汁を全て飲みほした。

今日の煮汁はいつもより甘い。

——鏑兔さんを!! 助けてくれ!!

今度は名前まで聞こえた。

「……さびと? 姉さん、さびとって誰なんだ?」

その名を口に出すと、なぜだか鼻先がツンとなり、目頭が熱くなる。先程とは比べようにならない程の焦燥が胸に広がる。

俺は、何か忘れてないか?

——鬼に負けないでくれ!! 彼を犠牲にしないでくれ!!

鬼ってなんだ? 犠牲……は、何のことだ。

上から落ちてきた水滴が手の甲に当たり、弾ける。水滴を嘗めてみると、ほんのり藤の香りのする甘い水だった。馴染みがないはずなのに、その香りは焦燥を抱く義勇をなぜか落ち着かせた。

義勇は蔦子を見た。蔦子の顔がひどく歪んで見えた。

これは姉ではない。そもそもどうして俺はここに居るんだ。

——義勇さん、お願いだ!! このままじゃ……鑄兎さんが死んじゃうよ! 助けてくれ!! 起きてくれ!!

涙がこぼれ落ちる。袖で拭うと、それは姉の羽織だった。そばには見慣れた自分の刀があった。右腕から忘れていた激痛が襲ってくる。

義勇は臉を強く閉じて、思いを断ち切る。左手を強く握りしめ、頬を殴って甘えを捨ててる。

ああ、幸せだな。こんな幸せをあの時までは幸せだと思っていなかった。ここに居たい。あの頃に戻りたい。だが——今の自分を導いてくれた仲間がいる。

頭の中で鑄兎、鬼殺隊の仲間、師匠、妹弟子の姿が思い浮かぶ。

目を開けると、蔦子が心配そうに見ていた。その目には、鬼殺隊の隊服を着ている現

在の自分が映っていた。

義勇は泣きそうに眉を垂らした。

「……すまない、姉さん。まだ一緒に暮らせない。ただ、嘘でもまた会えてうれしかった」

義勇は刀を目の前に置き、左手で刀身を抜いた。

帰り方はおそらくこの方法しかない。過去に囚われる己を断ち斬るしかない。

「義勇!!」 蔦子の悲痛な声を無視して、義勇は自身の首に刃を当てた。

——目を覚ますと土の上に転がっていた

血鬼術——千本針魚殺

考えるよりも先に殺気から離れる。

「邪魔をしないでくれる。喰べ損ねたじゃないか。上弦だからって何しても許されると思ふなよ」

「下弦は上弦のこの私に、縄張りも餌も譲つたらどうなんだ」

「上弦の力に達していない分身のあなたに言われたくないね」

「本来の力を出していない私にすら勝てぬお前はさっさと消えろ」

「全力を出していないのはあなただけだと思わないでくれないかなあ」

「どうせ似たような餌場をいくつも持つてるんだろ」

「あんたもだよねえ」

「さつきからこの玉壺に向かって何だその無礼な口は!!」

義勇はすぐさま周囲を確認した。目の前には上弦の伍と下弦の壺が一体ずついる。助けた人たちはいない。

上弦の鬼の壺には見覚えがあつた。あの青年が抱えていた壺だ。

やはりあの時の悪寒は正しかつた。

義勇は自身の状態を確認する。利き腕ではない片腕で十二鬼月を二体相手にするのは絶望的だ。一旦退避し、鍔兎たちと落ち合うことを考える。

義勇は足の筋線維一本一本を意識し力を籠め、一気に解き放つ。

だが玉壺がそれを許さなかつた。

「逃がしはしない」

血鬼術——いちまんかつかくわねんぎよ一万滑空粘魚

玉壺がそう念じると、一万匹の鋭い歯を持つ魚が玉壺の意志に従い義勇を刺突する。肉を裂き、歯で抉り、弾丸となって急所を狙う。

一万匹の弾丸を撃ち落とさない限り、それはいつまでも義勇を襲つた。

義勇は深く息を吸い、吐き出した。荒波となつてゐる気持ちを落ち着け、生き残るための最善を尽くす。

水の呼吸——陸ノ型　ねじれ渦

渦のように回転し、刺突する魚の大群を渦に閉じ込め撃滅を図る。だが利き手ではない左手一本では威力はない。切り損ないの魚達が義勇目掛けて突く。

斬られた魚は肉塊となり、体液を撒き散らす。散つてくる溶解液が羽織と隊服に付着し布を溶かす。

義勇は、自分の置かれてゐる状況を再度認識した。

魚の体液を直接浴びれば死ぬ。右腕は骨が砕けてゐる。呼吸で止血しているが、血を流しすぎている。それにより酸素が全身に回らない。魚の毒液が気化して周辺に充満している。自分の手に負えないことを再度痛感する。

ならばなおさら一度引き、鎧兔と連絡を取りお館様へ柱と隊を要請しなければならぬ。

「お前に新作を見せてやろう」

玉壺はヒョッコヒョと気持ち悪く笑つた。出来上がったばかりの自信作を周りに見せびらかし、己のすばらしさを誇示する。玉壺の脳内では、既に称賛の嵐が巻き起こつていた。

「ヒョツヒョツヒョツヒョツヒョ。この玉壺様の作品をみて慄け!!」

「見よ!! この芸術を!! 名は『赤銅の亡霊』!!」玉壺は義勇の目の前に作品を置いた。現れたのは標本の展翅てんしの様に、何本もの日輪刀で体を固定され、串刺しにされた鑄兎と青年だった。

天を向く鑄兎の胸には鑄兎の刀が貫いており、体を固定するそれぞれの刀には彼の血が伝い赤く輝いていた。

ヒュウ……ヒュウ……という微かな呼吸音から鑄兎が辛うじて生きていることが分かるが、その目は暗く死の淵へ落ちかけている。

青年もまた何本もの刀で貫かれており、手足のみならず体があらゆる方向に捻じ曲げられ全身が血で赤く染まっていた。目は堕ち、彼の命が消えていることが読み取れる。

「鑄兎っ! 鑄兎!!」

義勇は呆然と震えた。信じられなかった。何で鑄兎達がこんなことになっているのか。

信じられない、というよりは信じようとしなかった。深く考えれば玉壺が現在義勇の目の前に居る理由が想像つくからだ。

なぜ。なぜ。と湧き上がる疑問と共に涙が目にあふれる。

「どうですこの作品は!! 特に宍色の髪という上々な素材をより美しい芸術品へと昇華

させたこの玉壺様の腕を!!」

「僕ならもつと希望と絶望の落差を出すね」

麗夢は半目となつて玉壺を見た後、屈託なく義勇に笑つた。甘い蜜を得た顔は悦に入り、義勇を絶望に落としていく。

「そいつらは君を助けに来たからやられたんだよ。笑つちやうよね。弱いのに身の丈を考えないから」

悪意にまみれた言葉と笑顔が、義勇の心を切り裂く。

「お前が寝ている間に宍色が盾となつて、黒髪がお前を背負つて逃げたけどすぐに追いつかれたんだ。こいつらは、お前のせいで喰われるんだよ」

義勇の目に涙があふれ、憎しみで顔がゆがむ。

怒れ。憎め。戦え。滅ぼせ。全ての負の感情が湧き上がり、頭が熱くなる。

プツン——と何か自分を押し留めていた糸が切れた。

—— 鎗兔を、返せ。

それ以外、義勇は考えられなくなつていた。

水の呼吸——肆ノ型 打ち潮

義勇は玉壺を相手に斬りかかる。だが心乱れた義勇の剣技は繊細さを欠いていた。怒りで冷静さを失い、初撃の技にこだわり剣筋を見切られる。

それがより一層義勇を熱くした。

玉壺はもはや義勇を喰うことよりもいかに芸術的に殺すかを考えていた。そのためには素材をより良い状態で保存しなければならぬ。必要な個所が欠損しては、より高度な芸術になりはしない。玉壺が目指すのは、究極の美だった。

血鬼術——水獄鉢すいごくぼち

人を一人閉じ込める程の巨大な水鉢が現れ、義勇を呑み込む。粘度の高い液体に閉じ込められ、義勇は内側から刺突した。だが水鉢は柔らかく、ゴムのように形状を変化し、突き破ることはできなかった。

もがく義勇を観賞し、鉢の外から二体の鬼が嗤う。

次第に義勇の息が切れ、体が動かなくなる。刀を握る力も残っていない。思考も停滞し、視界が霞みだす。

それでも義勇は、執念で鬼の後ろに見える鍔兎に手を伸ばした。

——鍔兎を……返せ。

水の呼吸三連斬り

——肆ノ型 打ち潮、陸ノ型 ねじれ渦、壱ノ型 水面斬り

突如、義勇を閉じ込めていた水鉢は斬れ、義勇は血鬼術から解放された。突然の空気

に咳き込み、必死に呼吸を安定させる。

顔を上げた時には、二体の鬼は胸が二つに切断されていた。

目の前に、誰かが立つ。その人の背中を見て、自分を守り戦い続けていた錆兎と重なり涙が溢れた。

その人の姿が歪む程、義勇は涙を流した。涙で視界が霞む中、その人が握る藍色の刀が義勇の目に鮮烈に焼きついた。

あまりの疲弊に、体が地に沈みこみ指一本動かすことができない。それでも義勇は、動かない体を叱咤し無理矢理土を握りしめる。

立ち上がれ。起き上がれ。錆兎を取り返せ。

歯を喰い縛り、体を起こそうとするが体は動かなかつた。想いだけでは困難に打ち勝つことはできなかつた。

背を向けて立つ男は義勇を振り返らず言った。

「俺が来るまでよく耐えた。後は任せろ」

「お前は頑張った」そこで義勇の意識は再び落ちた。

駆けつけた水柱は分身玉壺を滅し、魘夢を取り逃がした。

藤の花の家紋を掲げる家に義勇は暫くの間療養することになった。家の者が気を使
い、部屋に閉じこもる義勇を縁側に座らせ庭の景色を見せる。

部屋に閉じこもったままでは自傷の恐れがあったからだ。

義勇は涙が出なかった。悲しいという感情を超え、心が死んで喰われていた。

一人の男が義勇の前に立つ。それはあの日、義勇を救った水柱だった。

だが義勇は、目の前に立つ水柱を認識していない。精密機器の様に、外界から入った
視覚情報を角膜と水晶体を屈折させて光の情報として脳に伝達するが、義勇の脳はそれ
を処理していなかった。その機能をシャットダウンすることで、義勇の精神は保たれて
いた。

「立て」

水柱が言う。

聴覚もまた同様であった。耳の機能として聴覚情報を拾っていても脳がその情報を
活用していない。

水柱はお館様こと産屋敷耀哉から言われた言葉を思い返す。

——富岡義勇を継子にしてくれないかい。あの子は、強くなるよ。

こんなふやけた奴を庇って錆兎がやられた。

茫然自失している義勇を見て、拳を強く握りしめる。ふつつつと、やり場のない苛立

ちが出口を求めて義勇の襟首を乱暴に掴んだ。

「お前を、俺の継子にする。錆兎に救われたその命を、多くの人を救ってその価値を証明しろっ！」

『錆兎』『命』『救う』その言葉に義勇は辛うじて反応した。

水柱の手に雫が落ちる。襟首を掴んでいた手を下げ、義勇を見る。

飾り物のように、ただレンズの役割をしていたガラス玉の様な目から涙がこぼれ落ちていた。

ぼつぼつと、号泣するのではなく雨の様に義勇は涙を流し続けた。

それから3年後、富岡義勇は錆兎との約束通り鬼殺の剣士の最高位、柱に就任した。

——光

蝶屋敷の一室に義勇は足を運んだ。普段であれば何かとちよつかいをかけるしのは、この時だけはいつも義勇に話しかけない。

義勇はベッドに眠り続けている錆兎の寝顔を見ていた。あの日から錆兎は目を覚まさない。

義勇は両手で錆兎の手を握り、額に近づけ強く願う。

起きてくれ。目を覚ましてくれ。

弱かった昔の自分を悔いる。後悔しか浮かんでこない。努力が足りなかった。だから今も鑄兎は眠り続けている。

自分を責め痛めつける。戒めのように、あの日を忘れないように。

あの時俺が弱かったから鑄兎の足をひっぱった。精神が強ければ。もっと早く血鬼術を解いていれば。

何気ない日常が幸せであることを姉さんから教わった。戻らない幸せがあることを鑄兎が教えてくれた。俺は、大切な人からいろんなものを奪って今生きている。

義勇は先代水柱との誓いを思い返す。

姉さん、鑄兎、先代の三人に助けられたこの命で、その価値を証明し続けなければならぬ。

義勇は、鑄兎の手を布団の中に戻し立ち上がった。

優しい思い出を全て振り払うように、鶯子と鑄兎の着物を繋ぎ合わせた羽織を翻して蝶屋敷を後にした。

水柱、富岡義勇は今日も鬼を滅しに行く。

12. 5 藤咲紫緒の最終選別

——絶対に勝てないその才能に嫉妬する

薬品と木と花が混ざり合った匂いは蝶屋敷の香りだ。主として消毒液や薬湯の匂いが床や柱に染みつき、庭にある季節の花の匂いが屋敷に漂う。

朝焼けで空が赤く染まる頃、澄んだ空気と蝶屋敷の香りを深く吸い込み、少年は三和土に立った。

細くさらさらとした髪は頭の丸さを主張して柔らかな雰囲気を助長しているが、前髪から覗く意志の強い大きな目は近寄りがたい空気を醸し出している。

藤色の上衣に董色の袴という名前に因んだ着物を纏う少年は藤咲紫緒ふじさきしおという。

紫緒はもう一度深く息を吸い、師範である胡蝶こちょうしのぶを見つめた。

「師範、それでは行ってきます」

「はい、いってらっしゃい。大丈夫と思いますが、気をつけてくださいね」

「ちゃんと帰ってきます。そのための準備を今日までしてきました」

「そうですね。……いろんなことがありましたね」

しのぶは瞳を閉じて昔を思い返す。

いつてらっしやいを言う度に帰ってこない継子たちの姿が目には浮かぶ。

陰りが見えるその微笑みに、紫緒はしのぶの意識を強引に引き戻した。

「師範、これからもいろんなことがあります。なので帰ってきたら稽古の続きをお願いします」

「……気を遣わせてしまいましたね」

しのぶは閉じた瞳を開き、にこりと挑発した。

「より一層厳しくしますよ」

「望むところです」

紫緒は自信に満ちた目でしのぶを見返し、しのぶの隣に立つアオイに視線を移した。

アオイは縫るような目で紫緒を見つめている。

「絶対に帰ってきなさいよ……。絶対よ」

眉を垂らすアオイの瞳には、今にも零れ落ちそうな涙が浮かんでいた。

「……やめてくださいよ、今生の別れにしないでください。それよりカナヲは？」

「それよりってあんたねえ！ ……まあ、いいわ。今日はまだカナヲを見てないわ。しのぶ様は見られましたか」

「いいえ、私も見てません」

そう言いながらもどこか心当たりがありそうなしのぶの顔に、紫緒は一抹の不安を抱いた。その不安は後に的中するのだが、この時の紫緒はまだ知らない。

喉に小骨が刺さったように、小さな不安が引つかかる。紫緒は暫くの間思索した後、お守りの短刀に手を伸ばした。

かつてクルイから受け取ったその刀を紫緒は肌身離さず持ち歩いている。それ故に紫緒は、不安を感じると無意識にその刀に触れていた。

紫緒は遠慮がちにアオイを見た。

「——アオイさん、お願いがあります。アオイさんの刀を貸してください。もしかしたら——」

刀を借りた紫緒は、引き戸に手をかけて二人を見た。その表情は晴れ晴れとして死に行く者の顔ではない。

「では師範、アオイさん。行ってきます」

「いってらっしゃい」

「紫緒っ、必ず帰ってきなさいよねっ!! 絶対よっ!!」

紫緒は笑顔で屋敷を出た後、最終選別が開かれる藤重山へ歩みを進めた。

藤咲紫緒は幼い頃に両親を亡くし、親の代わりに育ててくれた姉も4年前から眠り続けていた。それは鬼と鬼に協力する人間、協力者によって狂わされた結果だ。

紫緒の両親は医者から処方された薬を飲んでしたが、医者と助手は協力者であった。両親は山奥の病院へ入院し、二度と家に帰ってくることはなかった。後に判明したことだが、処方された薬は病を促進させるものであり、山奥の病院は鬼が管理する食糧庫であった。

悪夢は更に続いた。紫緒の姉の血液は、稀血という鬼にとって栄養に富む特殊な血液であった。姉も両親と同様に鬼の元へ送られ、気がついた時には稀血製造機として利用されていた。

そんな紫緒と姉を救ったのが、当時、鬼殺隊音柱であったクルイである。

クルイは3つの条件を引き換えに紫緒の依頼を引き受けた。

一、胡蝶姉妹の弟子となり花の呼吸と蟲の呼吸を習得すること。

二、胡蝶姉妹の懐に入り情報をクルイに流すこと。

三、死の淵に立った際は鬼となり鬼の情報を渡すこと。

契約通り、クルイは鬼と協力者を殺害し紫緒と姉を救済した。

紫緒は契約を履行するために鬼殺の剣士にならなければならない。

だがそれは、年月が経つにつれ義務ではなく意志へと変わった。

未だ目覚めない姉を見る度に鬼とその仲間に対し憎しみが湧く。自分と同じように鬼に蹂躪された人を見ると、毒々しい感情に巢食われて力がなかった過去の自分を思い出す。

だからこそ、人に仇成す存在を殺し続けると紫緒は強く誓った。

感受性が強すぎるが故に、他者を己に投影し、それを助けることで己を救済していることを紫緒は気づいていなかった。

藤の花が辺り一面に咲き乱れ、頭を垂れて選別者を招き入れていた。

「ああ、やつぱり居た」

カナヲ、と呼ばれ一人の少女が振り返る。

蝶が花に佇むように、きれいな黒髪を蝶の髪飾りで片側に高く結び、華奢な体を鶉色ときいろの上衣と薄紅梅の袴に包んでいる。笑みを浮かべて蝶と戯れているが、どこか人形味を感じると冷たい微笑みだ。

「勝手にいなくなると師範に迷惑がかかるだろ。読み書きできるんだから書置きぐらいしろよ」

紫緒はいつもの様に小言を言うが、カナヲもまたいつもの様に笑みを浮かべるだけで返事をするとはなかった。

仲が悪いというわけではない。

カナヲは基本的に胡蝶しのぶの命令に従う。命令が無ければ自由に動くとも話すこともない。

紫緒が何か言ったとしてもにこやかに笑みを携えるだけで、自発的に他の反応を返すことはない。それを紫緒は常々寂しいと感じているが、無理やりにも指摘して直そうとは思わなかった。本人が心の底から自分を変えたいと思わない限り、他人がいくら矯正したとしても変わらないことを紫緒は理解している。

だからこそ、カナヲがしのぶの命令ではなく自らの意志でここに来たことに紫緒はほっとした。

カナヲには意志があるのだと再認識したからだ。

紫緒とカナヲの付き合いは4年になる。紫緒が胡蝶姉妹の弟子となった後、胡蝶姉妹がカナヲを拾ってきた。なぜ拾われたのか調べようと思えばいくらでも調べられるが、紫緒はそれをしなかった。幼い子供が蝶屋敷に引き取られた時点で大体のことは推察できるからだ。

紫緒は、興味本位で人の過去を暴いてはならないと思っている。それは自分の過去を

他人に踏み入れられたくないという自己防衛でもある。

踏み入れないから踏み入らないでくれ。もし踏み入れるならば、お前の力が尽きるまで全力をもって攻撃する。

そうやって心の距離を見誤る者に、視線で態度で空気で紫緒は語った。

だからこそ、紫緒はカナヲだけでなく全ての人の心の中に入り込んだりはしない。周りから求められる人を演じ、円滑な人間関係を築く。

しのぶの笑顔、カナオの微笑み、紫緒の演技は、自己防衛という点においては共通していた。

紫緒はカナヲの腰を見た。カナヲは鬼を唯一殺せる刀、日輪刀を下げていなかった。

他人の刀を使うつもりだったのか、カナヲの考えを推察することはできないが、アオイの刀を借りてきて正解だったと紫緒は胸をなでおろした。

喉の小骨を吐き出し、カナヲに刀を差し出す。

「アオイさんからだ。帰ったらちゃんと返しに行けよ」

刀を受け取ったカナヲから視線を外し、石畳の参道を見た。石段と空の境界から狐のお面がひよっこりと現れる。次第に首、体、脚へと見える範囲が増えていき、最終的には狐面を着けた少年が石段を上ってきた。

狐面の少年を観察していると、目が合った。

紫緒はすかさず友好的にほほ笑んだが、心の中は穏やかではなかった。

彼を見ると、なぜか無償に不安が募っていった。

そんな紫緒の心情を断ち切るように、鬼殺隊当主のご息女とご子息の声が波紋の様に静かに響き渡る。

——皆様、今宵は鬼殺隊最終選別にお集まりくださってありがとうございます。この藤重山には、鬼殺の剣士様方が生け捕りにした鬼が閉じ込められており外に出ることが来ません。山の麓から中腹にかけて、鬼どもが嫌う藤の花が一年中狂い咲いているからでございます。しかし、ここから先には藤の花が咲いておりませんから、鬼どもがいます。この中で7日間生き抜く。それが、最終選別の合格条件でございます。では、いつてらっしゃいます。

二人は、藤の花のように優美に頭を下げて選別者を見送った。

「カナヲ、また7日後な。今度は一緒に帰るぞ」

カナヲに向き合い最終選別が終わった後の約束をする。相手がまたこの場所に戻ってくる確信しているからこそできる約束だった。

紫緒はカナヲの反応を待たずに森へ入った。カナヲの返事が何であれ、紫緒の中では共に帰ることは既に決定事項である。

カナヲは頷く代わりに瞬きをし、紫緒とは違う方角へ進んだ。

暗闇の中、紫緒は東を向いて歩いていった。

月と星の光を遮断した夜の森は、あの日を思い出す。

姉を助けるために夜の森を駆け、病院に侵入したこと。人の悪意に触れ、心から血が流れたこと。自分の無力さを痛感し、力と知を求めてクルイと契約したこと。

蝶屋敷に預けられた紫緒は、胡蝶姉妹が心配するほど血反吐を吐いて剣の修業に励んだ。日々の目標を設定し、達成するために努力する。そのためにあらゆる分野の書を読み漁り、医学や薬学も学んだ。

そんなある日、誰もいない道場でカナヲが木刀を片手に紫緒の真似をしていた。カナヲとしてのぶはカナヲに花の呼吸を指導したことはない。にもかかわらず、カナヲのそれは紫緒よりも完成度が高かった。

途端に足元が揺らいだ。

稽古中、カナヲが物陰からこっそりと見ていることは知っていた。けれど見稽古だけで、必死に努力した自分を超えられるとは想像もしていなかった。

カナヲには剣の才能がある。自分にはその才能は無い。だからこそ、必死に努力を続けるしかない。報われるかどうかではなく、継続することで自分を肯定するしか道はな

いのだと結論づけた。

そうやって割り切ってはいるが、絶対になわなないその才能に、ひどく嫉妬したことは確かだ。

「——っ!!」

風に乗って小さな音が流れてきた。紫緒は音のする方向へ駆けだし、注意深く耳を傾ける。

「い、嫌だっ! 助けてっ!! 誰か!! 助けてええええ!!」

はつきりと聞こえた声に、誰かが鬼に喰われそうな状況であることを理解した。

紫緒は鞘から刀を抜き、脚に力を入れて森を駆ける。

この場にしのぶが居たならば、目の色を変えて駆けだす紫緒の肩を掴み、落ち着けと止めただろう。紫緒の実力を侮ってはいないが、想定外の状況に於いても万全に対処し任務を遂行するとは言い難い。

だが、この場には紫緒を止める人間はいない。全ての人を救えるわけがないのに、困っている人の声を聞いてしまうと紫緒は助けずにはいられなかった。

『助けて』と言って紫緒は胡蝶姉妹に、クルイに、鬼殺隊に助けられた。

クルイとの契約は今思うと破格の条件だったのではないかと考えている。あの契約

のおかげで生きる道筋を示され、蝶屋敷に預けてもらえ、剣術や様々な分野の学を学ぶことができた。

一人では生きていくことはできなかつた。多くの人に助けてもらい、生きていけるように生きる術をたたき込まれて生かされている。

だからこそ、紫緒にとって『助けて』という言葉は何とかしてあげなければならぬという呪いの言葉だ。恩を受けたら返さなければならぬと素直で真面目な本来の性格が顔を出す。

走り続けた先には鬼と二人の少年がいた。

藤重山この山には、人を二・三人喰つた鬼しかいないはずだが、二人が対峙している鬼は50人以上は喰つたと推測される大型の異形だつた。

鬼は、寺の門程もある巨体から幾つもの剛腕が生えていた。鼻から頸にかけては、何重にも腕を巻きつけて鉄壁の守りを築いている。自分の弱点を理解し、能力と共に知性を備えて進化していた。

やつかいだな、と紫緒は幹に身を潜めて様子を窺う。

短髪の少年は、恐怖に呑み込まれて地面に尻をつけ、ガタガタと切つ先の定まらない刀を向けている。

もう一人の少年は、最終選別が始まる前に目が合った狐面の少年だった。短髪の少年の前に立ち、盾となって鬼と対峙している。

その状況に、紫緒はクルイに助けけてもらった時の自分を重ねた。

あの時は、クルイが盾となって紫緒と姉を守り鬼と戦っていた。紫緒はただ震えながら姉を抱きしめているだけだった。

心の底から助けたいと思った人を自分の力で助けられないことがひどく情けなく、それが悔しくて苦しくて、弱者は奪われるだけの人生だと思い知った。

次第に刀を握る力が強くなる。未だ腰を抜かしている少年に立ち上がれと怒りが込み上げてくる。

立ち上がれ、戦え、加勢しろ。恐怖に呑み込まれる程度の覚悟と実力なら最終選別に来るな。

クルイが過去の自分に言ったように、紫緒は心の中で少年に吐き捨てた。

鬼が狐面の少年に何か言い、少年の刀が震えだす。内容は聞こえなかったが、鬼が彼を挑発したと判断した。

彼は走り出し、鬼に斬りかかる。

だが、むやみやたらと感情的に刀を振り回した剣だった。

鬼は、腕を伸ばしては斬られてを繰り返して、彼の視野を狭めていく。

このままじゃあいつ死ぬな。

紫緒は情に至極熱い人間だが、命を懸けた状況に於いては思考はどこか冷めていた。敵しい顔で戦いを観察し、冷静に、彼を囷にして鬼を分析し続ける。

狐面の少年の横腹に鬼の拳が入った。

彼は吹っ飛ばされて木に衝突し、立ち上がることはない。周りには割れた面が散らばり、面が頭を守り緩衝材となったことが分かる。

ああ、気絶したな、と紫緒は分析するのを辞めた。

鬼は下卑た嗤いを上げながら、彼との間を詰めていく。

紫緒はすかさず飛び出した。鬼の背後から跳躍し、静かに剣を振るう。

花の呼吸——伍ノ型 徒あだの芍しゃくやく薬

芍薬の花弁を表す様に、九連撃の斬撃が鬼を襲う。斬撃は頸を覆う剛腕を削いだ後、目玉を一閃した。

「アアアアアアアアアアアアッ!!」

鬼の汚い叫びが山に響く。

「おいっ！ 立てっ！ 走れっ！ 行けっ!!」

紫緒は、呆然と座り続けている短髪の少年を睨んだ。

少年はよろけながらも立ち上がり、紫緒が指し示した方向へ走りだす。

鬼は斬られた腕を再生させながら、痲癩を起した子供の様に怒りを撒き散らす。

「喰ってやる!! お前ら鬼狩をばらばらに引き裂いてぐちゃぐちゃにして喰ってやる!!」

握りしめた拳を振り上げて地面を殴打するが、紫緒は既にその場から消えていた。気絶した少年を背負い、響き渡る鬼の雄叫びを耳にしながら紫緒はそつと森の奥へ姿を消した。

——!! —— 兄ちゃんっ!!

死んだ弟の声が聞こえ、炭治郎はとっさに飛び起きた。

手鬼から逃げ切った紫緒は、少年の頭の傷を治療しながら辺りを警戒していた。

血の匂いに誘われて、飢えた鬼が絶好の機会と襲ってくる。

紫緒は笑みを携えて刀を構えた。心を乱すことなく余裕をもって鬼を殺していく。幼い頃とは違い、紫緒は経験と知識と知恵から最適な体の動かし方を導き出していた。

最期の一匹の頸を刎ね、紫緒は未だ眠りこける少年に冷笑を向ける。

さつさと起きろ、石投げんぞ。そう物騒なことを考える程度には少年の危機意識の低

さが気に入らなかった。

最終選別に行く少し前の事だ。

紫緒が一人でいる時に限り、どこからか剛速の石が投げつけられる訓練が突如始まった。始めは一石目で気絶していたが、何度も投げられるにつれ、投石前の殺気を感じるようにになった。躲す石の数が増えるにつれて難易度は上がり、それは眠る間も続いた。

結果、避けることと殺気を読むことに関しては、紫緒は寝ていても体が反応するようになった。

手近な石を掴み、当時の仄暗い思い込めて少年に投げつける。

瞬間、少年は石が当たる直前に跳び起き、殺気の元へ視線を合わせた。

「随分眠ってたけど、もう大丈夫なのか？」

白々しくも、紫緒は笑顔と柔らかい声音で話しかける。

「えっと、ここは？」

少年は呆けた声で問いかけた後、気絶する直前の光景を思い出して追い詰められた声を上げた。

「大丈夫だ。殺ってないけど深手は負わせた。完全に回復するまでにはまだ時間がかかる」

「そう、なのか……?」

「そうなんだよ。じゃあ君も起きたことだし、おれはあの鬼を殺しに行く。じゃあな」

「なっ!! 待つてくれ!!」

「うん?」

「俺も連れてつてくれっ!!」

「はあ?!」

「あの鬼は俺が倒したいっ!! 鱗瀧さんの弟子や喰べられた子供たち、真菰の手足の仇を撃ちたいんだ!!」

勢いよく袖を引かれ、必死に懇願する少年に紫緒は面食らう。

「でもお前、そんなんじゃ死ぬぜ?」

——鬼の挑発に乗ってる奴が、鬼を倒すとか大口叩いてんじゃねえぞ。

紫緒は、本心を隠して少年の頭を指した。

怪我人は安静にしてろと動作が語るが、少年は鼻をひくつかせた後、意味を間違えることなく本心に言い返した。

「許せなかつたんだ。鱗瀧つろたきさんと真菰まごもを嗤わらって貶おとしすあいつが。ぐあーって許せない気持ちになつたんだ」

紫緒の本音と建て前を見抜き、建前を飛び越えて本音に本心をぶつけてきた相手に紫

緒は顔を歪めたくなった。

「……その鱗瀧さんと真菰はお前の師範か何かか？」

「俺はお前っていう名前じゃない。竈門かまどたんじろう炭治郎だ！」

「じゃあ、竈門」

「炭治郎でいいですよ。あなたは？」

「藤咲紫緒。おれも紫緒でいいよ。敬語もいらぬ」

「わかった」

「で、話戻すけど師を侮辱されてあの様なのか？」

見てたんだ、と棘を含めて紫緒は言う。

「我を忘れて、とか言うなよ。それはお前の師を侮辱することになるからな。感情も制御できないお前の未熟さは育手の質の低さを表す」

「そんなことはないっ!! 鱗瀧さんも真菰も錆兎もすごい人たちだっ!!」

「このでこっぱちめ。それをお前が貶めてるってことが分かんねえのか。そうやってすぐに熱くなるのをお前の育手は指摘しなかつたのかって言ってるの。師範方がお前にかけてくれた時間と手間と期待を『お前の死』という絶望で返そうってのか？」

「そんなわけないだろ!!」

「だろうな、と紫緒は頷き「ある人の受け売りなんだけどな」と炭治郎に説く。

『戦いにおいて冷静さを失った奴は死ぬ』そんなで『人間の力は、感情と能力が一体となった時に全開して発揮される』って教わった。つまり『冷静に想いを燃やせ』ってことだ。今の炭治郎は、感情だけが先走って視野が狭くなってるんだよ。あいつに何を言われたか知らないけどさ、挑発されてそれに乗って死んじまったら今までお前に投資してくれた人と努力してきた自分への最大の裏切りだろ。師範たちはお前をここで殺す気はない」炭治郎の丸く大きな目が紫緒を見つめる。自分の言葉が炭治郎の心に響いたことが紫緒にはわかった。

「鱗瀧さんたちはどんな人たちなんだ。どんなことを教えてくれたんだ？」

優しい声に、炭治郎は素直に育手である鱗瀧左近次と真菰を思い浮かべる。

「鱗瀧さんが俺に呼吸や戦い方を教えてくれて、真菰が呼吸の使い方を教えてくれたんだ。あ、真菰っていうのは鱗瀧さんの弟子で鱗瀧さんのお手伝いをしてる人なんだ。ここに来る前に『ただいま』を言いに戻ってきて送り返してくれた優しい人なんだ」二人のことを話すにつれて、炭治郎の表情は柔らかくなっていたが、それは次第にこわばっていった。

「だからあいつの言ったことが許せなかったんだ。鱗瀧さんを悲しませるために鱗瀧さんの弟子を狙って喰ったことや真菰の手足を楽しそうに喰ったことがっ!! 真菰は今も、夜になると喰われた手足の先が痛むって魔されてるのに!!」

理路整然としていない炭治郎の話は理解しづらかったが、彼がどれだけ二人の事を大事にしているかは紫緒にも十分に伝わった。

炭治郎の怒りに自分の鬼に対する憎しみが重なり溶け合っていく。話をすべて聴き終えた時には、仇に手を借したいと思う自分がいた。

「善い人たちだな」本心からこぼれ落ちた紫緒の言葉に、炭治郎は自分が褒められたような気持ちになる。

「おれも炭治郎とちよつと似てて、両親を鬼と鬼に協力する人間に殺された。唯一救いなのが姉が生きてること。4年も目え覚まさねえけど」

紫緒は仄暗い思いを目に宿して炭治郎を見た。

「だからおれは怒ってるんだよ。鬼も協力者も、人の不幸を飯にして嗤ってる奴らが憎くて憎くてたまらない。人を害する奴らをどんな形になってもおれは殺し続けるって契約したんだ」

「けい、やく………?」

「炭治郎、おれはその復讐に、手を借すよ」

初めて見る底のない笑みに、炭治郎は背が震えた。

炭治郎を先頭に、手鬼を目指して二人は森の中を駆けていた。空中に鼻をひくつかせて炭治郎は鬼の臭いを辿る。

「こつちだ!!」

臭いの濃さからしてあと少しで鬼の元に辿り着く。吐き気がする臭いに、虫が胸の上を這うような不快な感覚を覚えた。

炭治郎は、鬼に喰われた子供たちを想い闘志を燃やす。

戦うんだ。子供たちみんなの仇を打つんだ！ みんなの魂が帰るべき元に帰れるように！ 戦え！

自分を鼓舞し使命に燃える。少しずつだが炭治郎の走る速度が上がっていく。

逸る思いに「冷静になれ」と後ろから紫緒の声が聞こえた。

炭治郎は、走りながら息を深く吸い、吐き出す。師である鱗瀧の青い刀を握りしめ、心を落ち着かせる。

冷静に心を燃やせ。紫緒の言葉が胸に染みわたるのを炭治郎は実感した。

鬼を追う前、紫緒は炭治郎と戦術を練った。

戦術を立てるためには、自身の情報を相手に伝えなければならぬ。紫緒は連撃に特化した花の呼吸と突きに特化した蟲の呼吸が使えることを伝え、炭治郎の擬音だらけで

理解できない説明に苦勞しながらも水の呼吸と彼の特殊な嗅覺について理解した。

「意味わかんねえけど、匂いだけで隙や感情が分かるって凄い才能だな」

本心からそう思う程度には、紫緒は炭治郎の能力を理解はしても実感はしていなかった。

紫緒が分析した鬼の血鬼術は腕の伸縮である。同時に最大6本の腕を伸縮させて相手を物理的に攻撃する。

推測となるが、腕一本の伸長には限度がある。それを超えるためにはいくつかの腕を一本に合体させることが必要となる。また、鬼の腕は新たに生成されない。巨体を守っている腕の数が、現在あの鬼が発現できる最大の数であると考えている。

「つまり、襲ってくる腕の長さや数には限度がある。腕の数が減ったら腕を合体させて伸ばしてくる可能性があるってことだ」

「なるほどな。紫緒は賢いんだな」

心の底から褒め称える炭治郎に紫緒はいたたまれなくなる。炭治郎を囿にして鬼の能力を引き出したとは口が裂けても言えない。

「炭治郎はまず、鬼の注意を引きつけてくれ。炭治郎に伸びた腕をおれが斬り落としていくから、その間に炭治郎は鬼の死角に入って頸を斬る」

「わかった」

「くれぐれも鬼の前で跳躍しないこと。滞空中は身動きが取れないからな。鬼の腕に捕まるか潰される可能性が高くなる」

「わかった。紫緒、色々考えてくれてありがとう」

「……どういたしまして」

照れたように目を逸らす紫緒に、炭治郎は弟の竹雄を思い出して笑みがこぼれた。

炭治郎は高く跳躍し、土中から伸びる血鬼術鬼の手から逃れる。

「あいつっ！ 目の前で高く飛び上がるな言っただろっ！」

空中で動けない炭治郎に向けて鬼の拳が豪速で殴り掛かる。

紫緒は素早く短刀を抜き、炭治郎を襲う腕へ投げ放った。

短刀は腕に刺突し、拳の速度を僅かに落とす。

炭治郎はその隙を見逃さず、鬼の腕を駆け上がり間合いに入る。

炭治郎の刀から隙の糸が繋がった。炭治郎は刀を振り、鬼の首を一閃する。

水の呼吸——壺ノ型 水面斬りみなもぎ

血飛沫と首が宙を舞い、地面に落ちて転がる。

鬼の体は次第に崩れ始め、腕に刺さっていた短刀も落下した。

紫緒は短刀を拾い上げて笑みをこぼした。短刀を腰に差し、視線をさ迷わせて炭治郎

の姿を探す。居た、と炭治郎を見つけた瞬間、紫緒は呪いたくなるような光景を目にした。

炭治郎は崩れ行く鬼の手を握り、祈るように瞳を閉じていた。

「神様、どうか……。この人が今度生まれてくる時は鬼になんてなりませんように……」

ほとりと、濡れた紙に墨汁を落とした様に、紫緒の心に黒い染みが広がっていく。

鬼と戦っていた時は気にも留めていなかった心臓が、痛いくらいの速さで動き出す。

……何やってんだ？　なんで鬼に慈悲なんてかけてんだ。なんで祈って、こいつを人間扱いしてんだ。

お前もこいつが憎いから殺したんだろ。こいつがどれだけ沢山の人を喰ったと思っ
てんだ。消える間際までこいつに残虐の限りを尽くし、こいつが作り上げた怨恨をその
身と魂に刻むべきだ。

黒くどろどろとした沼に浸かる自分が、お前もこっちの人間だと炭治郎を睨みつけ
る。

紫緒は、視界から炭治郎を消した。絶えず吐血するように、姿を見ると止まらない誹
謗の嘔吐が始まる。

嵐のように暴れだす感情に、紫緒は襟を握りしめてその場から消えた。

——おめでとうございます。ご無事で何よりです。

8日目の朝、紫緒は最終選別が始まる前の地点で炭治郎と再開した。

炭治郎は眉を吊り上げて紫緒を叱る。

紫緒がいなくなつた後、炭治郎は暫くの間、一人で紫緒を探し続けていた。

心の底から心配したという炭治郎の表情かおに、紫緒は素直に申し訳なくなつた。

「ごめん、気をつけるよ」

「わかつてくれたのならいい。もう勝手にいなくならないでくれ」

「……悪かった」

隣にいたカナヲは紫緒を見た。

捻くれた紫緒が同年代の子供に対して素直に謝る姿に、カナヲは凝視せずにはいられなかつた。

話の区切りがついたのを見計らつたように、産屋敷家のご息女とご子息は鈴のような声で紡ぎ始めた。

町に入り、歩き続けると蝶屋敷の屋根が見てくえる。

紫緒はほつと息を吐いて隣を見た。

カナヲはいつもと同じように微笑みを浮かべているだけで、何を考えているのか全くわからない。

だが、カナヲがこの最終選別を受けたという事実は変わらない。それはカナヲが現状の何かを変えたかかったのだと紫緒は推測する。

紫緒は、要点のまとまっていない話は嫌いだ。聞き手がだから何？ と聞き返さなければならぬ話はずるとする。

紫緒は炭治郎の顔を思い浮かべた。彼の話はまとまっていな思いは伝わる。

カナヲが求めているモノを的確に言い当てられる自信はない。それに加えて言いたいこともまとまっていない。それでも紫緒は、今のカナヲに伝わってほしいと口を開く。

「カナヲはさ、ちゃんとした蝶屋敷の一員だから、安心しろ。例えば、何かできてもできなくとも、屋敷の人はみんなカナヲの味方で追い出したりしない。カナヲが負傷して剣を握れなくなったとしても、治療が苦手だったとしても、手伝いも何もできなくなつたとしても、誰もお前を見捨てない。お前はもう胡蝶家の人間だ。みんなから愛されてるって自信を持てよ」

眉を垂らしながら紫緒は無理やりほほ笑んだ。

「お前がいないとみんな心配する。勝手に黙って消えんな」

回し者のおれとは違うんだから。

最期の一言を心の中に押し留め、紫緒はもう一度カナヲを見た。

屋敷の前にはカナエやしのぶ、アオイ、なほたちが顔を出して待っている。

「カナヲ、帰ろう。ほら『ただいま』って言って帰ろうぜ」

紫緒は掌を差し出すが、カナヲはそれをとろうとしない。それは何だというカナヲの視線に、紫緒はため息を吐きながらカナヲの細い腕を掴んで門へと歩き出した。

「ただいまっ！」